

牛頸中通遺跡群Ⅱ

福岡県大野城市大字牛頸所在遺跡調査報告

大野城市文化財調査報告書

第 9 集

1982

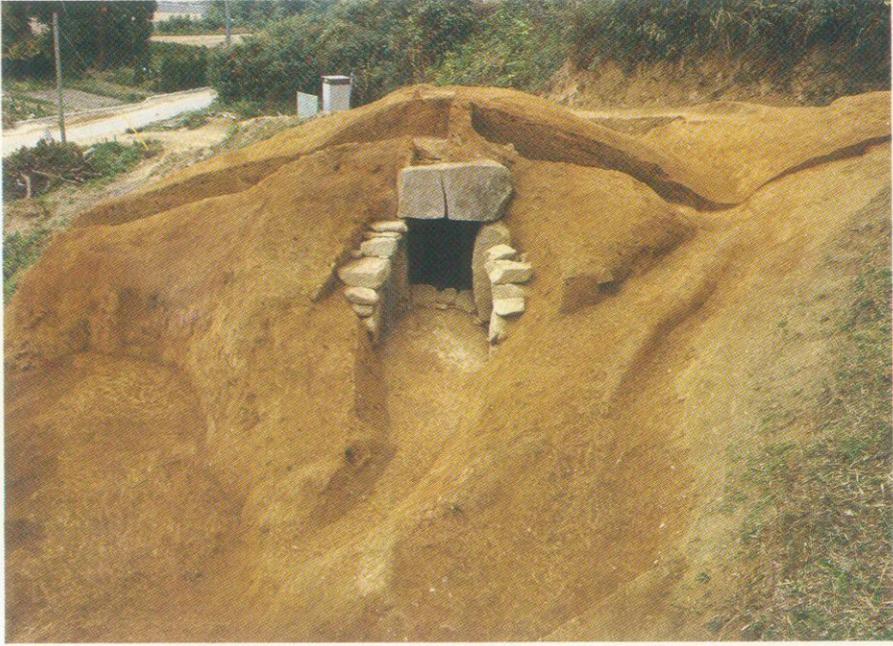
大野城市教育委員会

牛頸中通遺跡群Ⅱ

福岡県大野城市大字牛頸所在遺跡調査報告

大野城市文化財調査報告書

第 9 集



中通古墳

序

牛頸中通遺跡群発掘調査は昭和47年度（第1次）、54年度（第2次・第3次）に実施され、その成果は大野城市文化財調査報告書第4集「牛頸中通遺跡群」として刊行されました。

中通丘陵に南北両支群合わせて18基存在した古墳群も54年度までの調査でほとんど消滅しましたがけれども、群中最大規模の石室を持つ中通古墳が残されたことで、私どももわずかながら安堵し胸をなでおろしたことでした。

しかし、それも束の間、宅地造成計画の変更に伴い、その中通古墳も工事予定区域内に含まれたため、やむを得ず撤去されることとなり、55年秋、発掘調査が行われました。貴重な文化財を保存できなかったことを遺憾に思います。

この報告書は、永久にその姿を消した中通古墳が私どもに残してくれた遺産です。これが広く市民の皆さんや研究者の方々に読まれ、考古学の発展と文化財保護思想普及の一助になれば望外の幸せです。

この報告書が成るまでには多くの人々の御協力を頂きましたが、とりわけ県文化課諸氏、県文化財保護指導委員前田軍治氏、福岡ミサワホーム（株）および竹中・西武共同企業体の関係諸氏、地主の高田増男氏、牛頸区長ほか地元の方々、発掘作業員の皆さんに衷心より感謝の意を表します。

昭和57年 3月31日

大野城市教育委員会

教育長 二宮親卯

例 言

1. 本書は、大野城市大字牛頸所在中通遺跡群の発掘調査報告書である。『牛頸中通遺跡群』（大野城市教育委員会1980）の続編である。
2. 発掘調査及び整理事業は福岡ミサワホーム(株)からの受託事業として、大野城市教育委員会が実施した。
3. 調査関係者は以下の通りである。

大野城市教育委員会	教 育 長	二 宮 親 卯
同	教 育 部 長	後 藤 幹 生
同	社会教育課長	井 原 信 一
同	社会教育係長	赤 星 健 彦
同	社会教育文化財担当	後 藤 秀 規
同	埋蔵文化財発掘調査技師	舟 山 良 一
	補 助 員	高 田 一 弘
	同	佐 藤 昭 則
	同	秀 嶋 和 子

4. 調査に際しては、福岡県文化課技師諸氏をはじめ多くの方々の助言を得た。
5. 牛頸遺跡群主要遺跡分布図は前田軍治氏作成のものを原図とした。
6. 遺物写真は岡紀久夫が担当した。
7. 土器実測・製図、遺物観察表は秀嶋和子・佐藤昭則が、その他の遺物実測・製図を佐藤・舟山が担当した。またヘラ記号一覧表は秀嶋が作成した。
8. 中通古墳石室内赤彩については、福岡県衛生公害センターの森木弘樹・重江伸也・松枝隆彦氏に分析していただき、その結果を本書に掲載することができた。ご好意に感謝したい。
9. 本書の執筆はⅠを後藤秀規、Ⅲ-1)-2の燃焼部・煙出し部を佐藤、その他並びに編集を舟山が担当した。
10. 本書に掲載した地形図には建設省国土地理院発行の2.5万分の1『福岡南部』『不入道』を使用した。

本文目次

	頁
I. はじめに	1
II. 位置と環境	3
III. 調査の結果	6
1) 古墳の調査	6
1. 中通古墳	6
2. 中通S 4号墳	17
2) 窯跡の調査	20
1. 中通D-1窯跡	20
2. 中通D-2窯跡	26
IV. まとめ	36
1) 古墳群について	36
2) 中通窯跡群出土須恵器について	39
3) まとめ	41
付. 大野城市中通古墳壁顔料について	42

図版目次

	本文対照頁
図版 1 (1) 中通古墳調査前	6
(2) 中通古墳調査前	6
図版 2 (1) 中通古墳調査後	6
(2) 中通古墳調査後	6
図版 3 (1) 中通古墳羨道右壁	8
(2) 中通古墳羨道左壁	8
図版 4 (1) 中通古墳閉塞状況	8
(2) 中通古墳閉塞状況	8
図版 5 (1) 中通古墳框石	8
(2) 中通古墳石室	8
図版 6 (1) 中通古墳奥壁	8
(2) 中通古墳左側壁	8

図版 7	(1) 中通古墳墳丘トレンチ(東)	7
	(2) 中通古墳墳丘トレンチ(北)	7
図版 8	(1) 中通古墳周溝埋土堆積状況(東)	7
	(2) 中通古墳墳丘(東から)	6
図版 9	(1) 中通古墳玄室内遺物出土状態	9
	(2) 中通古墳玄室内遺物出土状態	9
図版10	(1) 中通古墳羨道遺物出土状態	9
	(2) 中通古墳羨道遺物出土状態	9
図版11	(1) 中通古墳羨道遺物出土状態	9
	(2) 中通古墳羨道遺物出土状態	9
図版12	(1) 中通古墳羨道遺物出土状態	9
	(2) 中通古墳調査風景	7
図版13	(1) 中通S 4号墳石室全景	17
	(2) 中通S 4号墳奥壁	17
図版14	(1) 中通S 4号墳石室右側壁	17
	(2) 中通S 4号墳鋤先出土状態	17
図版15	中通古墳出土遺物(1)	11
図版16	中通古墳出土遺物(2)	11
図版17	中通古墳出土遺物(3)	15
図版18	中通古墳出土遺物(4)	15
図版19	中通古墳出土遺物(5)	11
図版20	中通古墳出土遺物(6)	10
図版21	上段：中通古墳出土遺物(7)	10
	下段：中通S 4号墳出土遺物	19
図版22	(1) 中通D-1、D-2窯跡気球写真	20
	(2) 中通D-1窯跡全景	21
図版23	(1) 中通D-1窯跡燃焼部	21
	(2) 中通D-1窯跡断面	23
図版24	(1) 中通D-1窯跡最終床面	21
	(2) 中通D-1窯跡床断面	23

図版25	(1) 中通D-2窯跡焚口部	28
	(2) 中通D-2窯跡焚口部	28
図版26	(1) 中通D-1窯跡煙出し部・排水溝	20
	(2) 中通D-2窯跡遠景	27
図版27	(1) 中通D-2窯跡最終床面	28
	(2) 中通D-2窯跡床断面	28
図版28	(1) 中通D-2窯跡全景	28
	(2) 中通D-2窯跡全景	28
図版29	(1) 中通D-2窯跡煙出し部	28
	(2) 中通D-2窯跡排水溝	28
図版30	中通D-1窯跡出土須恵器(1)	24
図版31	中通D-1窯跡出土須恵器(2)	24
	中通D-2窯跡出土須恵器(1)	29
図版32	中通D-2窯跡出土須恵器(2)	29
図版33	中通D-2窯跡出土須恵器(3)	29
図版34	中通D-1窯跡出土蓋杯ヘラ記号	34
図版35	中通D-2窯跡出土蓋杯ヘラ記号	34
図版36	(1) 月ノ浦古墳遠景	3
	(2) 月ノ浦古墳石室	4

挿 図 目 次

	頁
第1図 牛頸窯跡群主要遺跡分布図 (1/2.5万)	2
第2図 上大利日ノ浦遺跡表採遺物実測図 (1/3)	3
第3図 陶質土器実測図 (1/3)	4
第4図 中通遺跡群周辺遺跡分布図 (1/5千万)	折り込み
第5図 中通古墳地形図 (1/200)	6
第6図 中通遺跡群遺構配置図 (1/2千)	折り込み
第7図 中通古墳閉塞状況実測図 (1/60)	7
第8図 中通古墳石室実測図 (1/60)	折り込み

	頁
第9図 中通古墳墳丘断面実測図 (1/60)	折り込み
第10図 中通古墳玄室内遺物出土状態実測図 (1/60)	9
第11図 中通古墳出土遺物実測図 (1/2)	10
第12図 中通古墳玄室内出土須恵器実測図 (1/3)	12
第13図 中通古墳羨道・墓道出土須恵器実測図(1)(1/3)	13
第14図 中通古墳羨道・墓道出土須恵器実測図(2)(1/3)	14
第15図 中通古墳出土遺物実測図 (1/3)	15
第16図 中通古墳玄室出土遺物実測図 (1/3)	15
第17図 中通S4号墳石室実測図 (1/60)	18
第18図 中通S4号墳玄室出土鉄器実測図 (1/2)	19
第19図 中通S4号墳出土遺物実測図 (1/3)	19
第20図 中通D-1竈跡、D-2竈跡位置関係図 (1/200)	21
第21図 中通D-1竈跡実測図 (1/100)	22
第22図 中通D-1竈跡竈内出土須恵器実測図 (1/3)	23
第23図 中通D-1竈跡灰原出土須恵器実測図(1)(1/3)	25
第24図 中通D-1竈跡灰原出土須恵器実測図(2)(1/3)	26
第25図 中通D-2竈跡実測図 (1/100)	27
第26図 中通D-2竈跡竈内出土須恵器実測図(1)(1/3)	30
第27図 中通D-2竈跡竈内出土須恵器実測図(2)(1/3)	31
第28図 中通D-2竈跡灰原出土須恵器実測図(1)(1/3)	32
第29図 中通D-2竈跡灰原出土須恵器実測図(2)(1/3)	33

表 目 次

	頁
表1 中通古墳出土蓋杯ヘラ記号一覧	34
表2 中通D-1竈跡、D-2竈跡出土蓋杯ヘラ記号一覧	35
表3 中通古墳群出土須恵器型式一覧表	36
表4 中通古墳群出土遺物一覧表	37
表5 中通竈跡群出土杯蓋法量表	40
付表 中通古墳群石室プラン一覧表 (1/100)	

I. はじめに

大野城市大字牛頸字中通に所在する中通古墳は、中通の丘陵北端にあり、中通古墳群（総数19基）中最大の墳丘、石室を有する円墳である。

中通古墳群、中通窠跡群の発掘調査は、昭和47年から48年にかけて福岡チブサン会を中心に第1次調査（古墳12基）が行なわれ、54年度には第2次調査（古墳2基、窠跡4基、近世墓8基）が福岡ミサワホーム株式会社の宅地開発に伴う原因者負担事業として、54年4月から9月まで大野城市教育委員会、福岡県教育委員会文化課合同で実施された。

次いで、第3次調査（古墳2基、窠跡1基）は福岡土地株式会社の宅地造成による原因者負担事業として大野城市教育委員会が54年11月から12月まで実施した。

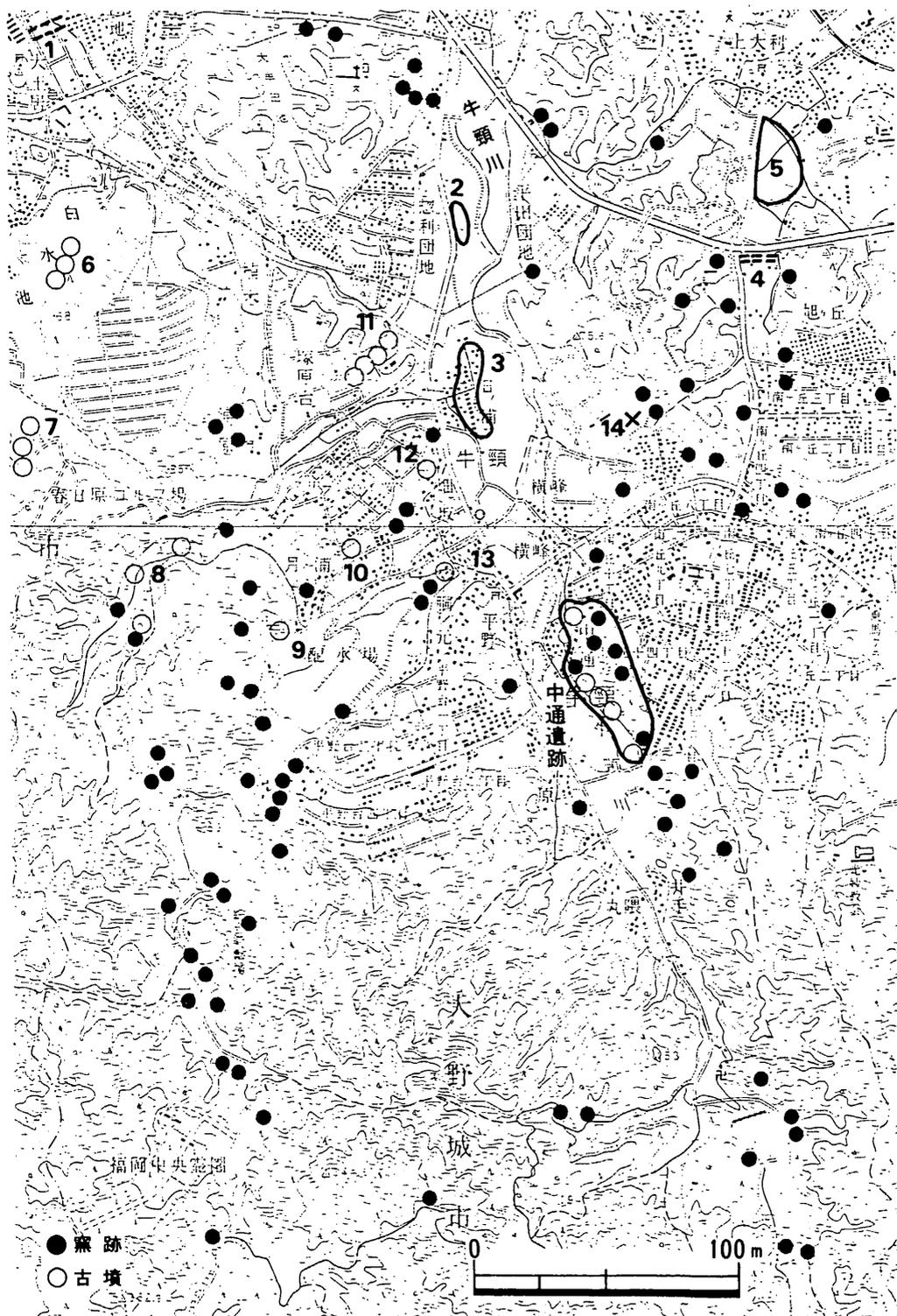
54年度当時の福岡ミサワホーム（株）による開発計画では、中通古墳は開発予定地外にあり、調査対象にはなっていなかった。しかし、その後同社の開発計画が変更され、中通古墳は団地内進入道路の一部に含まれた。また、54年度の第3次調査で発掘調査を実施した中通D-1窠跡の未調査部分も同社の開発予定区域に含まれることになった。中通古墳は古くより開口し、大野城市内では最大の石室をもつ古墳として識者の間でも知られていた。また地元でも幼少時石室内で遊んだ記憶を持つ人もおり、さらに新設された平野中学校にも近く、保存できれば考古学のみならず地域の文化的環境作りに重要な役割をはたすことができると考えられた。そのため、開発者、土地所有者等関係者に保存してほしい旨を伝えたが、理解の一致点には到達できなかった。

昭和55年7月29日、大野城市庁舎内で開かれた開発計画事前審査会で市教育委員会は保存できなければ発掘調査の必要があることを同社に対し申し入れた。市教育委員会は福岡ミサワホーム（株）と協議を続け、仲島周辺遺跡発掘調査の終了後、55年10月3日、原因者負担による受託事業として両者の間に発掘調査委託契約が締結され、10月7日から発掘調査を開始した。調査は11月22日まで中通古墳の調査を、翌56年3月23日から3月31日まで中通D-1窠跡未調査部分の調査を実施した。

整理作業は55年11月27日から56年3月31日まで行い、発掘調査報告書は56年度事業としてこのたび刊行をみただいである。

なお、発掘調査、遺物整理、報告書作成に関しては副島邦弘氏ほか福岡県文化課技師諸氏、同課岩瀬正信氏、福岡県文化財保護指導委員前田軍治氏に多くの指導、助言を受けた。また、中島義勝氏、福岡ミサワホーム（株）、西武・竹中共同企業体、双一開発、常盤工業、山本産業、そして牛頸区長を始め地元の方々にいろいろとご協力いただいた。厚く謝意を表したい。

〈註1〉『牛頸中通遺跡群』大野城市教育委員会1980



第1図 牛頭窯跡群主要遺跡分布図(1/2.5万)

- | | | | |
|-------------|--------------|-----------|-----------|
| 1. 大土居水城跡 | 2. 円入遺跡 | 3. 日ノ浦遺跡 | 4. 上大利水城跡 |
| 5. 上大利日ノ浦遺跡 | 6. 大堤古墳群 | 7. イケ谷古墳群 | 8. 後田古墳群 |
| 9. 小田浦古墳 | 10. 月ノ浦古墳群 | 11. 塚原古墳群 | 12. 畑ヶ坂古墳 |
| 13. 胴ノ元古墳 | 14. 陶質土器表採地点 | | |

Ⅱ. 位置と環境

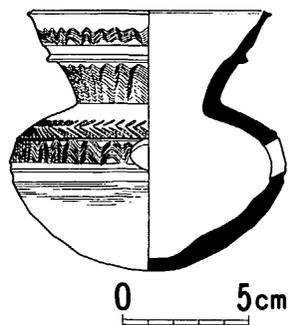
中通遺跡群は九州最大の規模を有する牛頸窯跡群の中心部にあたる福岡県大野城市大字牛頸(字中通及び入道堂、ハセムシ)に所在する。

牛頸窯跡群は牛頸を中心に北は春日市、南は太宰府町の一部を含む東西約4 km、南北4.6 kmの範囲に及び、須恵器窯跡数は300とも500とも言われる。現在まで約60基が調査されている。この牛頸窯跡群の研究史その他については、中通遺跡群の第1回めの報告書である『牛頸中通遺跡群』(大野城市教育委員会1980)に詳しいので、そちらへ譲りたい。

年代的には6世紀中頃(ⅢA期)から8世紀後半(Ⅶ期)まで続くとされるが、下限は今後の調査・研究でまだ下がるかもしれない。^(註1)各時期ごとの窯の数は必ずしも明らかではないが、ⅢA期とされるものは野添6号窯だけのようで、Ⅳ期とⅥ期以降のものが多い。そのうちでもⅥ期以降の窯が圧倒的である。^(註2)それらに比べてⅢB期、Ⅴ期のものは少ない。もちろん、Ⅵ期以降は窯の規模が格段に小さくなるので、生産量と窯数を直接に結びつけるのは危険であるが、牛頸の歴史を考える上では重要であろう。^(註3)^(註4)

生産遺跡である窯跡は数多く知られるようになったが、墓である古墳群についてはそれほど大規模なものは知られていない。中通古墳群が総数19基で最も大きい。他には中通遺跡群の北々西0.3 kmに胴の元古墳(第1図-13)、北西0.9 kmに月ノ浦古墳(同10)、畑ヶ坂古墳(同12)、同じく北西1 kmに円墳4基からなる塚原古墳群(同11)、北西1.5 kmに3基以上の横穴式石室をもつ古墳からなる後田古墳群(同8)、後田古墳群に隣接するゴルフ場内に円墳3基以上からなるイケ谷古墳群(同7)、^(註5)そこから北へ0.6 kmに円墳3基からなる大堤古墳群(同6)など小規模な古墳群が知られているにすぎない。消滅した惣利古墳、水城付近にある吉松古墳を含めても36基をいくつか越える数となる。もちろん、古くに消滅した古墳や、今後新しく発見される古墳もあるだろうが、中通の北西3 kmにある観音山古墳群(総数は100基を越える)などに比べて、この数はそれほど大きいものではない。牛頸周辺では小規模な古墳群が散在しているということになる。

中通古墳群を除いてはまだあまり調査されていないが、月ノ浦古墳については、昭和54年5月簡単にではあるが、観察する機会があった。即ちこの時に通学路の整備工事が始まり、伐採された斜面で、ほとんど破壊された石室の一部が発見され、崩壊の危険もあるということで、できるだけの調査を行なおうとした事があった。しかし、石室を清掃したところ、積石が動き出し、写真撮



第2図 上大利日ノ浦遺跡
表採遺物実測図(1/3)

影にとどめざるを得なかった。南西に開口する横穴式石室と思われた(図版36)。遺物は石室清掃中に須恵器杯身の小破片が出土し、そのたち上がりからⅣ期(6世紀末)に属するものと思われる。

(註7)

以上窯跡と古墳群について述べたが、集落遺跡となると前記二者に比べてかなり不明な状態である。現在知られている比較的大規模なものと思われるものは、牛頸川に添って、中通古墳の北北西1.5 kmに円入遺跡(第1図-2)、それより0.5 km南に日ノ浦遺跡(同3)、丘陵をはさんで東に上大利日ノ浦遺跡(同5)等である。

円入遺跡は56年度に春日市教育委員会によって発掘調査が実施され、調査区では6世紀代の住居跡が数軒検出されている。両日ノ浦遺跡は発掘調査はなされていないが、かなりの量の土師器、須恵器が散布している。^(註9)このうち、上大利日ノ浦遺跡では6世紀後半以降のものが多いようであるが、ほぼ完型の古式の竈が土地所有者によって採集されている(第2図)。5世紀後半代のものであろう。また、現在は丘陵の一部を削り福祉農園になっている地点(第1図-14)から陶質土器が採集されている(第3図)。すぐ近くには、今は消滅したが、奈良時代と思われる窯跡があっただけである。^(註11)

最近、春日市教育委員会の手によって牛頸川中流域の調査が進んでいるが、それによると小規模な集落跡がいくつか発見されているとのことである。また、それより下流にあたる旧米軍基地跡では、九州大学の一部移転に伴い、同大学の手によって発掘調査が進められており、古墳時代後期の集落跡も検出されている。^(註13)

集落跡の調査・研究は今後^(註13)にまたなければならぬ状況だが、当然のことながら、窯跡・古墳と関連づけた研究が必要となろう。

〈註1〉小田富士雄、柳田康雄編『野添・大浦窯跡』福岡県教育委員会 1970

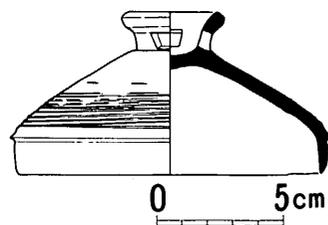
〈註2〉牛頸川上流に建設予定のダム工事に伴って破壊される窯跡は100基を超えることが予想されているが、その大部分はⅥ期以降のものようで、事前調査によって7世紀後半以降の様相がより明確となろう。

〈註3〉註1文献

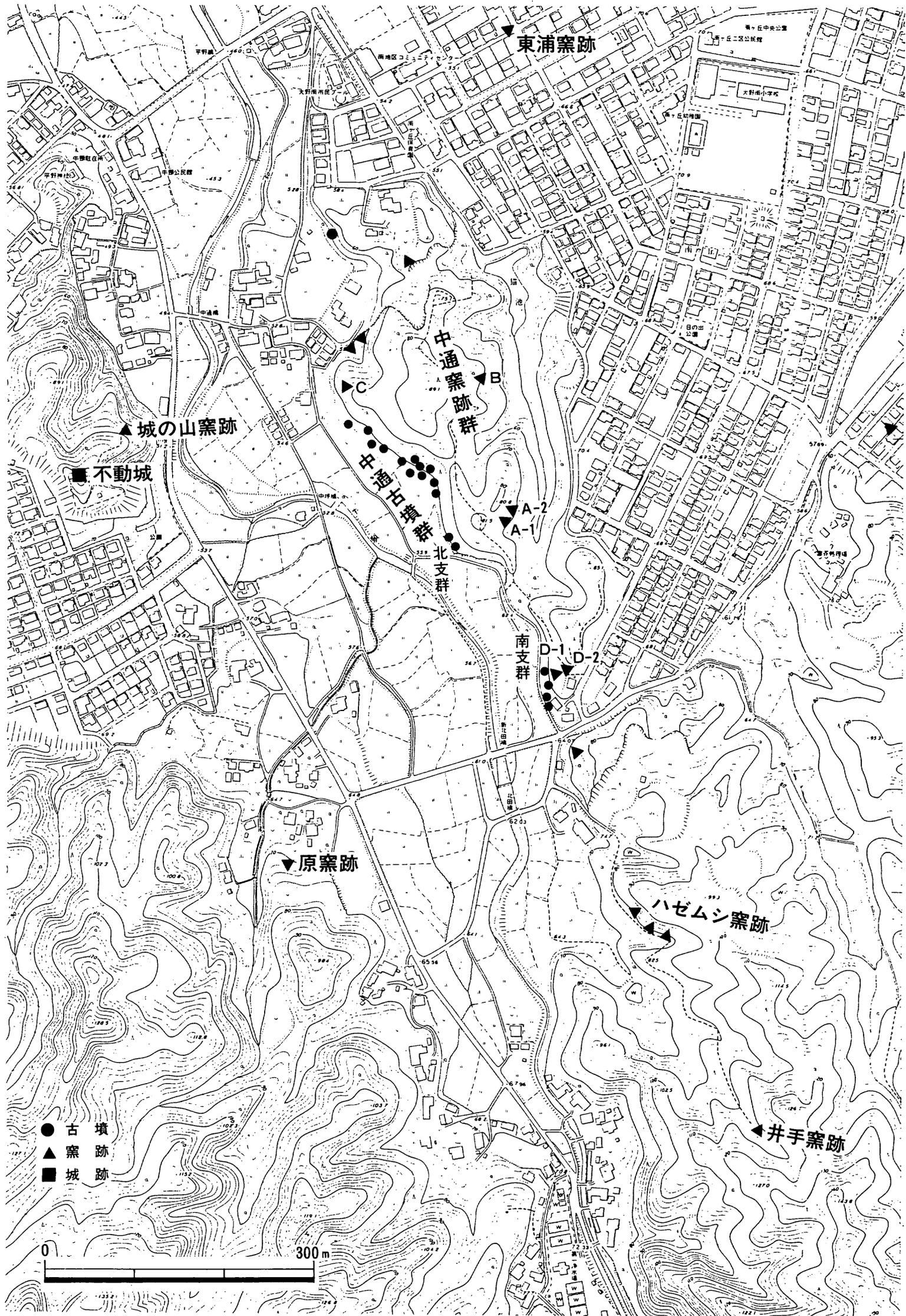
〈註4〉『牛頸中通遺跡群』大野城市教育委員会 1980 P190
に調査・報告されているものについての時期別一覧表がある。

〈註5〉今は故人となられた元福岡県文化課技師の上野精志氏により発見されたものである。

〈註6〉前田軍治氏のご教示によるものである。古墳群は現在谷をはさんで二つの丘陵にわたって知られており、今後の調査によって支群に分けられるであろう。



第3図 陶質土器実測図(1/3)



第4図 中通遺跡群周辺遺跡分布図(1/5,000)

〈註7〉調査に際して土地所有者白水実氏、県文化課技師井上裕宏、同副島邦弘氏、前田軍治氏、市建設課、工業の協力とご理解を得た。

〈註8〉註4報告書ではこの付近一帯が惣利遺跡となっているが、春日市教育委員会では円入遺跡と呼んでいるので、この名をとった。

〈註9〉春日市教育委員会丸山康宏、平田定幸氏のご教示による。

〈註10〉地元在住の井上寅達氏が昭和 年頃採集されて本市教育委員会で寄贈を受けたものである。

竇は口径9.6cm、胴部最大径10.9cm、高さ10.2cmを測る。口頸部は初め外湾してから段を作って外へのびる。口縁端部は上部がやや凹み、内側がわずかに肥厚する。胴部はやや肩が張り、尖り底気味の底部で終わる。口頸部に2条、胴部に1条の櫛描き波状文を施す。頸部のそれは一度に施したのではなく上下2回にわたって施したものである。肩部には向きを変えた2条の刺突文を施す。胴部下位になるとその上部はカキ目を施した後にヨコナデですり消している。更に胴部下位3分の1は入念に平滑化されている。内面は最大径を測る胴部よりやや下まではヨコナデを施し、その下位の調整はそれほど入念ではなく底部は上方より指が棒状工具でなでつけたものと思われる。胎土は密で、灰色を呈する焼成良好のものである。底部に「X」印のヘラ記号がある。陶邑の編年では田辺昭三氏の言うTK 208～23、中村浩氏の言うI型式第3～4段階のものと思われる。

〈註11〉この土器は『地域相研究』第9号（地域相研究会1980年11月）に掲載されたものであるが著者である茂和敏、佐藤昭則君と地域相研究会（代表 中村修身氏）のご理解を得て再録させて頂いたものである。なお、出土地点については茂君に確認したところ、『地域相研究』掲載の地点と若干違うことが判明したので、それを第1図に14として記入した。法量は口径11.9cm、最大径12.7cm、器高6.4cmで、つまみは径4.05cm、高さ1.5cmの四方透しを持つものである。天井部外面はカキ目状の調整を施し、約5分の3より上部はその上から強い回転ナデを施している。胎土は細白砂粒を少量含むが密で、内面灰色、外面暗灰色、断面暗紫色を呈して焼成堅緻である。

〈註12〉春日市教育委員会丸山康宏、平田定幸氏のご教示による。

〈註13〉九州大学春日原地区埋蔵文化財調査会刊行の現地説明会資料による。なお調査中の西健一郎、赤崎敏男氏にご教示を受けた。

Ⅲ. 調査の結果

1) 古墳の調査

1. 中通古墳

(註1)

古くから開口しており、地元の人々は幼少時中で遊んだと言う。調査によって古墳時代の遺物はもちろん、中世の土器、江戸時代の寛永通宝、更に明治7、8年の銅貨も出土しており、古墳は比較的早くあけられ、それ以後開口されたままであったことが推測される。

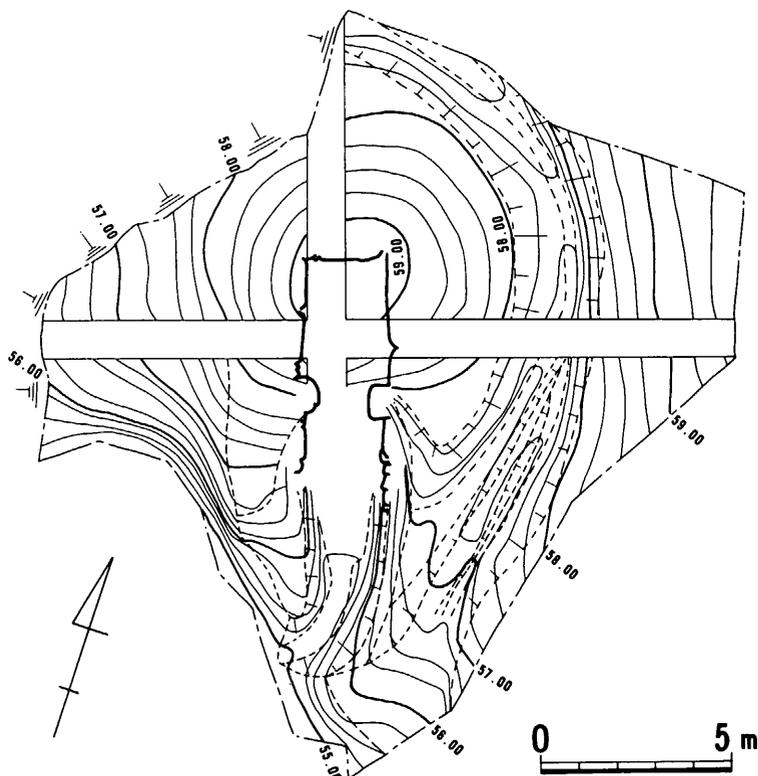
立地

中通遺跡群が占拠する丘陵は、14号墳からC窯付近（いずれも前回報告）が西に張り出してあり、その北は一担谷となり、北側でまた張り出す。その丘陵の南西斜面に中通古墳は立地す

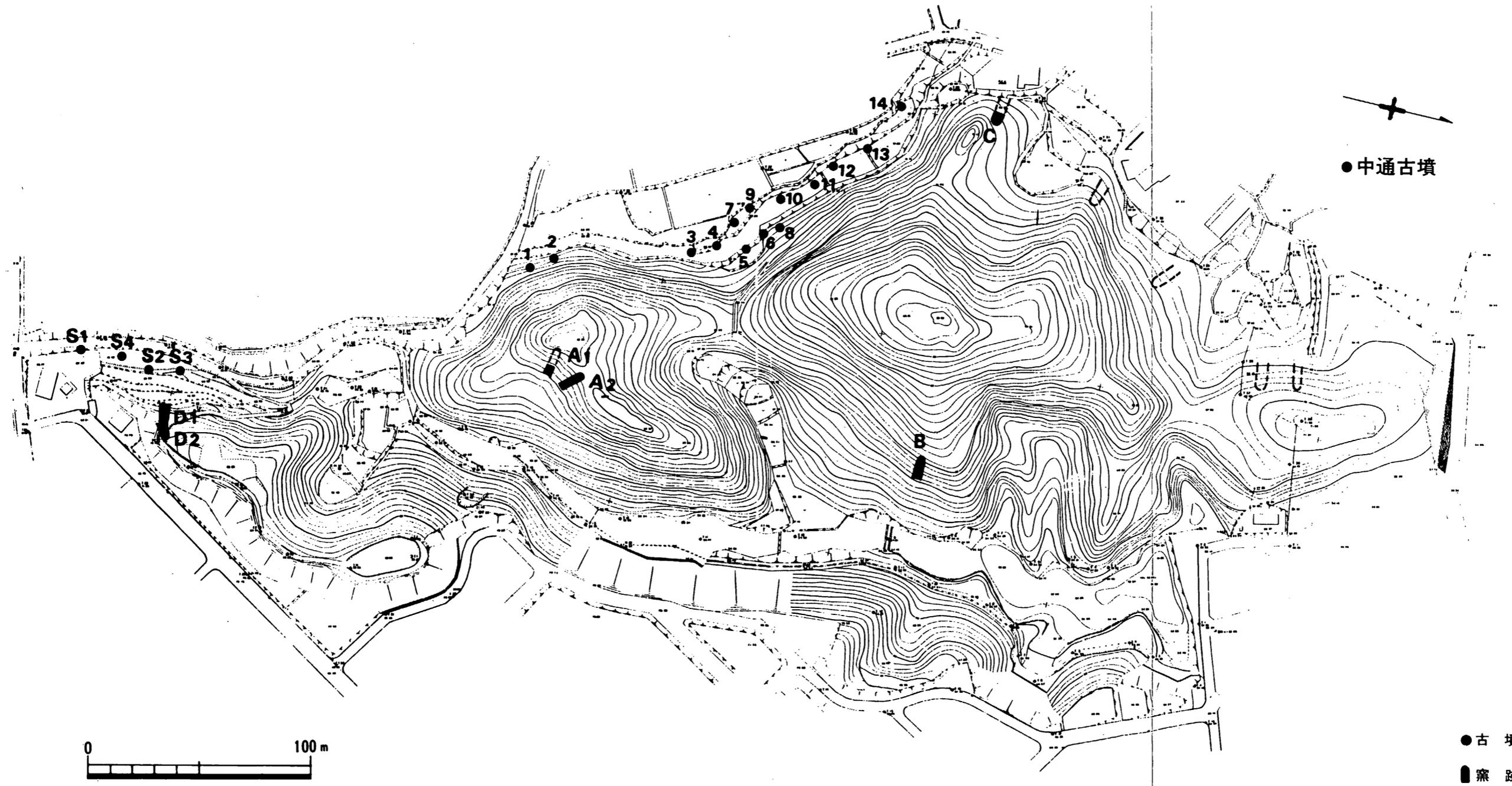
る。石室床面は標高55m付近である。西120mに牛頸川が北流するが、牛頸川の河岸段丘上の丘陵にあたる。既に調査された古墳群の最も北に位置する14号墳から北へ約200mの地点で、他の古墳と同様、丘陵の斜面にあって、決して尾根上にはない。

墳丘

調査時は荒地であったが、以前開墾されたことがあり、また、石室の後にあた



第5図 中通古墳地形図(1/200)



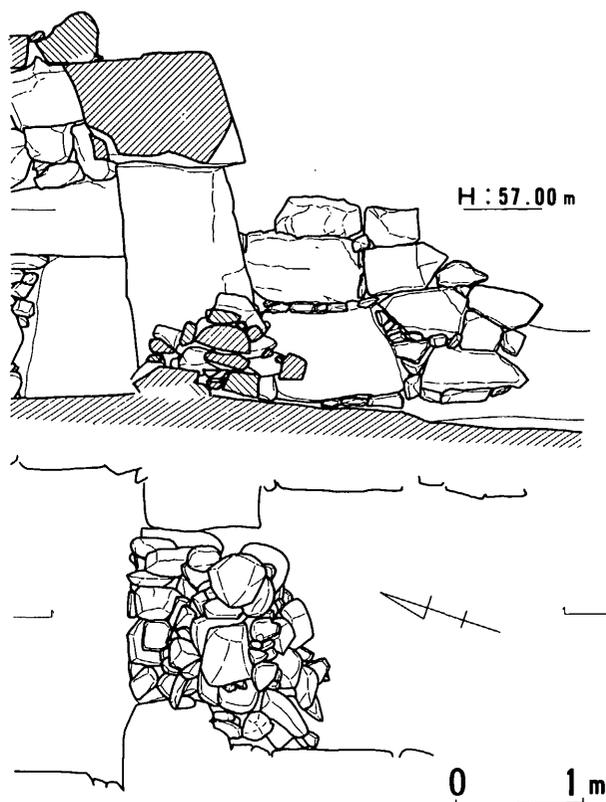
第6図 中通遺跡群遺構配置図(1/2,000)

る部分と墓道左手が土取りによってかなり大きく削りとられ、墳丘の規模は明らかではなかった。

整地された北東側の土を除去すると孤状にめぐる周溝が確認された。西側は水田に面しており、周溝はない。石室中心から東側周溝底まで約5.5 m、周溝外側肩部と思われる部分まで約6.5 mを測る。西側は周溝がなく、盛土が中心から約8 m続いている。その先は崖面となっていて現在では知ることができない。従って、墳丘規模は西側では明らかにすることはできないのであるが、東側周溝底と同じレベルを西側で求めれば、中心から約5.9 m付近となる。墳丘上部が流れたであろうことを考えれば、本来は中心から東側周溝底までの距離約5.5 mと近い数値が求

められるのではないかとと思われる。従って、墳丘の規模として、周溝底で直径約11mという数値が考えられる。現在の高さは周溝底から約1.9 mである。西側の墳丘がやや長く観察できるのは、古墳築造に際してまず山側を削り谷側を少し埋めて平坦化を図ったことによるものではなかろうか。No1 トレンチの土層観察によれば、旧表土上の盛土から墓壇を掘り込んだことがわかるのも上記のことを裏づけることになる。即ち古墳築造の順序を復元すれば、まず山側の斜面を地山まで削り、その土を谷側に流して平坦化を図り、それから墓壇を掘り始め、石室を築いていくということになる。現在は墳丘の土が一部流されているので、水田側である西側が東側に比べて墳丘が広く楕円形を呈することになる。

盛土は石室構築に伴ってかなり整然と積まれていったようである。東側は周溝内側に土留めの盛土を行なって墳丘を築いていったことがわかる。また、周溝埋土最下層は墳丘盛土と判別しにくく、一度掘った周溝を墳丘築造の都合で少し埋めてしまう結果になったようにも観察できるが、一応墳丘の流れ込みと解釈した。



第7図 中通古墳閉塞状況実測図(1/60)

石 室

南々東に開口する（主軸N20°W）両袖単室の横穴式石室である。玄室はほぼ長方形を呈し、長さは奥壁に向かって右側壁長3.35m、左側壁長3.10m、幅は奥壁側で2.25m、玄門側で2.4m、高さ2.6mを測る。

奥壁は幅・高さとも2mを越える大石を据え、その上に高さ40cmほどの石をのせて、小ぶりの石をはさんで天井石となる。右側壁は大石を2石据え、次にこれもかなり大きめの石をのせる。2段めまではほぼ垂直に積んでいるが、3段め以後は石を順次小さくさせながら徐々に前にせり出させながら5段まで積んでいる。左側壁もやはり腰石として大石を2石据える。腰石の高さが違うため玄門側で6段、奥壁側で5段積んで天井石をのせている。右側壁と同様3段め以後は石をしだいに小さくさせながら前にせり出させている。床面は奥壁側で部分的に敷石が残るが、他は完全に荒らされていた。特に奥壁側半分は深さ15cmの大きな凹みがあった。石室内の埋土は約60cmで、埋土中には木炭などの炭化物が比較的多いのが目についた。後述するように後世の遺物も出土していることから、古墳として使われなくなってからある時期には人が入り込んだことが知られる。

袖石は高さ1.8m以上の大石を用い、右袖で60cm、左袖で65cm内側に出している。この袖石に直接巨大な楣石がのる。楣石は既にほぼ中央から割れており危険な状態であった。そのため、この上の部分の墳丘調査はさし控えた部分もある。楣石はほぼ同大の3石からなる。この結果、玄門はいずれも中央部で幅1.7m、高さ1.6mを測るものとなる。

羨道積石は玄室側壁とほぼ平行に直線的に築かれている。右側で袖石より2.3m、左側で約2mを測るものとなる。高さは玄門側が高く、徐々に低くなる。築造当初のものと大差ないのではないかと考えられる。

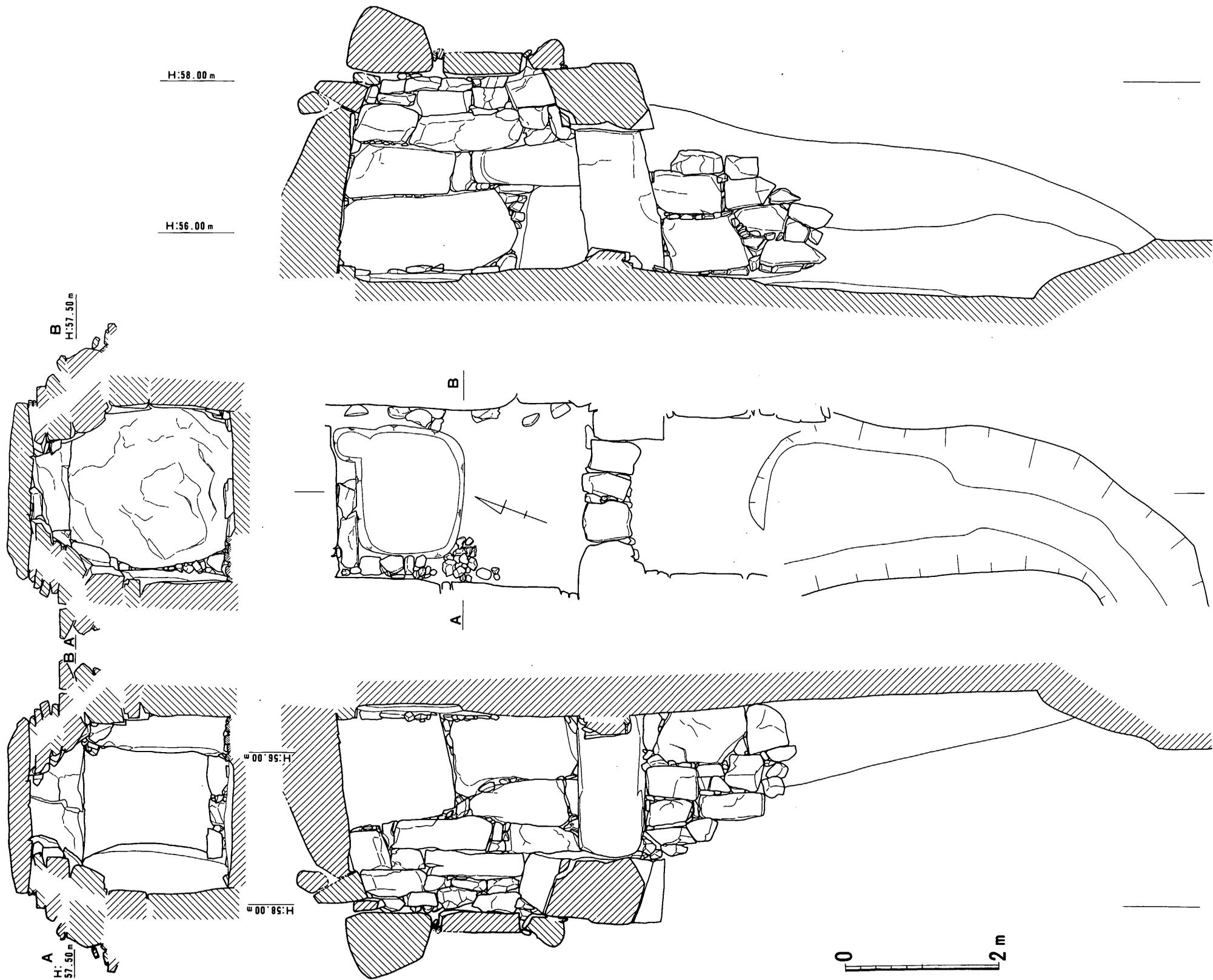
墓道は初め石室と平行にまっすぐ延びるが、途中から谷側である西へ曲がり、先は削りとられている。その距離は約6mである。

閉塞は楣石上で行なわれていた。径50cmほどの石もいくつか混ざりますが、人頭大、あるいはそれより小さめの石を多用し、高さ約0.5mほど残存していた。

石室を構成する石のうち、奥壁にのる石と、玄門右側壁4段めの石、それと天井石に赤彩が認められた。後述するが、分析の結果酸化鉄と判明した。その他の石も原表面ははく落したり、煤の見られる部分が多く見られるので、本来は玄室内部全体が赤く塗られていたものと推測される。

以上、石室は全体的にかなりしっかりと作られたものである。

遺 物



第8图 中通古坟石室实测图(1/60)

H:59.00 m
H:58.00 m
H:57.00 m

2トレンチ

1トレンチ土層表

- | | |
|---------------------|---------------|
| ① 表土(黒色土) | ⑲ 白褐色土 |
| ② 淡褐色土 | ⑳ 青色粘土まじり白褐色土 |
| ③ やや明るい濁褐色土 | ㉑ 褐色土 |
| ④ 濁褐色土 | ㉒ 白色まじり暗褐色土 |
| ⑤ 暗褐色土 | ㉓ 白褐色土 |
| ⑥ 白まじり暗褐色土(3トレンチの②) | ㉔ 白色まじり褐色土 |
| ⑦ 白色まじり暗褐色土 | ㉕ ㉔よりやや白い |
| ⑧ やや濃い暗褐色土 | ㉖ 白褐色土 |
| ⑨ 白褐色土 | ㉗ 白褐色土 |
| ⑩ 白褐色土(3トレンチの③) | ㉘ ㉔よりやや白少し |
| ⑪ 白色まじり褐色土 | ㉙ 暗褐色土 |
| ⑫ やや白色多い暗褐色土 | ㉚ 褐色土 |
| ⑬ 暗褐色土(3トレンチの⑤) | ㉛ 白まじり暗褐色土 |
| ⑭ 暗褐色土 | ㉜ 暗褐色土 |
| ⑮ 白色まじり暗褐色土 | ㉝ 白褐色土 |
| ⑯ 暗褐色土 | ㉞ 暗褐色土 |
| ⑰ 暗褐色土 | ㉟ ㉜と同じ |
| ⑱ 白色まじり暗褐色土 | ㊱ 白まじり褐色土 |
| ⑲ やや白色まじり暗褐色土 | ㊲ 旧表土(暗褐色土) |

2トレンチ土層表

- | | |
|------------|---------------|
| ① 黒色表土 | ⑲ 白褐色土 |
| ② 淡褐色土 | ⑳ 白まじり赤褐色土 |
| ③ 暗褐色土 | ㉑ 白褐色土(地山、マサ) |
| ④ 暗赤褐色土 | ㉒ 粘質赤褐色土 |
| ⑤ 白まじり褐色土 | ㉓ 暗赤褐色土 |
| ⑥ 白褐色土 | ㉔ 赤褐色土 |
| ⑦ 白まじり褐色土 | ㉕ 白まじり褐色土 |
| ⑧ 暗褐色土 | ㉖ 白まじり褐色土 |
| ⑨ 暗褐色土 | ㉗ 暗褐色土 |
| ⑩ 白まじり暗褐色土 | ㉘ 赤褐色土 |
| ⑪ 白褐色土 | ㉙ 白まじり赤褐色土 |
| ⑫ 暗赤褐色土 | ㉚ 白褐色土 |
| ⑬ 白まじり暗褐色土 | ㉛ 白まじり赤褐色土 |
| ⑭ 白まじり暗褐色土 | ㉜ 白まじり赤褐色土 |
| ⑮ 白褐色土 | ㉝ 白褐色土(地山、マサ) |
| ⑯ 暗褐色土 | ㉞ 赤褐色土 |
| ⑰ 白まじり暗褐色土 | |

3トレンチ土層表

- | | |
|------------|------------|
| ① 表土 | ⑬ 赤褐色土 |
| ② 白まじり暗褐色土 | ⑭ 白まじり赤褐色土 |
| ③ 白まじり暗褐色土 | ⑮ 暗赤褐色土 |
| ④ 白褐色土 | ⑯ 白まじり褐色土 |
| ⑤ 暗褐色土 | ⑰ 赤褐色土 |
| ⑥ 白まじり暗褐色土 | ⑱ 赤褐色土 |
| ⑦ 暗褐色土 | ⑲ 赤褐色土 |
| ⑧ 白まじり褐色土 | ⑳ 暗褐色土 |
| ⑨ 暗褐色土 | ㉑ 濁褐色土 |
| ⑩ 白褐色土 | ㉒ 暗褐色土 |
| ⑪ 暗褐色土 | ㉓ 暗褐色土 |
| ⑫ 暗褐色土 | ㉔ 黒褐色土 |
| ⑬ 白褐色土 | ㉕ 暗褐色土 |
| ⑭ 暗褐色土 | ㉖ 濁褐色土 |
| ⑮ 暗褐色土 | ㉗ 濁赤褐色土 |
| ⑯ 青灰色粘土 | ㉘ 暗褐色土 |
| ⑰ 暗褐色土 | ㉙ 暗赤褐色土 |
| | ㉚ 濁褐色土 |

H:59.00 m
H:58.00 m
H:57.00 m

1トレンチ

3トレンチ

0 2 m

第9図 中通古墳墳丘断面実測図(1/60)

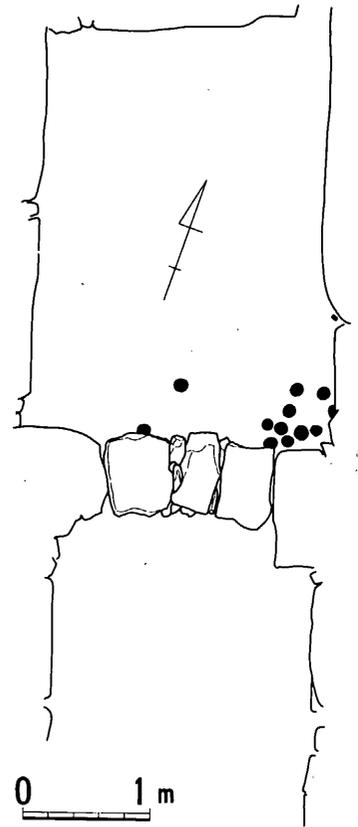
出土状態

石室は早くから開口していたため、遺物の出土もあまり期待できなかったのであるが、玄室奥側半分を除いて比較的多くの遺物の出土を見た。まず、玄室内出土遺物を見ると、玄門を入れて右隅を中心に杯身と杯蓋がほぼ原位置を保ったと思われる状態でまとまって検出された(図版9)。その他の土器、鉄器類は確実に原位置を保ったとは断定できない。黒色土器は床面からわずかに浮いた状態で、同じく瓦器椀は床面から約30cm浮いて検出された。

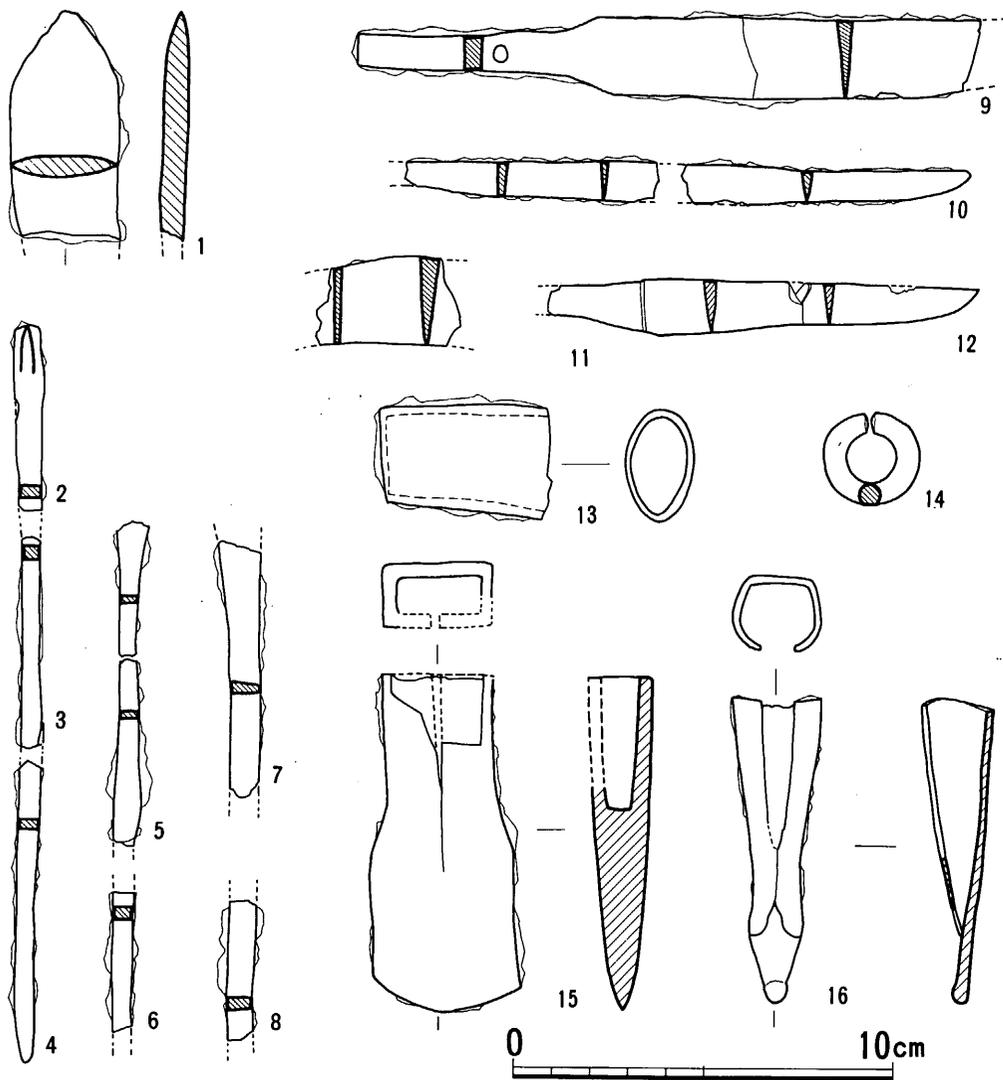
羨道でも比較的多くの遺物が出土したが、それらは雑然としており、原位置は保っていないことが看取された(図版10~12)。本古墳出土の古い時期の土器はすべて羨道出土であることから、これらは追葬時に玄室内から外にとり出されたものであることが想像できる。また、杯身の一部は閉塞石にのるものがあることから、追葬時には閉塞石のすべてをとりはずしたものではないことがわかる。羨道から墓道にかけての部分では明治初めの銅貨も出土している。

出土遺物を列挙すれば以下の通りである。

須恵器	杯(蓋・身)	28
	椀	3
	高杯	5
	壺	5
	平瓶	1
	甕	1
	その他	2
土師器	皿	2
	椀	2
黒色土器	椀	1
瓦器	椀	1
鉄器	斧	1
	石突き	1



第10図 中通古墳玄室内遺物出土状態実測図(1/60)



第11図 中通古墳出土遺物実測図(1/2)

- 刀装具 1
- 刀子 4
- 鉄鏃 3以上
- 装身具 金環 1

玄室内出土遺物

鉄器 (第11図)

刀子 (9) 9は残存長16.5cm、茎長5.7cmを測る。背は平造りで厚さ0.4cmである。刃部断

面は二等辺三角形を呈する。茎に径4mmの目釘穴を持つ。

斧 (15) 長さ9.8cm、刃部幅3.9cm、袋部幅2.9cmを測る。袋部は長さ3.5cmで断面が長方形をなす。袋部は折り返したと言うより切れ目を入れた感があって、通常のものと同様相を異にする。

石突き (16) 長さ8cm、袋部上端幅2.4cmを測る。袋部は折り返しており、断面は隅丸の五角形を呈する。先端が錆のため明確ではない。

鏃 (2~4) 接合するものかもしれない。方頭斧式に属するものであろう。茎は断面長方形を呈する。

不明品 (11) 断面の一方が長方形、一方が二等辺三角形を呈するので刀子の部類と思われるが、形態的に見てやや疑問が残る。残存長3.8cmである。

須恵器 (第12図)

杯蓋 (1~9) 最大径が10cm前後のもので、身受けのかえりが外にでるもの(1.2)と出ないものがある。ヘラ削りは施さない。

杯身 (10~17) かえりのなくなったもので、口径はいずれも10cmに満たない。口縁端部がやや外に張り出すもの(10・17)とそうでないものがある。体部にわずかながら段の有するもの(13~15)がある。底部はヘラ切り後粗くナデるだけである。上述の杯蓋とセットをなすものであろう。なお、杯蓋、杯身ともに全てにヘラ記号がある。

椀 (19) 4分の1破片からの復元である。2本の沈線をもつ。

壺 (18) 同じく4分の1破片からの復元である。口縁はほぼ直に立ち上がり、内外面をナデている。円孔を持つ耳はしっかりしている。

土師器 (第16図)

皿形土器 (47) 底部は平担ではないが、回転糸切りである。

杯形土器 (48) 口径15cmを測るもので、皿形土器同様底部は糸切りである。

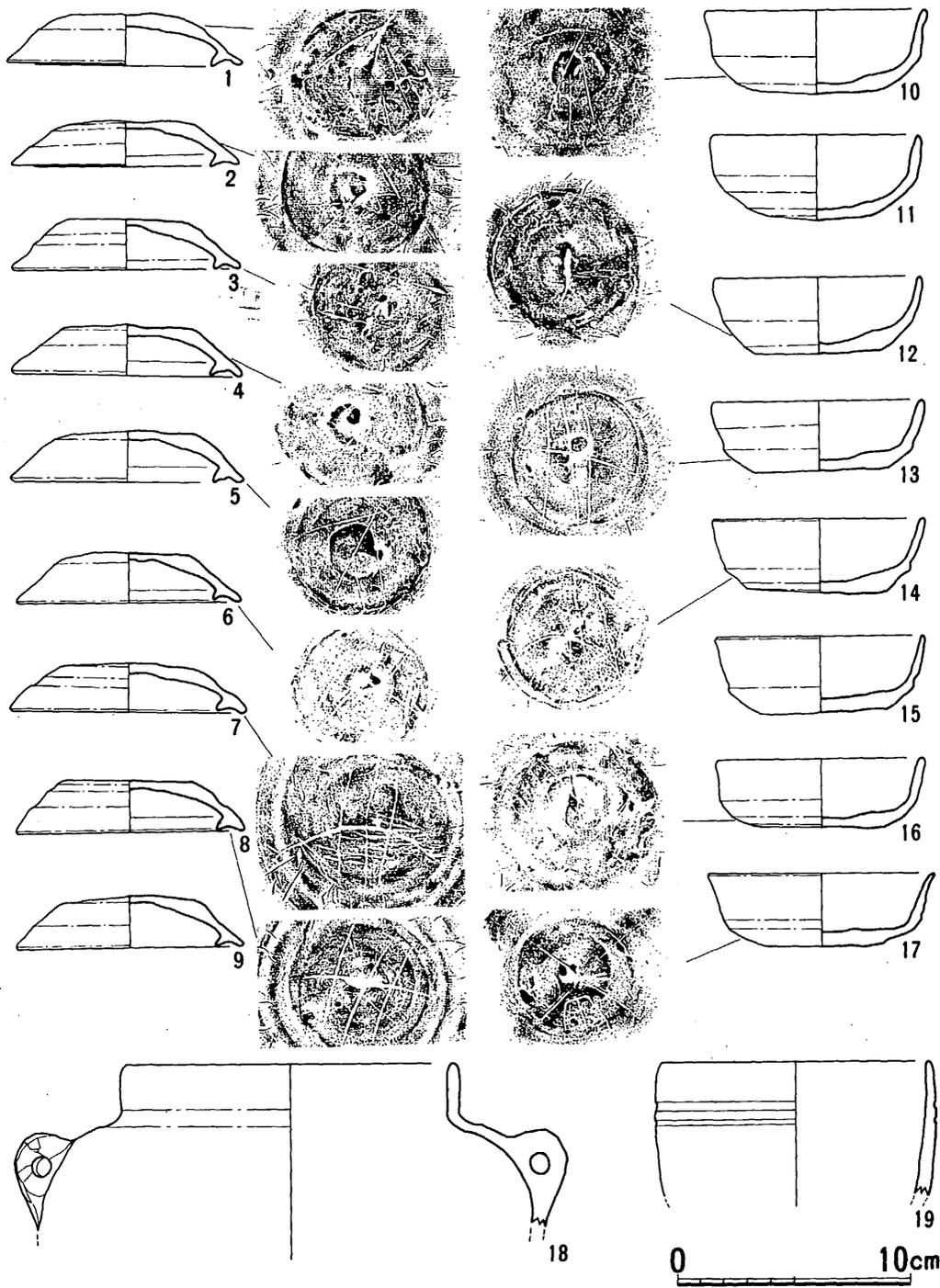
その他 (49) 椀のようでもあるが、器種がはっきりしない。

黒色土器

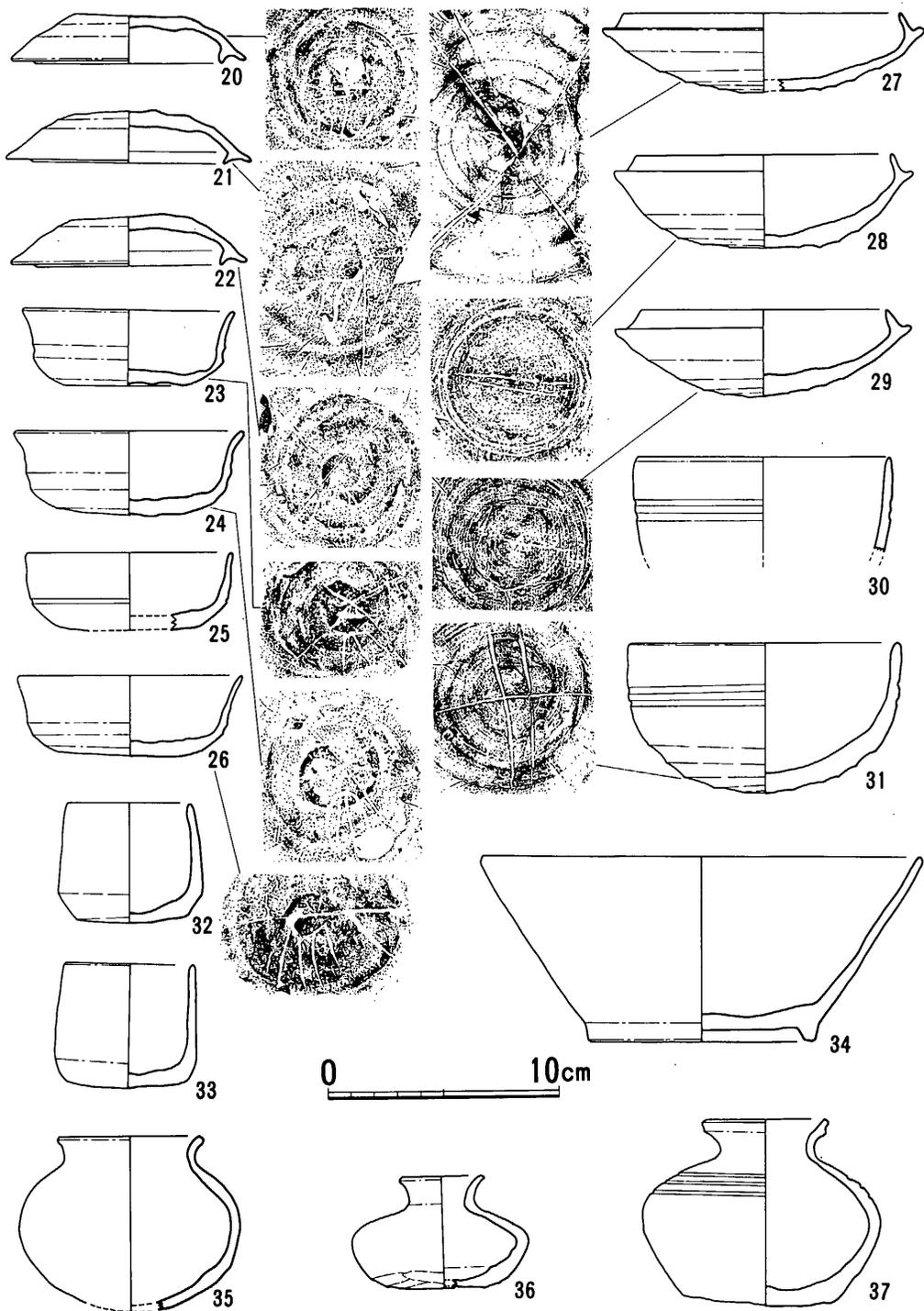
椀 (50) 内面黒色の椀で、体部は丸味を持つ。

瓦器

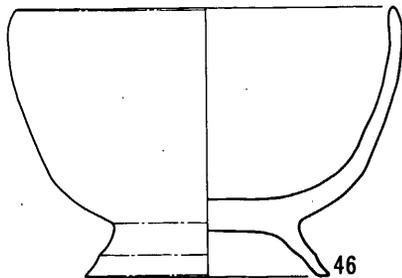
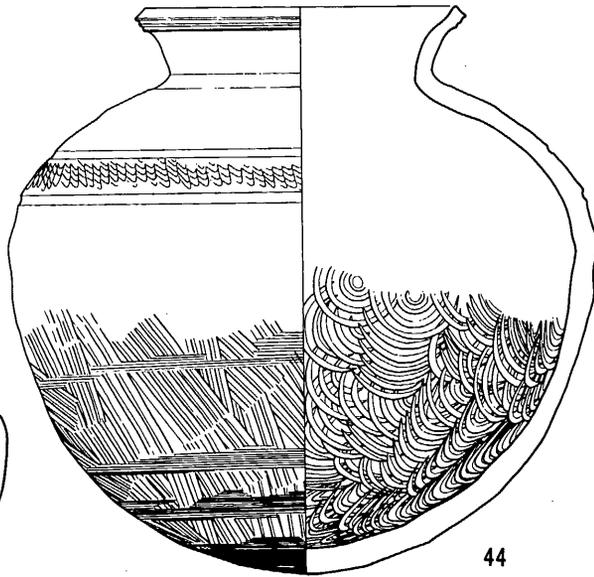
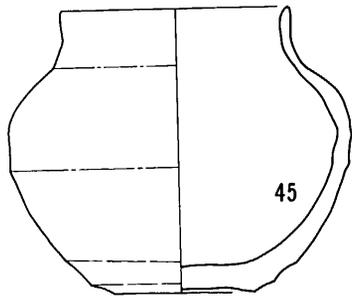
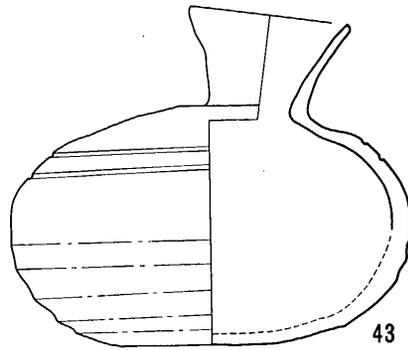
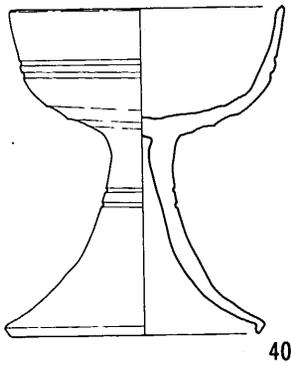
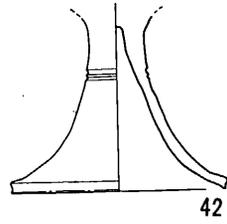
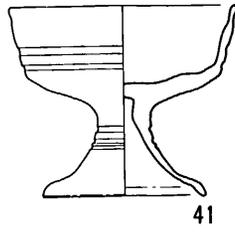
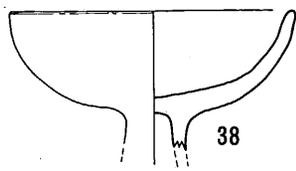
椀 (51) ややひずんでいるが完形の椀である。内面全体と外面は口縁部付近が黒色化している。内外面ナデているが、外面の黒色化していない部分は凹凸激しく、一部指押痕が残る。全体的に粗雑な作りである。



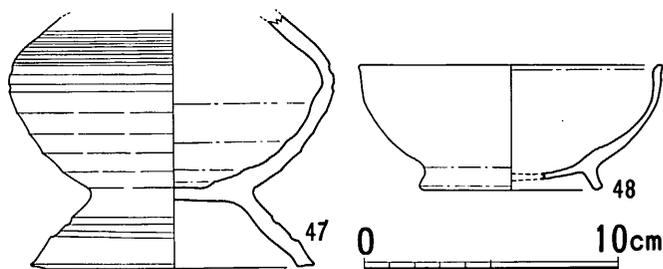
第12图 中通古墳玄室内出土須恵器実測図(1/3)



第13図 中通古墳築道墓道出土須恵器実測図(1)(1/3)



第14图 中通古墳羨道墓道出土須恵器実測图(2)(1/3)



第15図 中通古墳出土遺物実測図(1/3)

羨道、墓道出土遺物

装身具 (第11図)

金環 (14) 環部外径 2.6 cmを測る。両面とも中心近くが腐食している。

鉄器 (第11図)

鏃 (1, 5 ~ 8) 1は広峰両丸造りのものである。その他はいずれも先端を欠く。

刀子 (10, 12) 10は刃部の一部と、茎部先端を欠く。10は刃部長 8.8 cmを測る。茎部に残るのは鹿角と思われる。

須恵器 (第13~14図)

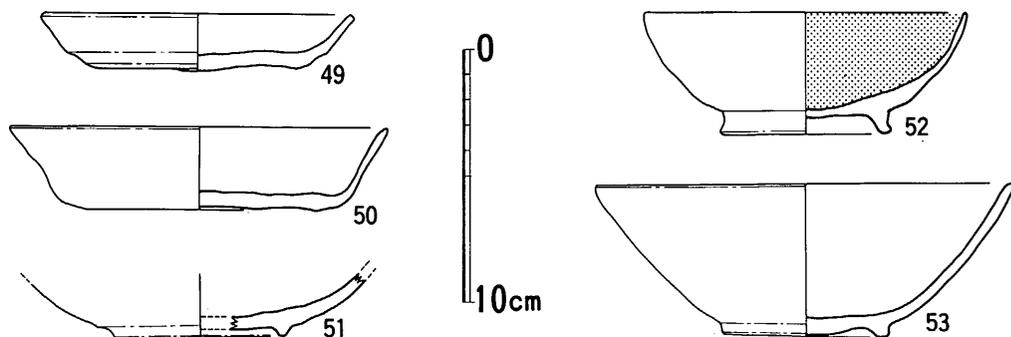
杯蓋 (20~22) 最大径が10cmをわずかに越え、かえりが外に出る。ヘラ切り後調整を施さないか、ナデるだけのものである。

杯身 (23~29) 蓋受けのかえりのないもの (23~26) と、立ち上がりを有するもの (27~29) がある。前者は口径が10cm前後で、ヘラ切り未調整のものである。沈線を有するものがある (25)。後者は底部外面の約3分の1をヘラ削りしており、立ち上がりの長さは約1cmである。中通古墳だけではなく、中通古墳群全体を見ても、築造開始期のものであろう。

椀 (30, 31) 30は底部を欠くが、31は底部の丸いもので、両者ともに2条の沈線をもつ。

ぐいのみ型土器 (32, 33) 今、仮りにこの名で呼んでおく。底部はヘラ削りを施すが、棒状のものの先端をこすりつけたような感じである。その他はヨコナデを施す。

高台付杯 (34) 杯部から高台まで連続している。底部はヘラ切り後平滑化を図っている。そこに2条の直線が施されるが、ヘラ記号と思われる。



第16図 中通古墳玄室出土遺物実測図(1/3)

壺 (35~37) 35は短頸壺、36は小型壺である。36の底部は手持ちのヘラ削りを施す。37は口縁部を肥厚させ、肩部に3条の沈線をもつ。

高杯 (38~42) 杯部が丸味を持つもの (38) と角張るもの (40、41) がある。後者は更に大型のもの (40) と小型 (41) の2種類に分かれる。40、41は杯部、脚部ともに沈線をもつ。

平瓶 (43) 胎土の石英粒の多さが目につく。口頸部は斜めに立ち上がったあと、やや内湾気味に傾きを変えて、丸い端部へ続く。肩部に2条の沈線をもつ。焼成はあまり良くない。

甕 (44) 器高22.4cm、口径12.4cmを測る小型の甕である。肩部に波状文を、胴下半は平行叩きの後にカキ目を帯状に廻らす。内面下半は同心円文の叩きが見られ、その他はヨコナデを施す。焼成は良くなく全体が赤褐色を呈するもろい土器である。しかし全体的に作りは良い。

短頸壺 (45) 器高11.1cmを測り、やや大きい。胴部下半にヘラ削りを施す。底部にヘラ記号を有する。

脚付椀 (46) 熱のため変形がはなはだしく、実測図は推定の部分がある。途中で段を持つ脚を有する。全体に灰をかぶっている。

土師器 (第16図)

椀 (48) 全体的に丸味を持って内湾気味に口縁端部に至る。高台は外へふんばる。磨滅が激しく調整は明確でない。

墳丘出土遺物

須恵器 (第15図)

脚付壺 (47) 頸部を欠くが、壺であろう。胴部中位に2条の沈線を持ち、上はカキ目を施す。脚部にも2条の沈線を持つ。全体の作り、沈線、カキ目の施し方、どれもしっかりとした優品である。

小 結

墳丘はかなり削られているが、直径約11mの円墳と考えられる。

石室は単室の横穴式石室で残りは良い。玄室内部は酸化鉄によって全面が赤彩されていたと思われる。墳丘、石室規模ともに中通古墳群中の他の古墳よりとび抜けて大きく同古墳群の盟主的なものと考えられる。

築造時期並びに使用された期間については出土遺物から次のように考えられる。玄室右袖石近くにほぼ原位置を保って出土した須恵器蓋杯のセットは九州の須恵器編年によればV期に属するものである。それより古い杯身 (第13図27~29) は羨道から墓道にかけて出土した。この類はⅢB期からⅣA期にかけてのものと見られる。出土状態から考えて、追葬時に玄室内から

墓道の方へ投げ棄てられたものと思われる。従って、同古墳は6世紀後半頃作られ、7世紀前半まで使用されたと思われる。

また須恵器高台付の杯、土師器、黒色土器、瓦器、寛永通宝、そして多量の炭の出土によって、中通古墳は遅くとも8世紀後半から9世紀前半には開口され、それ以後しばしば再利用され続けたと考えられる。

〈註1〉 調査に際しては九州歴史資料館学芸第一課長松岡史氏、文化財専門委員前田軍治氏、福岡県文化課主任技師石山勲、酒井仁夫氏、九州大学西健一郎、赤崎敏男氏から有益な助言をいただいた。

2. 中通S 4号墳

立地

既に調査し、消滅したS 1号墳とS 2号墳の間で、工食用道路下から発見されたものである。道路となる以前でも畑として開墾されていた所でもある。中通古墳群中でも南にあり、中通南支群（古墳番号の前にSを冠する）とした古墳群に含まれる。牛頸川に面した丘陵西斜面の標高65m付近に位置する。

墳丘

前述したように、墳丘は削平されていて、周溝も検出できなかった。従って、形態、規模ともに明らかにすることはできなかった。

墓壇は山側である東側は旧表土から掘り込んでいるが、水田側である西側は掘り込みの線が観察できない。土層によれば、西側は墓壇を掘らずに石を積みながら盛土を行なっていったと観察できる。

石室

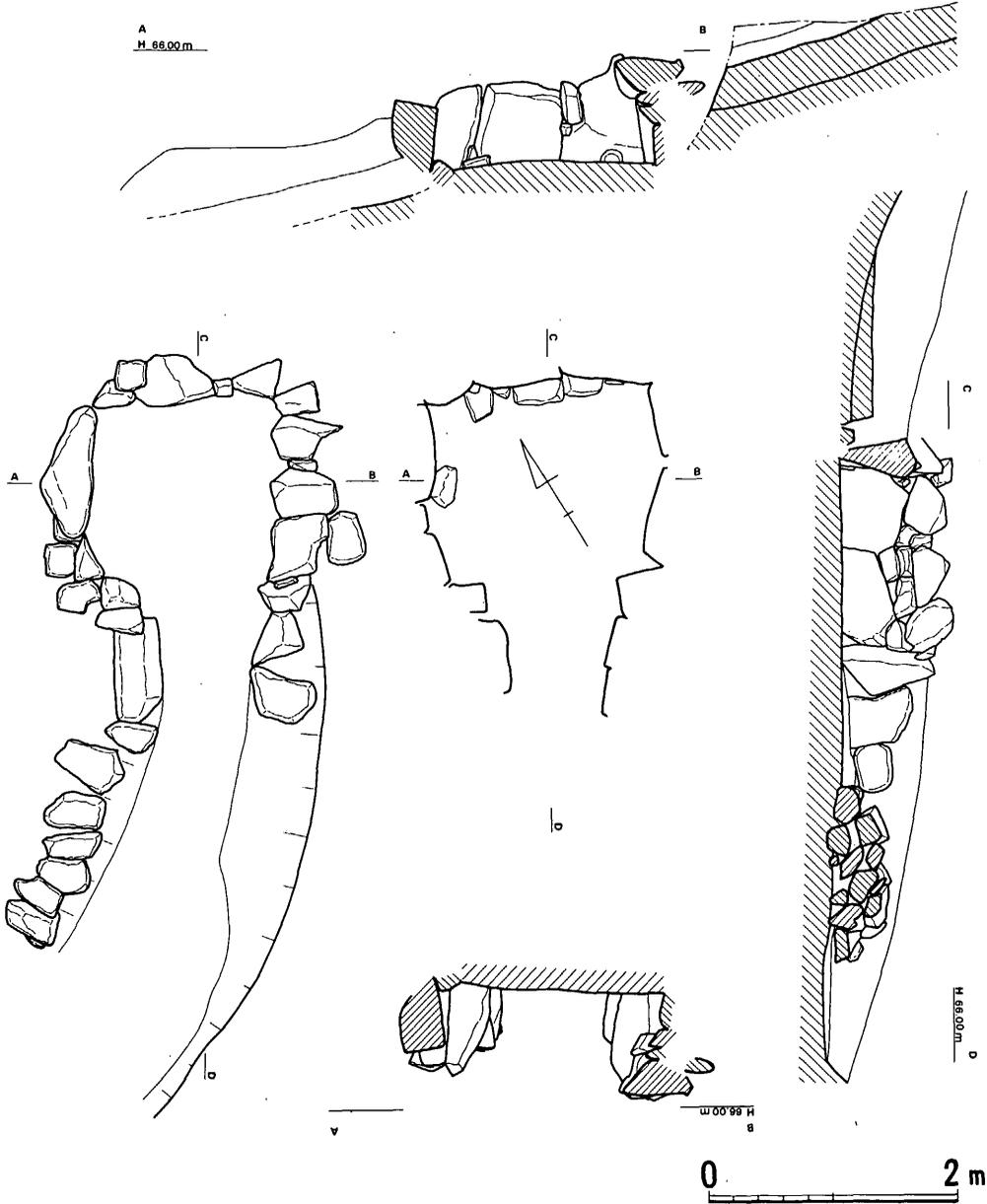
南に開口する（主軸N12°W）単室の横穴式石室である。玄室の平面形は長さより幅がやや広く、わずかながら胴が張る長方形を呈する。長さは奥壁に向かって右側壁長で1.5 m、左1.45 m、幅は奥壁側で1.75m、玄室側で1.55mを測る。奥壁は腰石を残すのみであるが、比較的大ぶりの3石からなる。右側壁は腰石2石を据え、玄門側の低い腰石上に30cm大の石を数個詰め、その上に一辺40~50cm大の石を積んで2段めとしている。左側壁もやはり腰石2個を据えているが、その上は削平されている。袖石は石材を縦長に使い、どちらも30cm内側に出している。

羨道は右側で2石、左で1石残るにすぎない。左では羨道に続いて40×30cm大の石を約2mにわたって並べているが、この部分は床面から離れて、壁上に並べたような感があり、墓道と考えていいだろう。墓道は先端が道路によって切られているが、2~2.5 m続く。

遺物

出土状態

玄室奥壁右隅で鉄製鋤先が出土した（図版14-2）。奥壁に張りつけたような形で刃部を上に向けてあった。最下部は床面より下にある。鋤先を据えるための掘り方は検出できなかったので、床面を整地する際に置いたものと考えられる。他には玄室、羨道、墓道埋土中に須恵器片や窯体壁の破片が検出された。これらは古墳上部にあるD-1窯、D-2窯の遺物と思われる



第17図 中通S4号墳石室実測図(1/60)

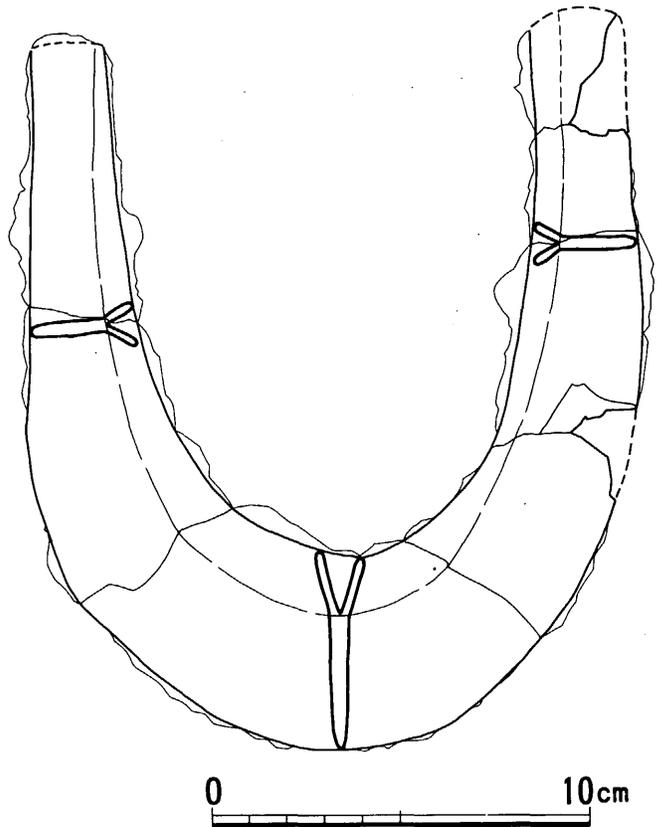
るが、その中に明らかに両窯出土遺物とは時期の違うものが混ざっていた。これらをS4号墳関係のものと判断して図示した(第19図)。

従って、出土遺物は以下の通りである。

- 須恵器杯蓋 1
- 高台 1
- 鉄製鋤先 1

須恵器 (第19図)

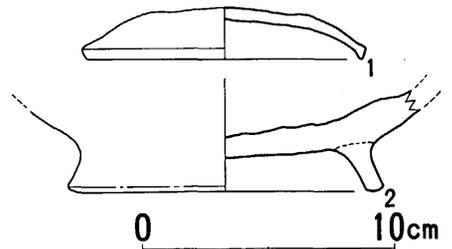
1は杯蓋で、口径10.8cm、高さ2cmを測る。胎土は粗いが黒味がかかった灰色をした焼成良好のものである。内面はナデが観察できるが、外面ははっきりしない。粗くナデているようである。口縁は断面三角形を呈する。2は、器形は不明だが、台部である。胎土は密で、淡灰色を呈し焼成は良好である。内外面ともにヨコナデを施す。



第18図 中通S4号墳玄室出土鉄器実測図(1/2)

鉄製鋤先 (第18図)

耳部先端にやや疑問が残るが、ほぼ完形のU字形鋤先である。刃幅16.3cm、長さ19.5cmを測る。厚みは刃部先端中央で約6mmである。木柄挿入部は前、背二面に分かれる。



第19図 中通S4号墳出土遺物実測図(1/3)

小 結

本墳は、墳丘の規模、形態は削平のため明らかではないが、南に開口する(主軸N12°W)単室の横穴式石室をもつものである。形態的にはかなり退化したものと思われる。遺物は玄室より鉄製鋤先、埋土中から杯蓋と台部が検出された。本墳は既報告のS2号、S3号墳同様、

本墳の上の斜面にあるD-1窯、D-2窯の廃絶後に灰原を整理の上築かれたと思われる。D-2窯はD-1窯より新しいことは明白で、D-2窯の最も新しい時期はV期である。本墳出土杯蓋はVI期に属すると思われるので、本墳が築かれたのはV～VI期の頃、実年代では7世紀前半から中頃と考えられる。

玄室より出土した鋤先は須恵器窯掘削に用いたのではないかと考えられる。
(註1)

(註1) 中通B窯排水溝に工具の痕跡が残っていた(『牛頸中通遺跡』大野城市教育委員会1980、図版116)が、工具痕断面は直線的であり、U字形鋤先とは別の工具が考えられるが、同じくA-2窯本体に断面がやや丸味をおびる工具痕が観察された。

2) 窯跡の調査

既に『牛頸中通遺跡群』(大野城市教育委員会1980)で報告されたD-1窯の残りの部分を調査したところ、D-1窯の煙出し部を埋めて、そこを焚口として上にのびる窯跡が発見された。従って新しく検出された上の窯をD-2窯と称することにした。前記報告書付図でD-1窯の北側に点線で入れておいたD-2窯は調査の結果存在しないことが確認されたので、それを取り消し、前述のようにD-1窯の上方の窯をD-2窯とすることにしたものである。両窯跡は、途中から開発者が代わったことと、人家近くの崖に極めて近い位置にあることから、まずD-1窯の燃焼部と焼成部のごく一部(前記報告書)、次に残りの部分とD-2窯の燃焼部、そしてその残りの部分と3回に分けて調査することとなった。このため写真の不整合を始め、調査、報告にやりにくい場合があった。

調査の結果は後述するが、D-1窯はIVB期の、D-2窯はIVB～V期の遺物を出土した。

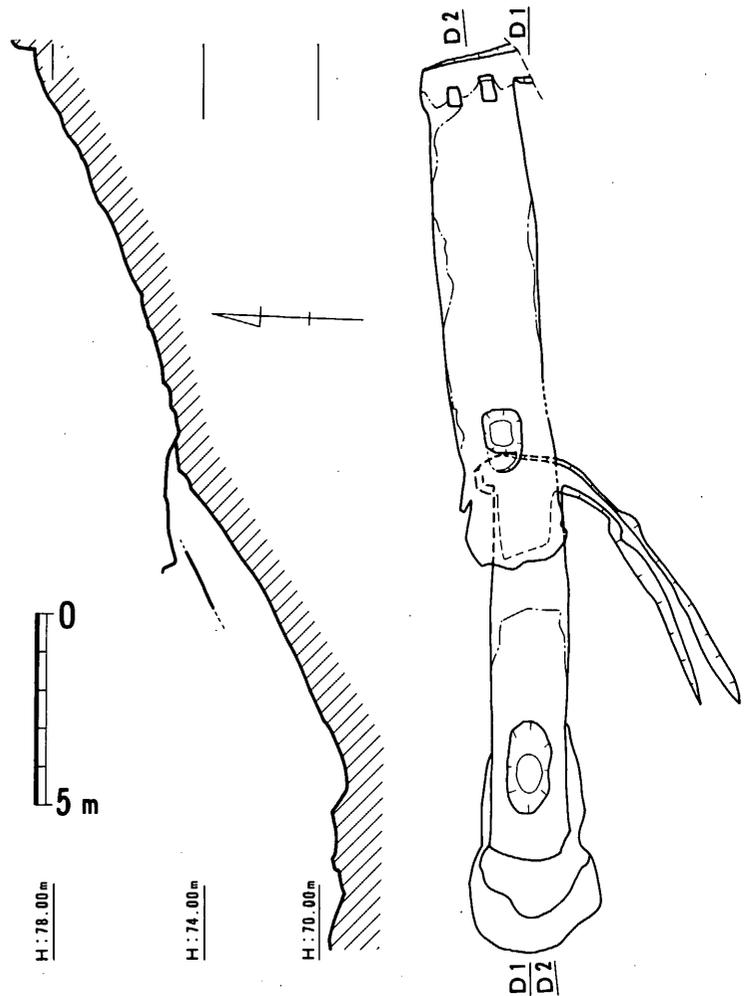
前記報告書で、D-1窯の灰原から窯最終床面出土須恵器より後出のものが含まれる不合理性を指摘しておいたが、調査の結果から灰原にはD-2窯の遺物も含まれることがわかり、上記の疑問も解けることとなった。また、当然のことながらD-2窯出土遺物には焼台としてでも使わない限り、D-1窯の遺物がまざらず、すべてD-1窯の遺物より新しいはずである。しかしながら現在の編年観からすればD-1窯出土遺物より古いと考えられる遺物も出土し、実際には必ずしも一系列的にたどることはできないことが判明した。

1. 中通D-1窯跡(第21図)

焚口から焼成部の一部灰原までは前期報告書に記述してあるので焼成部と全体について述べたい。

焼成部

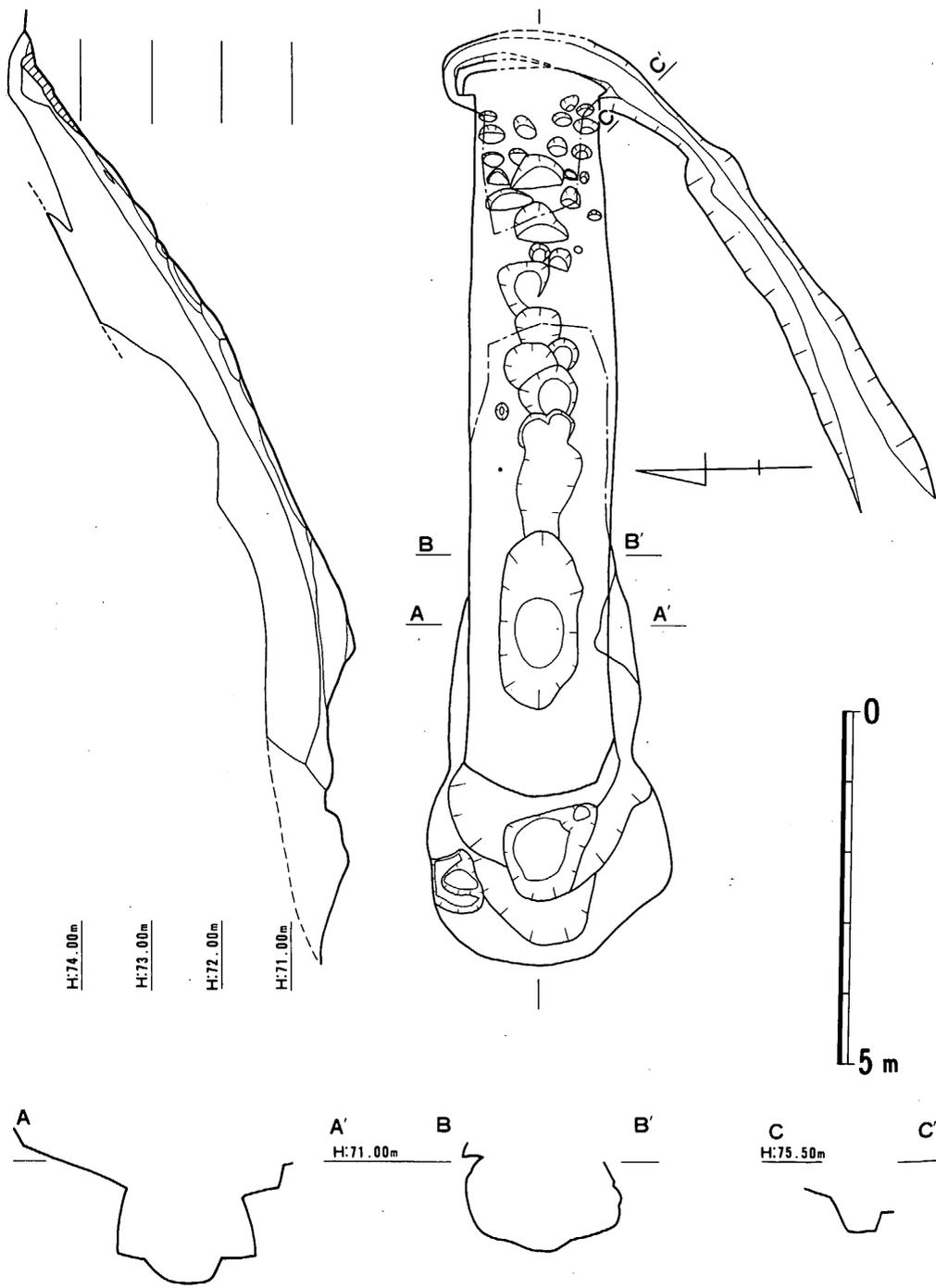
長さは約7.9 m 続く、幅は燃焼部との境界で1.95m、煙出し部で1.8 m、中央部がやや胴張りとなり、2.1 mを測る。胴張りは煙出しに向かって、右の方がより大きい。床面は特に上部で顕著だが、40cm×20cmほどの凹みが多く見られる。須恵器焼成時に製品を安定させるためのものであろう。床の傾斜角度は、ほぼ中間で変わり、下方は約24°、上方は35°である。天井が一部残存していた。高さは1.4～1.6mである。これによって本窯が地下式であることがわかる。



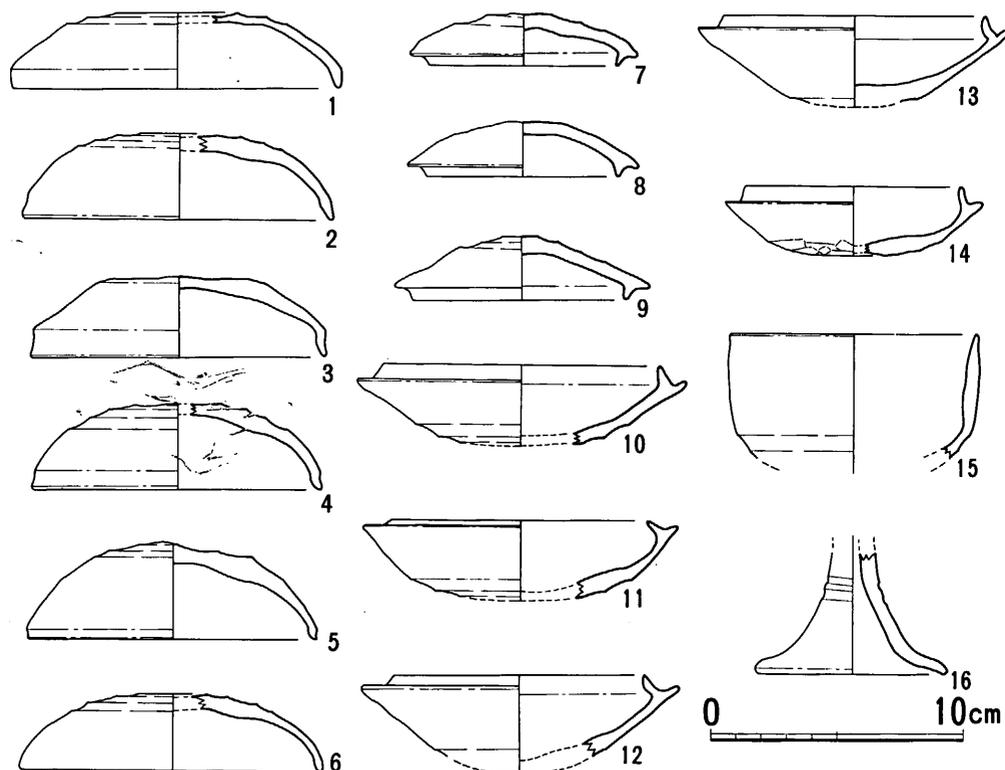
第20図 中通D-1窯跡・D-2窯跡位置関係図(1/200)

煙出し部

D-2窯の焚口部にあたる。焼け固まった壁断面と灰層が検出されたので、最初不審に思い、灰層を少しずつ掘り進めた。掘りあげた結果、D-1窯の煙出し部と排水溝を花崗岩パイラン土で埋めて、そこを焚口として更に上方に窯を築いていることが判明した。D-1窯の煙出し部はA～C地点の窯のように多孔式ではない。排水溝は孤を描きながら南東に約8 m 続く、比較的浅く断面は逆台形を呈する。



第21図 中通D-1窠跡実測図(1/100)



第22図 中通D-1窯跡窯内出土須恵器実測図(1/3)

床 面

前回報告書で第1回目の調査時に、3回の改造が見られ、それを含め、床面は5～7枚数えられることを述べた。今回焼成部の残りを調査した時は、4枚の床面を数えることができた。床面は高温のため還元され灰色を呈して固い。上方へ行くにつれて各床面のかさ上げが少なくなるから床を新しくするたびに傾斜角度は小さくなっている。最終床面は約20°である。

以上であるが前庭部端から煙出し部までは12.7m、排水溝の幅を入れると13.2mである。中通A-2窯が煙出し部まで14.5m、B窯が14mを測るのに対してやや短い。また両者に比べて胴が若干張っている。

出土遺物 (第22～24図)

本窯出土遺物ならびにD-2窯出土遺物のうち、蓋杯については以下のように分類した。

杯 蓋

I類 かえりをもたないので、口径、器高とも大きい。口径は13cm以上のものである。ヘラケズリは天井部の3分の1に施す。

Ⅱ類 かえりをもたないもので、口径が12.5cm前後のものである。

Ⅲ類 同じくかえりをもたないもので、口径が11.5cm前後のものである。Ⅰ類に比べ、ヘラケズリの範囲はやや狭くなる。

Ⅳ類 かえりもち、またつまみのあるものである。

杯身

Ⅰ類 立ちあがりのあるもので、最大径が13.3cm以上のものである。

Ⅱ類 立ちあがりのあるもので、最大径がⅠ類よりやや小さく13cm前後のものである。

Ⅲ類 立ちあがりのあるもので、最大径が12.5cm前後かそれより小さいものである。

Ⅳ類 立ちあがりのないものである。大きさによって a・b 類に分けられる。

これらの杯蓋、杯身の各類はそれぞれがセット関係にあるものと思われる。

窯内出土遺物 (第22図)

7～9 が第Ⅰ次の床面出土遺物、10、11が最終面出土、そして1がその間からの出土である。他はすべて最終面上の埋土中の出土である。なお、窯内出土遺物については中通遺跡群の第Ⅰ次の報告書を参照されたい。

杯蓋 (1～6)

Ⅱ類 (1～2) 1は口縁部がやや折れ曲がるような形態をとるものである。

Ⅲ類 (3～6) 3は1の小型化したもの、その他は天井部から口縁部まで丸く続くものがある。

杯身 (10～14)

Ⅱ類 (10) 立ち上がりは断面三角形を呈し、長さは0.9cmである。

Ⅲ類 (11～13) 立ち上がりの断面は一様ではないが、長さ、高さとも小さくなる。

その他 (14) 口径8.6cm、最大径10.2cmを測り、底部に手持ちのヘラケズリを施している。形態から、蓋とすべきものかもしれない。

蓋 (7～9) 最大径が9.0～10.1cmを測り、その形態から壺類の蓋となるものと思われる。

椀 (15) 形態から大型の杯身とすべきものかもしれない。

高杯 (16) 脚部のみである。脚端部は丸く終わる。

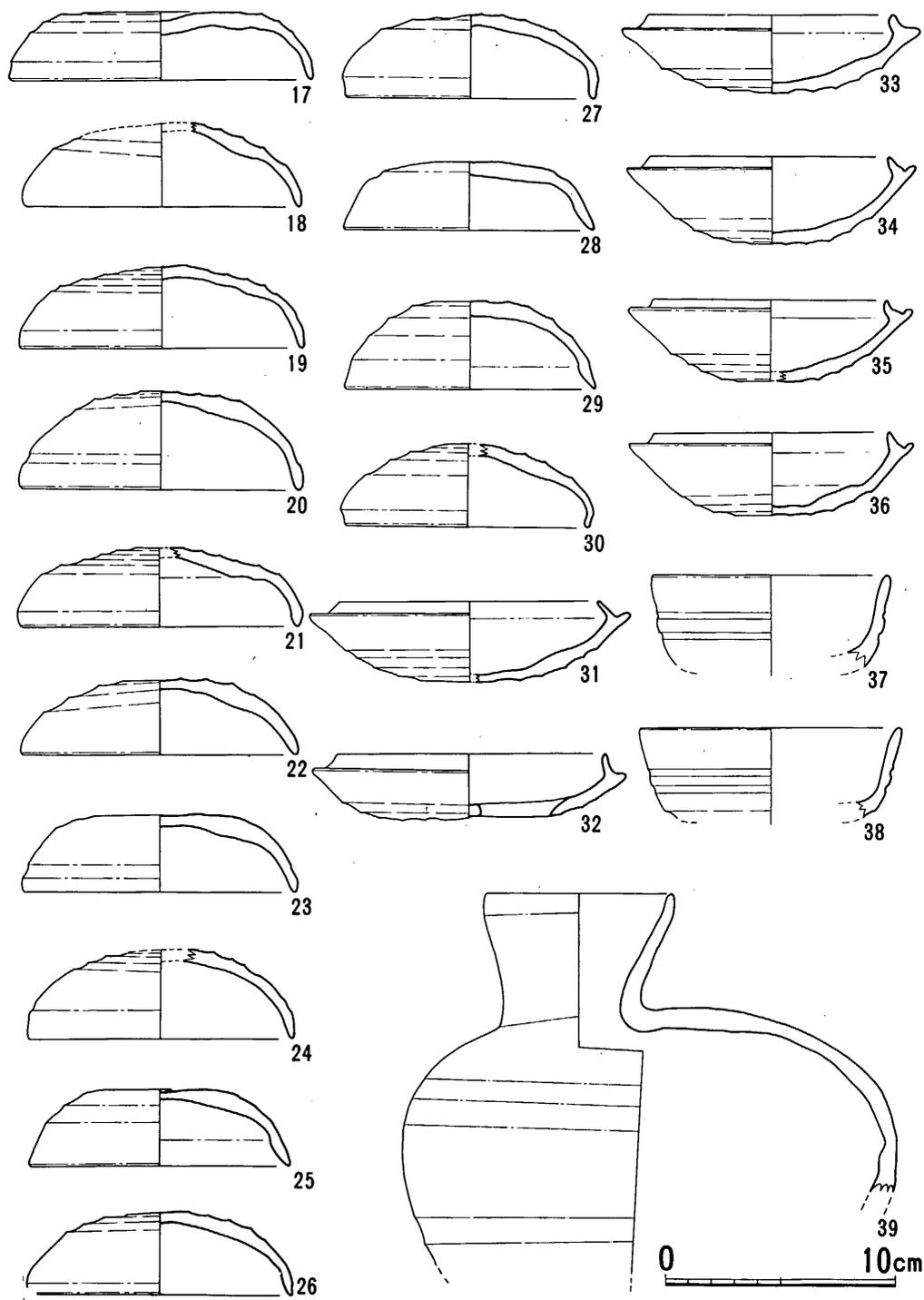
灰原出土遺物 (第23・24図)

杯蓋

Ⅰ類 (17) 口径の割合に器高が低く、平たい感じのものである。

Ⅱ類 (18～20) 天井部から丸く口縁端部に続くものである。

Ⅲ類 (21～31) 天井部がやや平たいもの(23、25、28)と丸いものがある。前者はヘラケ



第23図 中通D-1窯跡灰原出土須恵器実測図(1)(1/3)

ズリを施さない。30は器高、口径とも小型化したものである。

杯身

I類 (31~32) 最大径は14cm、13.6cmと大きい。立ち上がりは長さ、高さともに小さい。底部外面の3分の2をヘラケズリしている。

II類 (33) ヘラケズリの範囲はI類と変わらない。立ち上がりは厚みがある。

III類 (34~36) I・II類に比べて全体に小さくなる。ヘラケズリの範囲はI類と比べるとやや狭くなる。

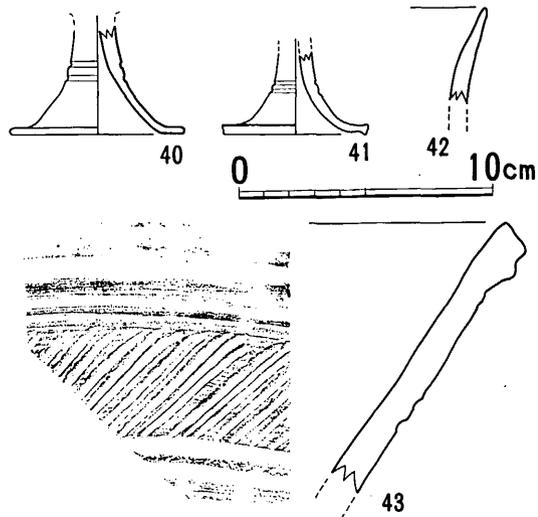
IV類 (37~38) 口径によってa類(38)、b類(37)に分けられる。体部には2条の沈線を持つ。

平瓶 (39) 底部を欠く。胴部上半はあまり明瞭でないカキ目が施されている。そのカキ目によって肩部に施そうとした刺突文が消されている。下半部はヘラケズリを施している。大きめの砂粒が目立ち、また焼けひずみがあるが、作りは良い。

高杯 (40~41) 脚部のみである。いずれも小型化したもので、脚端部が丸く終わるもの(40)と、やや張り出すもの(41)がある。

平瓶口頸部 (42) ヨコナデで仕上げるもので、提瓶の口頸部かもしれない。

甕 (43) 小破片で口径を復元できない。頸部は沈線間にヘラによる連続斜行線を施す。

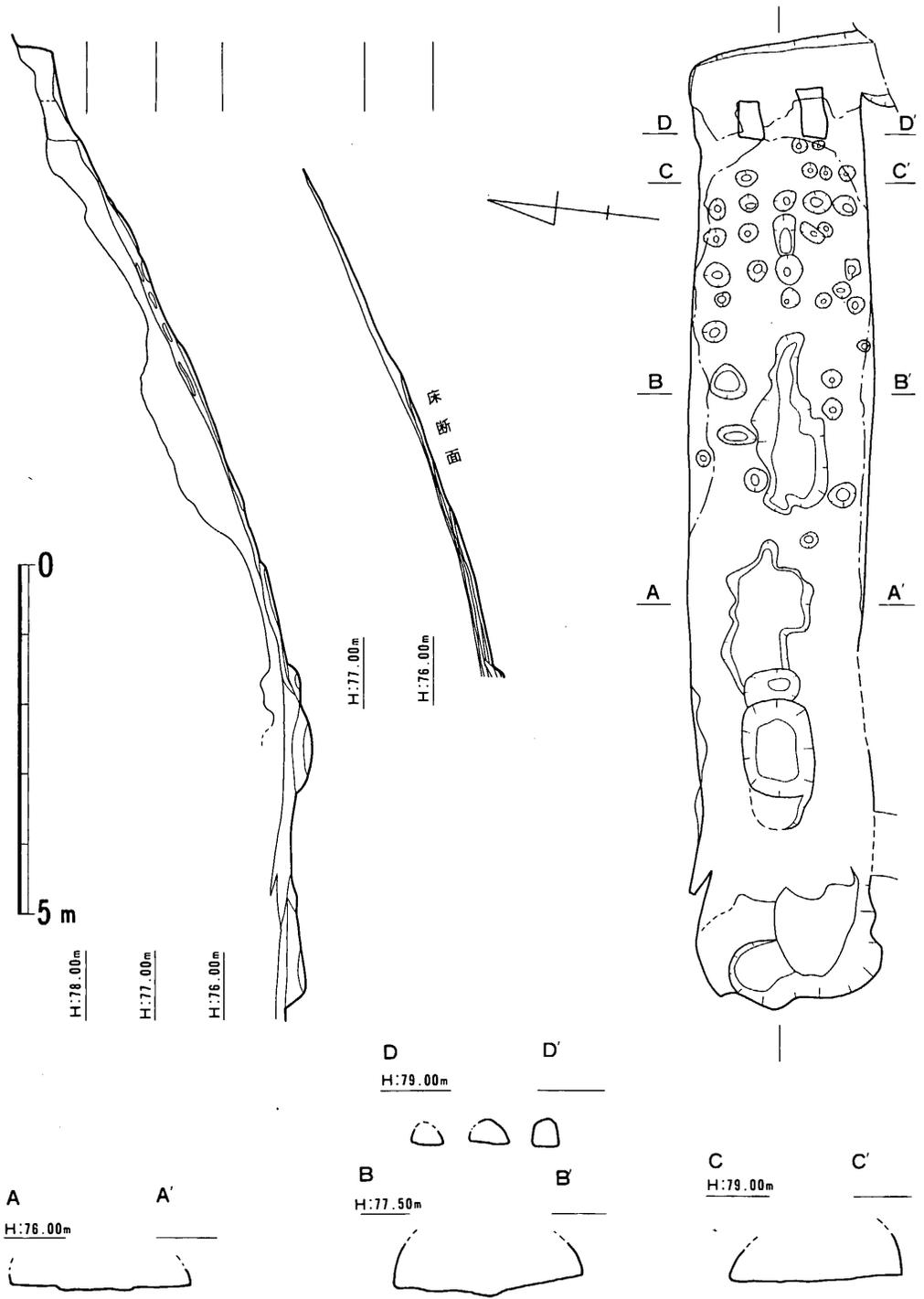


第24図 中通D-1窯跡灰原出土須恵器実測図(2)
(1/3)

2. 中通D-2窯跡 (第25図)

前庭部

窯尻から約2.2 mの間だと思われる。凹みがあるが、掘り下げるとトンネル状となり本窯の灰の一部はその中に落ち込んでいた。この穴はD-1窯が埋まりきらずに残った空間である。即ち、D-1窯の最終床面上に天井の崩壊その他で土砂が流入し、その上にD-2窯の灰層の一部が落ち込んだ状態であった。灰層はおおむねD-1窯の上部でとまっていたが、量もそれほど多くない。このような状況からD-1窯最終面上の埋土中出土遺物には注意を要することとなるが、この部分にはD-2窯築造以前と考えられるかなりの量の崩壊土、流入土があるので、窯内埋土出土遺物中の混同はないと考える。



第25図 中通D-2窟跡実測図(1/100)

焚口、燃焼部

舟底状ピットとその下方の落ち込み（これがD-1窯の本体へ続いていくことが後に判明）とのほぼ中間から床面がよく焼けて灰色を呈して固い。側壁は更に0.5m前方まで焼け固まっている。そこから下方は赤変しているが柔かい。従ってここから傾斜変換点と考えられる舟底状ピット直上付近までが燃焼部であろう。長さにして約2.7mである。幅は舟底状ピット中央部で約2.3mを測る。

焼成部

燃焼部より床面の傾斜が急になり、21°から煙道付近では25°を測る。長さは舟底状ピット端から煙出しの手前まで約7.5mで、幅は燃焼部との境で2.5m、中央で2.7m、煙出しとの境で2.4mを測り、その形態はやや胴張りとなる。床面には径20cmから40cm位の凹みが設けられており、特に焼成部の上位に多く認められる。これは製品を安定させるためのものであろう。側壁の残存状態は左右とも比較的良好で、その断面は「かまぼこ形」を呈していたものと思われる。

煙出し部

多孔式で3つの煙出しをもつ。煙出しの断面は「かまぼこ形」を呈し、幅40cmから60cmで高さは約40cmを測る。また煙出しに付属して直交するような形で南に向って排水溝がのびているが、その先は崖によって削られている為、不明である。

以上D-2窯は前庭部端から煙出し先端まで約13m、排水溝の幅を入れれば13.7mである。D-1窯同様長さにおいてA-2窯、B窯に及ばないが、焼成部最大幅2.7m、煙出し部手前でも2.4mを測り、幅の広い窯跡である。床面はかさ上げをしており合計4枚数えられる。しかし、かさ上げの深さは深い所でも20~30cmで、比較的浅い。各床面は高温のため灰色を呈し固い。舟底状ピットは下から数えて3枚めの床の下から掘り直されている。しかし、最下層までは及んでいない。つまりピットは築造当初に存在したものであり、少なくとも2回めの床面からは掘り直されていることがわかる。また4回めの床、つまり最終床面時には埋まっている。一般にこの種のピットは多くの窯に認められ、須恵器焼成時には既に埋まっていることが指摘されている。本窯では築造当初にあったのはもちろんであるが、途中で最低1回は掘り直されている。しかし、掘り直されていても次の焼成時には埋められるか、わずかばかりの凹みになっているにすぎない。

灰 原

付近は開墾されており、灰原はほとんど消滅している。表土下に若干の須恵器の散布が認められるにすぎない。

出土遺物（第26～29図）

本窯出土遺物のうち、蓋杯についてはD-1窯の遺物の項で記したようにⅠ～Ⅳ類に分けた。

窯内第1次～3次床面出土遺物（第26図、1～4）

杯蓋（2） 第1次または第2次床面出土である。小破片で分類不可能である。

杯身（1） 出土床面は杯蓋と同じである。Ⅱ類に属する。ヘラケズリは底部の3分の1に施す。

高杯（3） 出土床面は1、2と同じである。小型化した高杯の脚部で、脚端部は上下にやや張り出すが、丸く終わっている。

杯身（4） 第3次床面出土である。杯身Ⅳa類に属し、体部に沈線をもつ。

窯内第4次（最終）床面出土遺物（第26図、5～13）

杯蓋（5～8） 5はⅡ類、6はⅢ類、7、8がⅣ類に属する。5は天井部の2分の1を、6は3分の1をヘラケズリしている。7、8は宝珠型のつまみをもつ。

杯身（9～12） 9、10はⅠ類、11はⅢ類、12はⅣ類に属する。9～11とも立ち上がりは1cmに満たない。

高杯（13） 脚部のみで、途中で段を持つものである。脚端部は若干そり気味に丸く終わる。

窯内埋土出土遺物（第26図、27図、14～51）

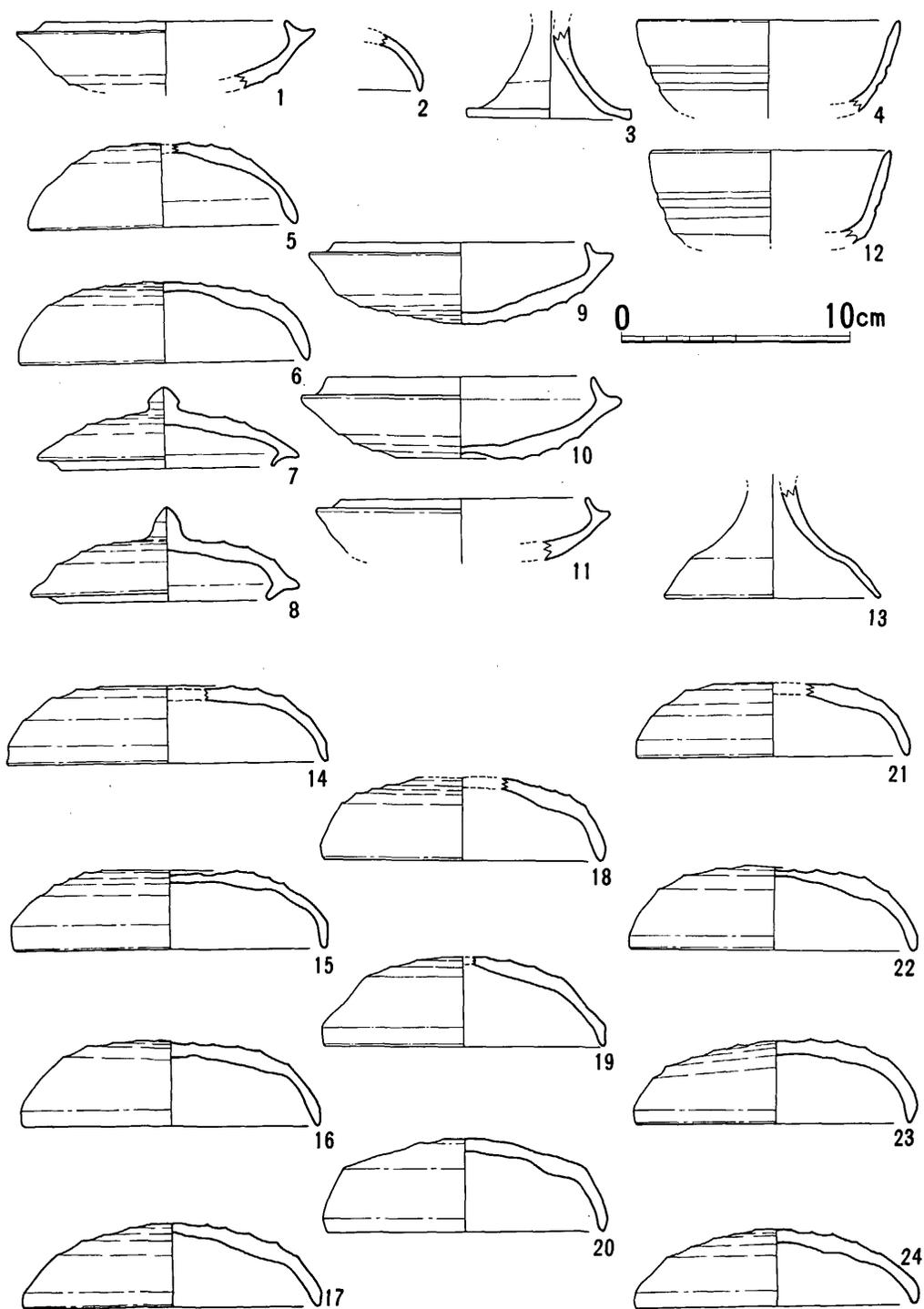
杯蓋（14～29）

Ⅰ類（14～17） 14が口径14.0cmで最大である。形態的には天井部から口縁端部まで丸味を持って続くもの（14、17）、やや角ばるように続くもの（15、16）がある。ヘラケズリは15が天井部の約2分の1に施し、最も範囲が広い。

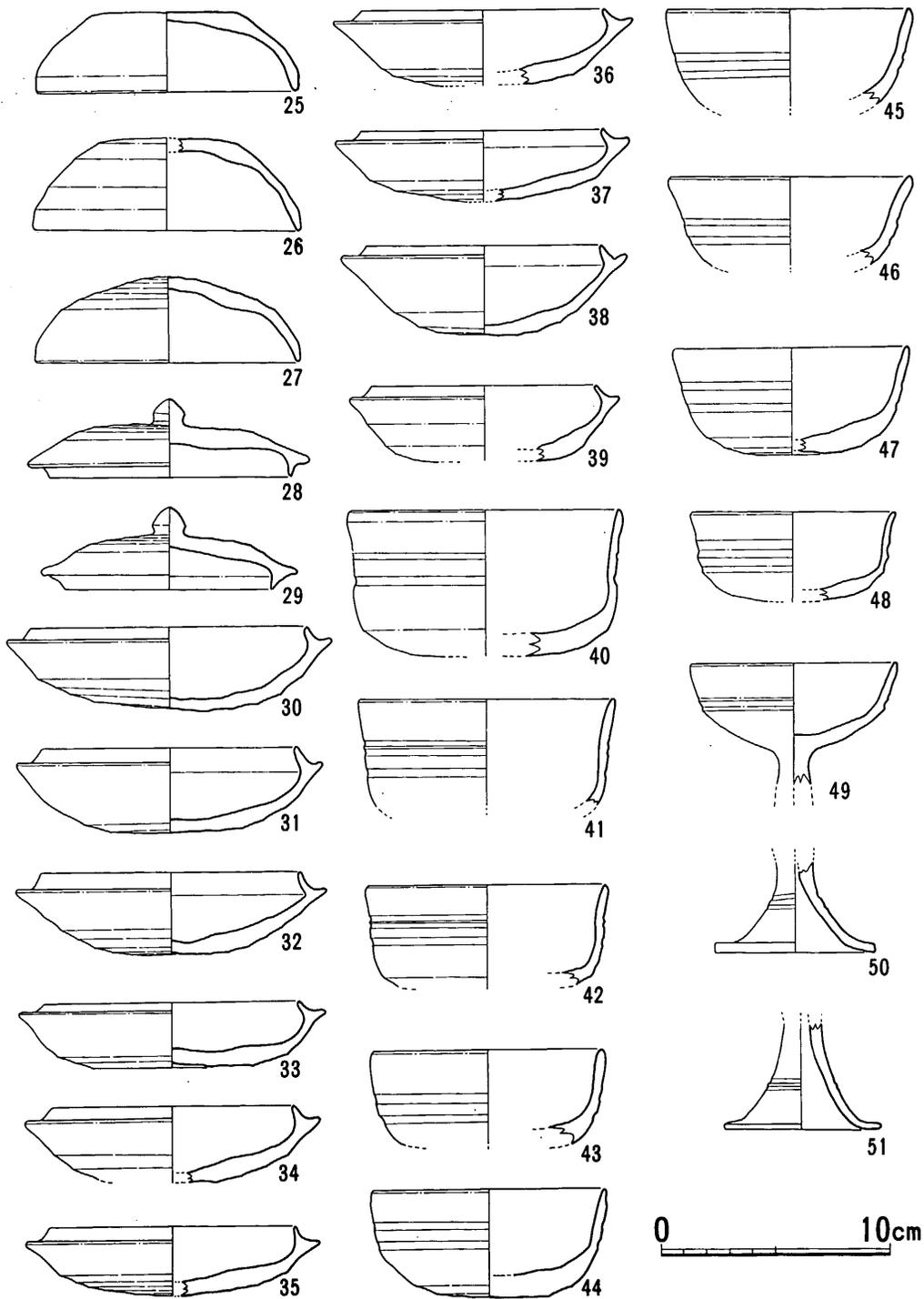
Ⅱ類（18～24） 口径は22が12.6cmで最大、21が12.0cmで最小である。形態的には、全体的に丸味を持つもの（22～24）以外に、やや角張るもの（18、20、21）と、途中で一旦凹むもの（19）がある。ヘラケズリは天井部の約3分の1に施している。

Ⅲ類（25～27） 口径は11.4～11.8cmである。Ⅰ、Ⅱ類に比べ小型化したものである。

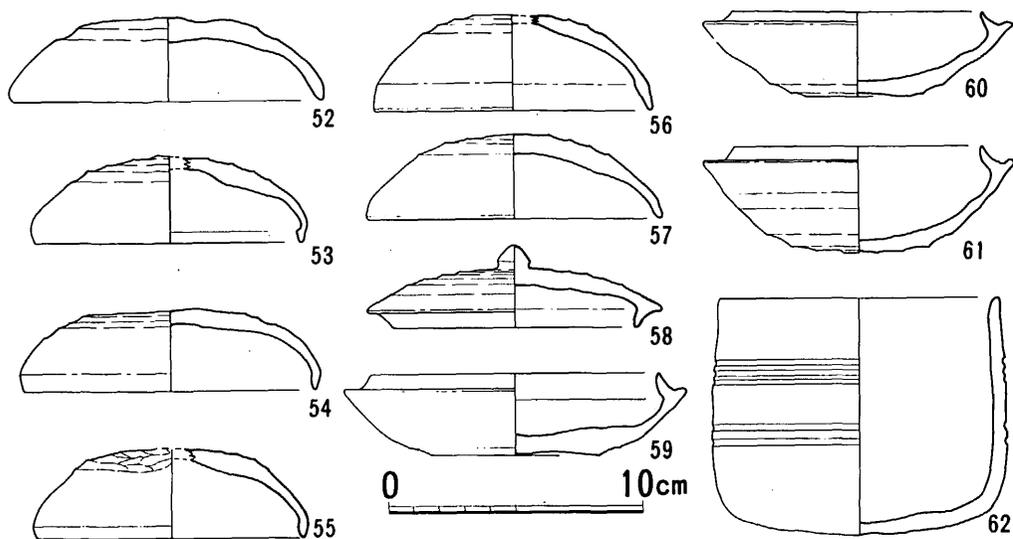
Ⅳ類（28、29） かえりと宝珠型のつまみをもつものである。かえりは外に出る。つまみの周囲はヘラケズリを施す。



第26図 中通D-2窟跡窟内出土須恵器実測図(1)(1/3)



第27図 中通D-2竊跡窠内出土須恵器実測図(2)(1/3)



第28図 中通D-2窯跡灰原出土須恵器実測図(1)(1/3)

杯身 (30~47)

I類 (30~33) 最大径は13.4cm~14.2cmである。底部は丸味をもつもの (30~32) とやや平たいもの (33) がある。立ち上がりは1cm以下である。32は底部の2分の1にヘラケズリを施す。

II類 (34~37) 最大径は12.8~13.0cmである。35は偏平な感じを持たせるものである。

III類 (38~39) 39は最大径が11.7cmで、底部にはヘラケズリを施さないものである。

IV類 (40~47) 大きさによってa類 (41, 42)、b類 (43~47) に分けられる。40は口径12.0cmで最大である。b類は48が高杯の可能性があるので除くと、口径が10.2~10.6cmで似た数値を示す。a、b類とも体部に沈線をもつ。

高杯 (49~51) 小型化したものである。49は杯身IV類に脚部のついたものと見ることができ。

灰原出土遺物 (第28、29図)

杯蓋

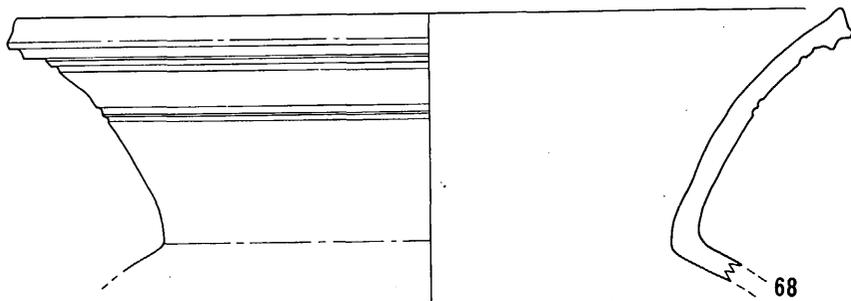
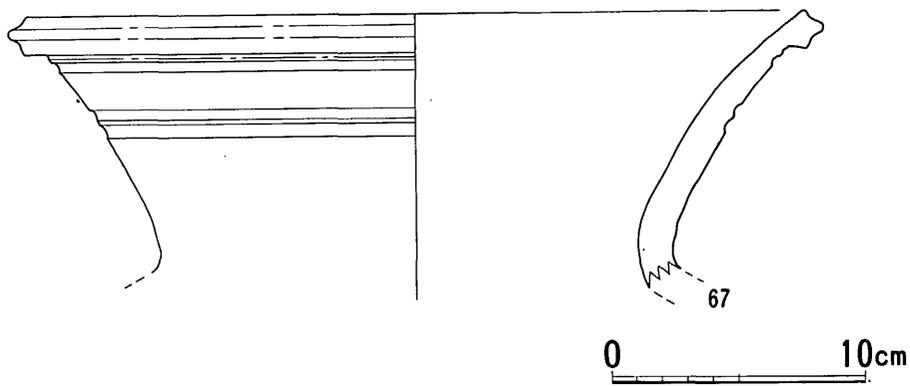
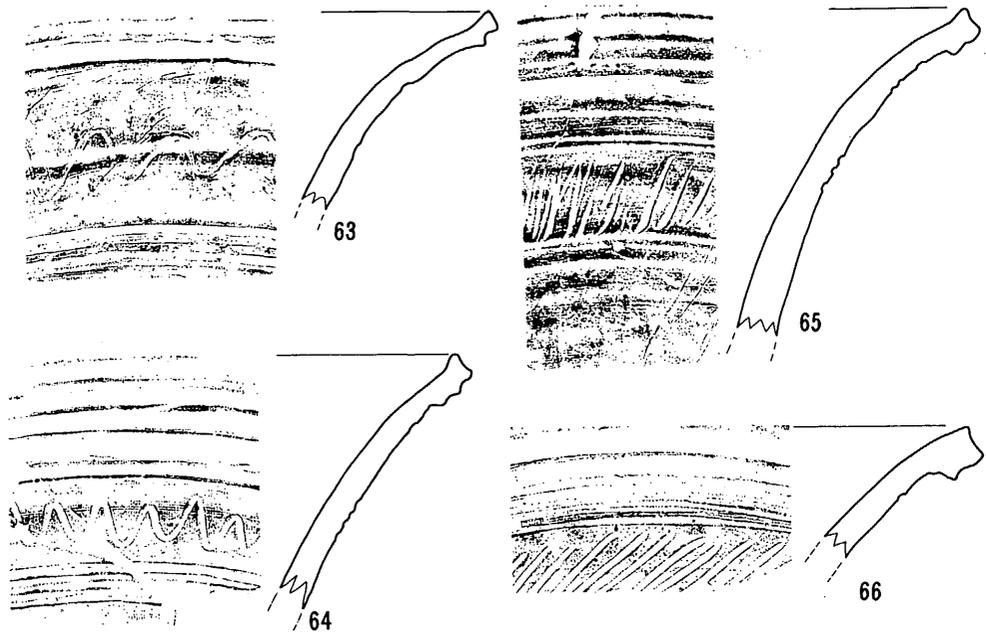
II類 (52) 口径12.4cmを測る。天井部はその3分の1をヘラケズリしている。

III類 (53~57) 55の口径が10.4cmで最小であるが、53、56も小さい。身と蓋が逆転する時期の極めて矮小化したものと思われる。この一群 (53、55、56) をIII b類としておく。

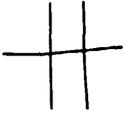
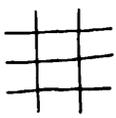
IV類 (58) 宝珠型のつまみのつくものである。

杯身 (59~61)

I類 (59) ヘラケズリは施さない。平らな底部を持つものである。



第29図 中通D-2窯跡灰原出土須恵器実測図(2)(1/3)

No.	ヘラ記号(杯蓋)	個数	No.	ヘラ記号(杯身)	個数
1		13 5	4 9		1 1
2		8 6	3 10		1 1
3		7 7	3 11		1 2
4		5 8	2 12		1 2
					1 3
					1 3
					1 1

No.	ヘラ記号(杯蓋)	個数	No.	ヘラ記号(杯身)	個数
1		36 5	2 9		1 1
2		7 6	1 10		1 1
3		3 7			1 2
4		2 8			1 3
					1 3

表2. 中通D-1窯跡(上)・D-2窯跡(下)出土蓋杯ヘラ記号一覧

IV. ま と め

1) 古墳群について

本古墳群では中通古墳を含めて19基のすべてが調査された。遺物の種類、数量については表4に、出土須恵器の型式については表3、石室平面形は付表に示した通りである。

さて、古墳時代の後期には多くの群集墳が見られる。古墳が群集すると言っても、当然のことながら、群内のすべての古墳が一度に作られたものではない。群内の古墳がどのようにして作られていったかを明らかにすることは当時の社会構造を知る重要な手がかりになることは明白である。群集墳についての研究史は先学によることとして、最近では群集墳の構造を^(註2)〈造営主体〉〈造墓期間〉〈墓域〉という3つのモメントから解明しようとしたものに広瀬和雄氏の労作がある。それによれば群集墳は2~3基からなる支群^(註3)(あるいは小支群)なる最小単位で構成され、最小単位は一代一墳的に累代的に形成されたものとされている。そして、後期古墳といえども、古墳は一般的に首長墓と規定できるのではないかと考えられている。その一方、群集墳における支群、小支群といわれる小グループ内の古墳は、ほぼ同時期に築造され、一基の古墳の造営主体に房戸的な

型式 古墳名	ⅢA	ⅢB	ⅣA	ⅣB	V	Ⅵ	Ⅶ
1							
2					○	○	
3				○	○		
4				○		○	
5			○	○	○	○	
6				○			
7					○	○	
8			○	○	○	○	
9							
10				○	○	○	
11				○	○		○
12							
13					○	○	
14				○	○	○	
S 1							
S 2					○		
S 3					○		
S 4						○	
中通			○		○		

表3. 中通古墳群出土須恵器型式一覧表

副葬品 古墳名	鉄器							玉類								土器						
	刀 子	鋤 先	斧	刀	鎌	馬 具	革 金 具	刀 装 具	不 明	耳 環	勾 玉	丸 玉	管 玉	切 子 玉	角 玉	白 玉	子 持 ち 勾 玉	紡 錘 車	須 恵 器	土 師 器	黒 色 土 器	瓦 器
1					1													0	0			
2	2				1					1	4							37	2			
3									1			1						7	5			
4					1		1		1		10	2						14	1			
5	1				2													55	0			
6									3	2	37	2	6	1				14	0			
7	1				15													24	0			
8											11	1						53	5			
9					2				3	2	13	1			1			0	0			
10	1			1	8			1	3	3	25	3	4	1				25	1			
11									3	2	34							40	5		2	
12					8				3	1		2						0	3			
13	2				24	5	5		1	5								14	3			
14	1			1	28			2	1	3	24	1		3				39	2			
S 1																		0				
S 2										1	2					1	2		6			
S 3					6													2	3			
S 4		1																2	0			
中通	3		1		5			1	2	1								47	4	1	1	
合計	11	1	1	2	101	5	6	4	3	24	15	160	13	10	5	1	1	2	373	40	1	3

表4. 中通古墳群出土遺物一覧表

ものを、小グループのそれに郷土的なものを考える説もある。

中通古墳群ではどのような状況が考えられるだろうか。本古墳群の場合、位置関係からすれば、中通古墳、1～2号墳、S1～S4号墳はそれぞれ1つの群（中通古墳は1基だが）と見なされるが、その他は支群の設定が容易ではない。築造時期については、すべての古墳が盗掘を受けているために明確にすることはできないが、出土遺物と石室構造から考えてみたい。本古墳群で最も古い須恵器と思われる遺物を出土した古墳は中通古墳、5号墳、8号墳である。中通古墳の杯身はⅢB～ⅣA期に属するものと思われる（表3ではⅣA期に入れた）。また、南支群（S1～S4号墳）はS2、S3号墳の墳丘盛土に灰原の灰層が認められることなどからD-1、D-2窯の廃絶後に築造されたものと考えられる。D-2窯跡からは一部V期に属する須恵器が出土しているから、古墳築造もそれ以後ということになる。南支群内の古墳の石室平面形を見ればS3号墳が一番しっかりしており、S3→S2→S4号墳と築かれていったようにも思えるが、それは明らかではない。しかし、その時期にも中通古墳をはじめ、5、8号墳など最初の段階で作られたと思える古墳でも追葬され続けていることがわかる。

即ち、本古墳群では一代一墳的に累代的に形成されたような証拠を見出すことはできない。また、小グループが場所を変えながら次々と形成されたようにも思えない。

それでは本古墳群は、いかなる構造を持つものであろうか。本古墳群の特徴を列挙してみれば、中通古墳がその位置、規模からして盟主的なものと考えられること、3号墳から14号墳まではグルーピングが容易でないこと、南支群はV期以降に築造されていること、南支群が形成される頃にも中通古墳、5、8号墳など最初の段階で作られたと思われる古墳では依然として追葬が続いていること、などがあげられる。これらのことから、極めて推測的ではあるが、次のようなことが考えられるのではないだろうか。

即ち、中通古墳と3～14号墳のうちのいくつかがまず作られ（いくつかの中には5、8号墳が含まれることが出土遺物より推測される）、続いて比較的短い期間内に3～14号墳の残りが作られ、更に1、2号墳並びに南支群の古墳が作られた。一担古墳が作られれば、それには世代を越えて追葬がなされた。従って、一基の古墳の造営主体たる共同体（家族）が没落でもない限り、年をおって「まつられる古墳」は多くなる。即ち、造営主体たる共同体が増えることを示し、最終的には中通古墳を除いて18基（消滅した古墳もあるかもしれないが）の古墳が作られたわけである。

途中で没落した共同体もあろうから同時期に存在した、造営主体の7世紀後半までの最大数は10をいくつか越える数と想像できる。また、造営主体たる共同体は等質的ではなかったろう。それは中通古墳に近い14、13号墳は石室規模、形態から見て優位性を示すと考えられるからである。しかし、それらと南支群を比較して、前者が後者より高位の古墳とすることはできないだろう。前者の出土遺物に古手のもが含まれていないので確実なことは言えないが、13、14号墳は南支群より早く作られたと考えられる。南支群はV期以降であり、古墳を作る時期に差があって、石室の規模等からでは両者の比較はできないと考えるからである。

さて、本古墳群では、各々の古墳は当然時期を異にして作られたが、一担作られればその造営主体たる共同体が没落しない限り、世代が変わっても、新たに古墳を作ることはせずに追葬を続けていくのではないかと考えた。追葬を長期間にわたって行なうという現象は、本古墳群だけに限ったことではなく、広瀬氏も例示している片山古墳群を含め北部九州では比較的良好に見られることだと思われる。^(註6)

このようなことが畿内と違う現象であれば、須恵器生産が畿内と深い関係の下に開始されたという認識に再検討を要することになる。この点で、文献と考古学的成果とを勘案されて、陶部の設定を疑われた浅香山木氏の「須恵器の生産集団は、その初期においては、確かかに部民制の形成を必要とするような条件をもち、その後においても、その様式の画一性が示す如く、政治勢力による特殊な把握の対象とされながらも、結局は、陶もしくは須恵の名を帯びる特定の伴造氏族の管掌のもとに陶部として組織される方向を辿らず、いわば部の外周に位置づけられるべきものとして、族長層の支配する一定の交易圏を基盤にしながら展開したものと考えられる。」という指摘が示唆的である。^(註7)

以上、大きな思い違いをしているのではないかを恐れ、また、検討が不十分なことを承知の上で推測を述べてみた。中通古墳群は牛頸窯跡群内で中心的な古墳群である。全て消滅してしまっただが、検討は続けていきたい。

(註1) 型式の認識について、^(註8)『牛頸中通遺跡群』(1980大野城市教育委員会)の報告とは違う部分がある。なお、同報告中、中通S3号墳出土杯蓋(P165, 第135図の1、2)をVI期としたがV期と訂正したい。

(註2) 広瀬和雄「群集墳研究の一情況」『古代研究』7、1975

(註3) 註3文献並びに同氏「群集墳論序説」『古代研究』15、1978

(註4) 石室構造から見ると、6号墳などは、たとえばS3号墳などより後出するもののように見えるが、6号墳からはIVB期に属する須恵器が出土している。従って、石室構造からは単純に新旧関係は言えないようである。

(註5) この数字は、中通D-1窯跡出土杯蓋に見られたヘラ記号の種類12、D-2窯跡のそれの10と近い値を示し、何か暗示的でもある(表2)。しかし、中通遺跡群の北0.6kmに位置する平田F-1窯跡でのそれは14で、これも近い数値を示すが、平田E-1窯跡では32種類も見られ、短絡的に関係づけられないのはもちろんである。

(註6) 註4後者の論文

(註7) 浅香年木『日本古代手工業史の研究』1971

(註8) この項を書くに当たり、県文化課主任技師石山勲氏より有益な助言を受けた。感謝の意を表したい。

2) 中通窯跡群出土須恵器について

1979～81年にかけて、中通遺跡群内で6基の窯跡が調査された。これらの窯跡から出土した須恵器は小田富士雄氏らの編年に従えば、C窯跡出土遺物の一部がIII B期に、D-2窯跡のそれがV期に含まれることを除けばすべてIV期に属するものである。牛頸窯跡群におけるIV期については大浦1号窯出土蓋杯^(註2)にみられる大形と小形の違いが時期差としてとらえられ、前後二分する基準とされている。また、牛頸とは、御笠川をはさんで相対する位置にある裏ノ田窯跡や雉子ヶ尾窯跡をはじめその周辺の遺跡出土須恵器を中心にしてたてられた編年^(註3)によれば、IV期の杯蓋には口径13cm前後のものと、口径11cm前後のものがあり、A・B類の時期差としてとらえられるとのことである。ひるがえって中通窯跡群出土の遺物でも、杯蓋に注目した場合、その法量は表5のようになる。

表5を見れば、比較的まとまりのある窯跡(A-1・2, C窯跡)と広がりのあるもの(B, D-1・2窯跡)がある。しかし、変化は漸移的であって、口径13cm前後、12cm前後、11cm前後のもの等が見られ、明確に2つのグループに分けることは困難である。

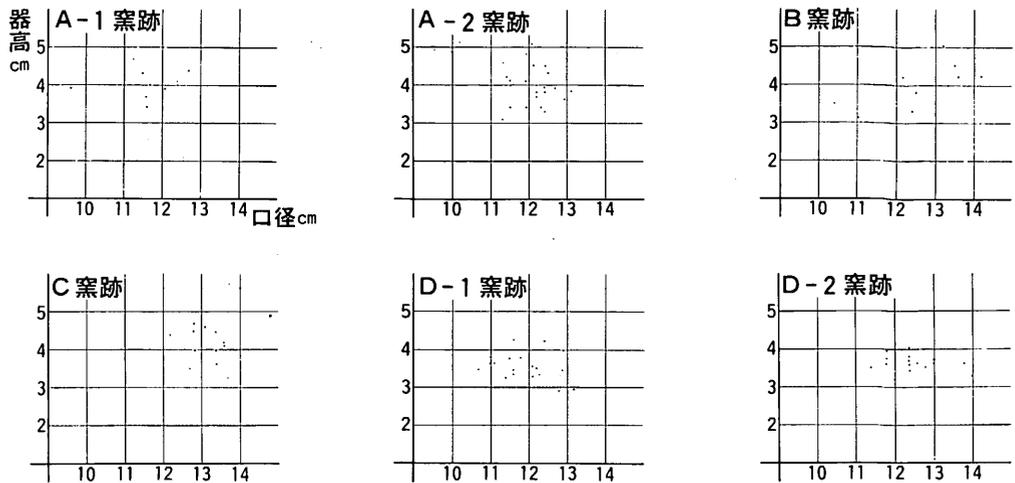


表 5. 中通窯跡群出土杯蓋法量表

中通D地点の窯跡出土須恵器について

既述のようにD地点には2つの窯跡があって、D-2窯跡はD-1窯跡の煙り出し部と排水溝を埋めて作られるという珍しいものであった。従って、おのおのの窯跡出土須恵器が確実にその窯跡に伴うものであれば、D-2窯跡出土須恵器はD-1窯跡出土須恵器よりすべて新しいものとなる。両窯跡出土遺物を検討する際には灰原出土のものは除外しなければならない。窯跡内出土遺物については、焼台とされたものには注意を要することとなるが、各床面出土遺物はその窯跡に属するものとしていいだろう。やや問題としなければならないのは、最終床面上の埋土出土遺物である。可能性としては他の遺構に属する遺物が混入することもありうる。しかし、D地点には、D-1、D-2窯跡しかなく、また窯跡下方には中通S1～4号墳が築かれることになるが、わざわざ上方に位置する窯跡に捨てることもないであろうから、窯内埋土出土遺物もすべて各窯跡に属するものと考えたい。また、D-1窯跡内にはD-2窯跡焚口部の灰が流れ込んでいることを述べたが、それらはD-1窯内埋土と一部残った天井部との間の隙間に流れ込んでおり、かなり明瞭に見分けることができる。従って、D-1窯跡に属する遺物とD-2窯跡のそれとを混同することはないと思われる。

さて、両窯跡出土遺物のうち、蓋杯については形態と法量からそれぞれI～VI類に分類した。それらは各類ごとにセット関係にあるものと思われるが、今、両窯跡と出土蓋杯の関係を示せば以下ようになる。

- | | | |
|---------|---------|-----|
| 中通D-1窯跡 | Ⅱ、Ⅲ | (類) |
| 中通D-2窯跡 | Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ | (類) |

各分類は須恵器編年に従えばⅠ～Ⅲ類はⅣ期に、Ⅵ類はⅤ期に含まれるものと考えられる。Ⅰ～Ⅲ類についてはⅠ類が古くⅢ類が新しいと考えられるものである。従って通常考えられている編年観と両窯の築造の先後関係は一致しない。D-2窯跡には確かにD-1窯跡出土遺物より新しい一群(Ⅳ類)もあるが、D-1窯跡より古いと考えられる一群(Ⅰ類)もある。両窯の築造先後関係はまちがいのないところであるから、出土遺物の史料操作にあやまりがない限り、Ⅳ期の須恵器については、一系列的に型式差を求めて先後関係を定めることは再考を要するということになる。

以上、中通遺跡群内の6基の窯跡出土須恵器、特に蓋杯、について述べたが、それらのほとんどがⅣ期に属するものであるが、子細に見れば単純でないことが判明した。編年は考古学にとって基本的な作業であるから、今後の見通しをたてなければならないが、今回は問題点の指摘にとどめたい。

〈註1〉小田富士雄、柳田康雄編『野添・大浦窯跡』福岡県教育委員会1970 他

〈註2〉同上

〈註3〉岩瀬正信、酒井仁夫、川述昭人「御笠川東岸における須恵器の編年について」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅵ』福岡県教育委員会1975

3) ま と め

牛頸窯跡群の中でも中心的な古墳群と思われる中通古墳群を含む、中通遺跡群が存在した丘陵は既に削平され、宅地として一部分譲も始まっている。中通古墳についてはその規模から、牛頸ではもちろん市内でも最大の石室を持つ古墳としてその保存が望まれ、マスコミにもとりあげられた。しかし、その望みはかなわず、消滅してしまった。遺憾なことであったが、その後地元では文化財に対する認識が徐々にではあるが高まり、予定されている牛頸ダム建設、区画整理事業に伴って破壊されるであろう100基を越える窯跡に対して、部分的でも保存活用の道をさぐる努力がなされるようになってきた。

今回の報告で中通遺跡群についての事実報告は終了するが、その重要性を充分表わしきるものを作成することはできなかった。今後とも検討を続けていきたいと思う。

最後に調査に携わった方々のお名前を上げてその労に感謝したい。

池田タツヨ・岩塚エイ子・刈野恵美子・荻間幸子・久間スギ・小松原輝夫・小森久雄・篠原東美子・白水クマ・白水富江・高山和恵・田島幸子・田中岩男・田中金太郎・田中フミ子・中山さつき・平田涼子・藤井正・樋口紀子・宮田フジノ・渡辺休枝・井手美智子・中藤弘子・野田節子・松本利子・牟田昌子

付．大野城市中通古墳壁顔料について

古墳内壁の赤褐色着色部分について鉄及び水銀を分析した結果次のとおりである。

1. 鉄について

着色面のある岩石の小塊から着色部分 6 cm^2 (底辺 6 cm 、高さ 2 cm の三角形) をけずり取り、粗粒 10.75 g を得、これを試料とした。これに塩酸を加えると着色部は直ちに溶解し、黄色の液となった。これを濾過して濾液を取り水で 100 ml の検液とし、オルトフェナントロリン法で鉄の定量を行った。

1) 着色部分の単位面積当りの Fe_2O_3 量は

$$\text{Fe}_2\text{O}_3 \quad 1.42\text{ mg / cm}^2$$

2) けずり取った粗粒中の Fe_2O_3 量は

$$\text{Fe}_2\text{O}_3 = 8.50\text{ mg} = 0.07\%$$

2. 水銀について

着色部分の表面を約 100 mg けずり取りゼーマン水銀分析計により測定したが極めて微量の水銀を検出したにすぎない。

以上の結果から着色部分は酸化鉄＝ベンガラによるものと推定される。

分析担当者 福岡県衛生公害センター

森木弘樹

重江伸也

松枝隆彦

遺物觀察表

遺物 番号	器 種	法 量 ①器高 ②口径 ③受部径 ④底径 ⑤脚部径	ヘラ 記号	調 整 及 び 特 徴	備 考
1	杯 蓋	①2.25 ②7.4 ③10.1	○	天井部外面1/3ヘラ切りの後ナデ。内面中央不定方向のナデ。他はヨコナデ。胎土細粒やや含む。焼成不良。色調内外とも淡黄灰色。	
2	〃	①2 ②7.3 ③9.8	○	天井部外面1/3調整不明。内面中央不定方向ナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒多く含む。焼成不良。色調内外とも淡黄灰色。	
3	〃	①2.2 ②7.4 ③10.1	○	天井部外面1/3ヘラ切りの後ナデ。内面中央不定方向のナデ。他はヨコナデ。胎土細粒やや含む。焼成良好。色調内外とも淡灰色。	ほぼ完形品
4	〃	①2.2 ②7.2 ③9.9	○	天井部外面1/3ヘラ切りの後ナデ。内面中央ナデ。他はヨコナデ。胎土細粒やや含む。焼成不良。色調内淡茶褐色、外淡黄灰色。	完形品
5	〃	①2.2 ②7.4 ③10.1	○	天井部外面1/3ヘラ切りの後ナデ。内面中央ナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒多く含む。焼成良好。色調内淡茶灰色、外淡灰色。	完形品
6	〃	①2.2 ②7.3 ③9.7	○	天井部外面1/3ヘラ切りの後ナデ。内面中央ナデ。他はヨコナデ。胎土細粒多く含む。焼成良好。色調内淡青灰色、外灰色。	完形品
7	〃	①2.15 ②7.6 ③10.2	○	天井部外面1/3ヘラ切りの後ナデ。内面中央ナデ。他はヨコナデ。胎土細粒多く含む。焼成良好。色調内外とも淡青灰色。	完形品
8	〃	①2.3 ②7.3 ③9.9	○	天井部外面1/3ヘラ切りの後ナデ。内面中央ナデ。他はヨコナデ。胎土細粒多く含む。焼成良好。色調内外とも淡青灰色。	完形品
9	〃	①2.3 ②7.3 ③9.8	○	天井部外面1/2ナデ。内面中央不定方向のナデ。他はヨコナデ。胎土細粒多く含む。焼成良好。色調内外とも淡青灰色。	
10	杯 身	①3.6 ②9.6 ④4.6	○	底部外面ヘラ切りの後ナデ。内面中央ナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒やや含む。焼成不良。色調内外とも淡黄灰色。	
11	〃	①3.7 ②9.1 ④4.3	○	底部外面ヘラ切りの後不定方向のナデ。内面中央ナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒多く含む。焼成不良。色調内外とも淡橙灰色。	
12	〃	①3.3 ②9 ④5.3	○	底部外面ヘラ切りの後ナデ。内面中央不定方向のナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒やや含む。焼成やや良好。色調内外とも淡灰色。	完形品
13	〃	①3.1 ②9.2 ④5.8	○	底部外面ヘラ切りの後ナデ。内面中央ナデ。他はヨコナデ。胎土細粒多く含む。焼成良好。色調内外とも淡青灰色。	完形品
14	〃	①3.3 ②9.2 ④5.7	○	底部外面ヘラ切りの後ナデ。内面中央ナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒やや含む。焼成良好。色調内外とも淡青灰色。	完形品
15	〃	①3.4 ②9 ④5.3	○	底部外面ヘラ切りの後不定方向のナデ。内面中央ナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒やや含む。焼成良好。色調内外とも淡青灰色。	残存1/4

遺物 番号	器 種	法 量 ①器高 ②口径 ③受部径④底径⑤脚部径	ヘラ 記号	調 整 及 び 特 徴	備 考
16	杯 身	①3.05 ②9 ④5.7	○	底部外面ヘラ切りの後ナデ。内面中央ナデ。 他はヨコナデ。胎土砂粒多く含む。 焼成不良。色調内外とも淡茶褐色。	
17	〃	①3.2 ②9.8 ④4.9	○	底部外面ヘラ切りの後ナデ。内面中央不定方向の ナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒多く含む。 焼成良好。色調内外とも淡青灰色。	完形品
18	壺	②14.6 最大径 23.8		残存部内外面ともヨコナデ。 胎土砂粒を含む。焼成良好。 色調内暗褐色、外灰褐色。	残存1/4
19	椀	①(5.8) ②11.8		残存部内外面ともヨコナデ。外面口縁部近くに 2本の沈線。胎土砂粒を含む。 焼成良好。色調内外とも灰色。	残存1/4
20	朽 蓋	①2.15 ②7.8 ③10.2	○	天井部外面1/3ヘラ切り未調整。内面中央ナデ。 他はヨコナデ。胎土砂粒多く含む。 焼成良好。色調内淡紫褐色、外淡灰色。	
21	〃	①2.3 ②8.2 ③10.6	○	天井部外面1/3ヘラ切りの後ナデ。内面中央不定方向 のナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒やや含む。 焼成やや良好。色調内青灰色、外灰色。	
22	〃	①2.2 ②7.9 ③10.2	○	天井部外面1/3ヘラ切り未調整。内面中央ナデ。 他はヨコナデ。胎土砂粒多く含む。 焼成良好。色調内青灰色、外灰色。	
23	杯 身	①3.3 ②9.2 ④5.7	○	底部外面ヘラ切り未調整。内面中央不定方向のナ デ。他はヨコナデ。胎土砂粒やや含む。 焼成良好。色調内淡紫褐色、外黒灰色。	
24	〃	①3.65 ②10 ④4	○	底部外面ヘラ切り未調整。内面中央不定方向のナ デ。他はヨコナデ。胎土砂粒多く含む。 焼成良好。色調内淡青灰色、外黒灰色。	口縁部1/4欠損
25	〃	①3.3 ②9 ④6		底部内面中央不定方向のナデ。他はヨコナデ。 胎土砂粒多く含む。 焼成良好。色調内外とも灰色。	残存1/4
26	〃	①3.5 ②9.8 ④6.3	○	底部外面ヘラ切りの後ナデ。内面中央ナデ。 他はヨコナデ。胎土砂粒やや含む。 焼成不良。色調内外とも淡灰色。	
27	〃	①3.4 ②12.0 ③13.9	○	外面底部1/2ヘラ削り。内面中央ナデ。 他はヨコナデ。胎土砂粒やや含む。 焼成良好。色調内外とも淡青灰色。	口縁部1/6欠損
28	〃	①4 ②11.0 ③12.2	○	外面底部1/3ヘラ削り。内面中央ナデ。 他はヨコナデ。胎土砂粒多く含む。 焼成良好。色調内灰色、外淡灰色。	完形品 外面灰かぶり
29	〃	①3.75 ②16.5 ③12.8	○	外面底部1/3ヘラ削り。内面中央ナデ。 他はヨコナデ。胎土砂粒やや含む。 焼成良好。色調内外とも淡青灰色。	完形品
30	椀	①(4) ②10.8		残存部内外面ともヨコナデ。 胎土砂粒多く含む。 焼成良好。色調内外とも淡青灰色。	

遺物 番号	器 種	法 量 ①器高 ②口径 ③受部径④底径⑤脚部径	へら 記号	調 整 及 び 特 徴	備 考
31	椀	①6.45 ②11.8	○	外面1/3へら削り。内面中央ナデ。 口縁部近く2本の沈線。胎土砂粒多く含む。 焼成良好。色調内外とも淡紫褐色。	完形品
32	ぐいのみ 型土器	①5.1 ②5.3 ④4.7		外面底部不定方向のへら削り。胴部1/4へら削り。 他はヨコナデ。胎土砂粒やや含む。 焼成良好。色調内外とも淡灰色。	完形品
33	〃	①5.35 ②5.7 ④5		外面底部不定方向のへら削り。他はヨコナデ。 胎土砂粒多く含む。 焼成良好。色調内外とも淡青灰色。	完形品
34	杯	①7.9 ②19.1	○	底部外面へら切り。内面中央不定方向のナデ。 他はヨコナデ。胎土砂粒やや含む。 焼成良好。色調内外とも暗灰色。	残存1/3
35	短頸壺	①7.5 ②6.3 最大径 9.5	○	口縁から底部にかけて内外面ともヨコナデ。 胎土砂粒多く含む。焼成良好。 色調内外とも淡灰色。	口縁部1/3欠損 底部欠損
36	小型壺	①4.8 ②3.7 最大径 7.4	○	底部一定方向のへら削り。他はヨコナデ。 胎土砂粒わずかに含む。焼成良好。 色調内外とも暗紫色。	口縁部1/2欠損 胴部1/4欠損
37	壺	①8 ②5 ④6.5 最大径 10.25	○	口唇から胴部にかけてヨコナデ。底部へら切未調 整。肩部に3本の沈線。胎土砂粒やや含む。 焼成良好。色調内外とも淡青灰色。	口縁部1/3欠損
38	高 杯	①(5.5) ②11.5		杯部内面中央ナデ。他はヨコナデ。 胎土砂粒やや含む。焼成不良。 色調内外とも淡灰色。	脚部欠損
39	〃	①(1.9) ⑤6.8		脚部ヨコナデ。胎土砂粒含む。 焼成やや不良。 色調内外とも淡黄灰色。	杯部欠損
40	〃	①12.85 ②11		杯部外面1/3回転へら削り。内面中央ナデ。 他はヨコナデ。杯、脚部沈線あり。胎土砂粒多く 含む。焼成良好。色調内外とも淡青灰色。	
41	〃	①7.5 ②9.4		杯部内外面ヨコナデ。接合部から脚部にかけてヨ コナデ。杯部と脚部に沈線あり。胎土砂粒やや含 む。焼成良好。色調内暗灰色、外淡紫褐色。	
42	〃	①(8.6)		脚部内外面ともヨコナデ。2本の沈線。 胎土細粒やや含む。焼成不良。 色調内外とも淡黄灰色。	杯部欠損
43	平 瓶	①13.3 ②6.5	○	底部へら切りの後不定方向のナデ。他はヨコナデ。 胎土砂粒多く含む。焼成やや不良。 色調内外とも灰色。	完形品
44	甕	①22.2 ②12.4 ④23.3		体部外面下半平行叩きのちカキ目。上位に波状文 を施す。内面下半同心円文。他はヨコナデ。胎土 砂粒を含む。焼成不良。色調内外とも赤褐色。	
45	短頸壺	①11.1 ②10.2 ④5.5 最大径13.6	○	口縁部から胴部下端にかけて内外面ともヨコナデ。 胴部下端回転へら削り。胎土砂粒多く含む。 焼成やや良好。色調内外とも茶褐色。	口縁部1/3欠損

遺物番号	器種	法量 ①器高 ②口径 ③受部径 ④底径 ⑤脚部径	ヘラ記号	調整及び特徴	備考
46	脚付碗	①(10.55) ②(15) ⑤(9.6) 最大径15.8		内面中央ナデ。他はヨコナデ。 胎土砂粒多く含む。焼成やや良好。 色調内外とも黒灰色。	完形品
47	脚付壺	①(10) ⑤11.2 最大径 12.8		体部外面上端カキ目、下端回転ヘラ削り。内面下端 不定方向のナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒を多量に 含む。焼成良好。色調内暗灰色、外黒灰色。	残存1/2
48	碗	①4.9 ②12		残存部内外面ともナデ。(磨減が激しい為明確では ない) 胎土黒砂粒を含む。 焼成不良。色調内外とも赤褐色。	残存1/2
49	皿	①2.3 ②12.4 ⑤7.8		底部外面回転糸切り。内面中央不定方向の仕上げ ナデ。他はヨコナデ。胎土精良。 焼成良好。色調内外とも赤褐色。	残存2/3
50	杯	①3.3 ②15		底部外面回転糸切り。内面中央不定方向の仕上げ ナデ。他はヨコナデ。胎土精良。 焼成良好。色調内外とも赤褐色。	口縁部1/2欠損
51	碗	高台径 6.8		残存部内外面ともヨコナデ。胎土砂粒やや含む。 焼成良好。色調内外とも赤褐色。	底部のみ残存
52	〃	①5 ②12.8		杯部内面は炭素粒を吸着させている。杯部内面へ ラ磨き、他はヨコナデ。胎土砂粒を多く含む。 焼成軟質。色調内黒灰色、外赤褐色。	残存2/3
53	瓦器碗	①6.1 ②16.6		内外面ナデだが、外面は凹凸激しい。 胎土細粒多く含む。焼成良好。 色調内灰色、外淡黄灰色。	完形品

中通 D-1 窯出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量 ①器高 ②口径 ③受部径 ④底部径 ⑤脚部径	ヘラ記号	調整及び特徴	備考
1	杯蓋	①2.95 ②12.8		天井部外面1/3回転ヘラ削り。内面中央ナデ。 他はヨコナデ。胎土細粒多く含む。焼成良好。 色調内外とも淡灰色。	残存1/4
2	〃	①3.35 ②12.3	○	天井部外面1/3回転ヘラ削り。内面中央不定方向の ナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒わずかに含む。 焼成良好。色調内青灰色、外黒灰色。	灰かぶり
3	〃	①3.2 ②11.8	○	天井部外面1/3ヘラ切りの後ナデ。内面中央不定方 向のナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒含む。 焼成良好。色調内外とも暗灰色。	残存2/3
4	〃	①3.35 ②11.6		天井部外面1/3回転ヘラ削り。内面中央不定方向の ナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒やや含む。 焼成良好。色調内灰色、外暗灰色。	残存1/3
5	〃	①3.8 ②11.5	○	天井部外面1/3回転ヘラ削り。内面中央不定方向の ナデ。他はヨコナデ。胎土細粒含む。 焼成不良。色調内外とも黄灰色。	残存1/3

遺物 番号	器 種	法量 ①器高 ②口径 ③受部径④底径⑤脚部径	へら 記号	調整及び特徴	備考
6	〃	①3 ②12	○	天井部外面1/3回転へら削り。内面中央不定方向のナデ。他はヨコナデ。胎土細粒わずかに含む。焼成良好。色調内外とも暗紫色。	残存1/2
7	〃	①2.05 ②7.4 ③9	○	天井部外面2/3回転へら削り。他はヨコナデ。胎土砂粒やや含む。焼成良好。色調内外とも黒灰色。	完形品
8	〃	①2.15 ②7.6 ③9.2	○	外面不定方向のナデ。内面ヨコナデ。胎土、砂粒多く含む。焼成良好。色調内外とも黒灰色。	完形品
9	〃	①2.55 ②8.4 ③10.1	○	天井部外面2/3回転へら削り。他はヨコナデ。胎土砂粒やや含む。焼成良好。色調内外とも黒灰色。	完形品
10	杯身	①(3.1) ②11 ③13		残存部外面下端回転へら削り。他はヨコナデ。胎土砂粒わずかに含む。焼成不良。色調内淡黄灰色、外淡茶灰色。	少片
11	〃	①(3.1) ②10 ③12.5	○	残存部外面下端回転へら削り。内面中央不定方向のナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒含む。焼成良好。色調内外とも暗灰色。	
12	〃	①(3.2) ②10 ③12.6		残存部外面下端回転へら削り。他はヨコナデ。胎土砂粒やや含む。焼成不良。色調内外とも淡黄灰色。	
13	〃	①(3.4) ②10.4 ③12.4		残存部外面下端回転へら削り。内面中央不定方向のナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒含む。焼成良好。色調内外とも灰色。	
14	〃	①2.7 ②8.6 ③10.2	○	底部外面1/3一定方向のへら削り。内面中央不定方向のナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒多く含む。焼成良好。色調内外とも暗灰色。	残存1/3
15	椀	①(4.9) ②9.8		残存部外面下端回転へら削り。他はヨコナデ。胎土砂粒やや含む。焼成良好。色調内外とも暗灰色。	
16	高杯	①(4.8) 7.8		残存部内外面ともヨコナデ。胎土砂粒やや含む。焼成良好。色調内外とも黒灰色。	杯部欠損
17	杯蓋	①2.95 ②13.2		天井部内外面中央ナデ。天井部外面回転へら削り。他はヨコナデ。胎土砂粒わずかに含む。焼成良好。色調内外とも青灰色。	残存1/2
18	〃	①(3.6) ②12.2		天井部外面1/3回転へら削り。内面中央不定方向のナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒やや含む。焼成不良。色調内外とも淡茶灰色。	残存3/4
19	〃	①3.6 ②12.4	○	天井部外面2/3回転へら削り。内面中央不定方向のナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒やや含む。焼成やや良好。色調内外とも淡茶灰色。	ほぼ完形品
20	〃	①4.25 ②12.4	○	天井部外面1/3回転へら削り。内面中央不定方向のナデ。他はヨコナデ。胎土細粒やや含む。焼成やや良好。色調内淡灰色、外灰色。	残存2/3

遺物番号	器種	法量 ①器高 ②口径 ③受部径 ④底径 ⑤脚部径	ヘラ記号	調整及び特徴	備考
21	〃	①3.45 ②12.4		天井部外面2/3回転ヘラ削り。内面中央不定方向のナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒わずかに含む。焼成良好。色調内青灰色、外暗灰色。	残存3/4
22	〃	①3.3 ②12.1	○	天井部外面2/3回転ヘラ削り。内面中央ナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒多く含む。焼成良好。色調内外とも淡灰色。	残存2/3
23	〃	①3.3 ②12		天井部外面2/3ナデ。内面中央不定方向のナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒やや含む。焼成良好。色調内外とも暗灰色。	残存2/3
24	〃	①(3.9) ②11.6		天井部外面1/3回転ヘラ削り。内面中央不定方向のナデ。他はヨコナデ。胎土細粒わずかに含む。焼成やや良好。色調内外とも灰色。	残存1/2
25	〃	①3.3 ②11.4		天井部外面1/3ナデ。内面中央不定方向のナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒やや含む。焼成良好。色調内淡灰色、外黒灰色。	残存2/3
26	〃	①3.5 ②11.6		天井部外面2/3回転ヘラ削り。内面中央ナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒多く含む。焼成良好。色調内外とも黒灰色。	残存3/4
27	〃	①3.65 ②11	○	天井部外面1/3回転ヘラ削り。内面中央不定方向のナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒やや含む。焼成やや良好。色調内外とも青灰色。	残存2/3
28	〃	①3.3 ②11.4		天井部外面2/3ナデ。内面中央ナデ。他はヨコナデ。胎土細粒わずかに含む。焼成良好。色調内外とも灰色。	残存2/3
29	〃	①3.8 ②11	○	天井部外面1/3回転ヘラ削り。内面中央不定方向のナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒やや含む。焼成良好。色調内淡灰色、外灰色。	残存1/4
30	〃	①3.6 ②11.1		天井部外面1/3回転ヘラ削り。内面中央ナデ。他はヨコナデ。胎土細粒わずかに含む。焼成良好。色調内外とも暗灰色。	残存1/2
31	杯身	①3.5 ②11.4 ③14	○	底部外面2/3回転ヘラ削り。内面中央不定方向のナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒やや含む。焼成良好。色調内灰色、外暗灰色。	残存1/4
32	〃	①2.85 ②11.4 ③13.6		底部外面2/3回転ヘラ削り。内面中央不定方向のナデ。他はヨコナデ。胎土細粒多く含む。焼成良好。色調内外とも淡青灰色。	ほぼ完形 底部に穿孔あり
33	〃	①3.4 ②10.6 ③13	○	底部外面2/3回転ヘラ削り。内面中央ナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒やや含む。焼成不良。色調内淡黄灰色、外淡茶灰色。	残存3/4
34	〃	①3.8 ②10.4 ③12.6	○	底部外面2/3回転ヘラ削り。内面中央ナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒やや含む。焼成やや良好。色調内淡灰色、外灰色。	ほぼ完形品
35	〃	①3.5 ②10.2 ③12.4	○	底部外面2/3回転ヘラ削り。内面中央ナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒やや含む。焼成良好。色調内外とも暗灰色。	残存1/2

遺物番号	器種	法量 ③受部径	①器高 ④底径	②口径 ⑤脚部径	へら 記号	調整及び特徴	備考
36	杯身	①4.6	②10.3	③12.4	○	底部外面2/3回転へら削り。内面中央ナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒やや含む。焼成良好。色調内外とも灰色。	残存2/5
37	ク	①(4)	②10.4			残存部内外面ともヨコナデ。2本の沈線あり。胎土細粒わずかに含むが精良。焼成やや良好。色調内外とも淡紫褐色。	残存1/2
38	ク	①(4)	②11.4			残存部外面下端回転へら削り。他はヨコナデ。2本の沈線あり。胎土砂粒やや含む。焼成良好。色調内外とも淡灰色。	残存1/3
39	平瓶	①(16.4)	②8.3			残存部外面下端回転へら削り。口縁から胴部にかけて内外面ともヨコナデ。胎土砂粒多く含む。焼成良好。色調内外とも灰色。	底部欠損
40	高杯	①(4.4)				残存部内外面ともヨコナデ。胎土細粒やや含む。胎土細粒やや含む。焼成不良。色調内外とも淡黄灰色。	杯部欠損
41	ク	①(3.3)				残存部内外面ともヨコナデ。胎土細粒わずかに含む。焼成良好。色調内外面とも灰色。	杯部欠損
42	平瓶					残存部ヨコナデ、カキ目。胎土砂粒やや含む。焼成良好。色調内外とも黒灰色。	口縁の少片のみ残存。提瓶かも知れない。
43	甕					口縁部外面へら描きの連続斜行線を施す。他はヨコナデ。胎土砂粒多く含む。焼成良好。色調内外とも淡黄灰色。	口縁の少片のみ残存

中通D-2 窯出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量 ③受部径	①器高 ④底径	②口径 ⑤脚部径	へら 記号	調整及び特徴	備考
1	杯身	①(2.9)	②10.5	③13		底部外面1/3回転へら削り。他はヨコナデ。胎土砂粒をわずかに含む。焼成良好。色調内外とも灰色。	残存1/5
2	杯蓋	①(2.5)				残存部ヨコナデ。胎土砂粒をわずかに含む。焼成良好。色調内外面とも灰色。	残存1/6
3	高杯	①(4)	⑤7.2			脚部内外面ともヨコナデ。胎土砂粒をわずかに含む。焼成良好。色調内外面とも暗灰色。	杯部欠損
4	杯身	①(4)	②11.5			残存部内外面ともヨコナデ。胎土砂粒をわずかに含む。焼成良好。色調内外面とも灰色。	残存1/3
5	杯蓋	①3.5	②12.7		○	天井部外面1/2回転へら削り。内面中央不定方向のナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒をわずかに含む。焼成不良。色調内淡灰色、外淡黄灰色。	残存3/5

遺物 番号	器 種	法 量 ①器高 ②口径 ③受部径④底径⑤脚部径	へら 記号	調 整 及 び 特 徴	備 考
6	杯 蓋	①3.6 ②11.8		天井部外面1/3回転へら削り。内面中央ナデ。 他はヨコナデ。胎土砂粒をやや含む。 焼成良好。色調内外とも灰褐色。	残存1/4
7	〃	①3.5 ②9.1 ③11.4		天井部外面1/4回転へら削り。他はヨコナデ。 胎土砂粒をわずかに含む。 焼成良好。色調内外とも灰色。	完形品
8	〃	①4.1 ②9.2 ③11.8	○	天井部外面1/3回転へら削り。内面中央ナデ。 他はヨコナデ。胎土砂粒をわずかに含む。 焼成やや良好。色調内淡黄灰色、外茶褐色。	完形品
9	杯 身	①3.5 ②11.1 ③13.3		底部外面1/3回転へら削り。内面中央不定方向のナ デ。他はヨコナデ。胎土砂粒を少し含む。 焼成不良。色調内外とも淡黄灰色。	残存1/3
10	〃	①3.5 ②11.6 ③13.5		底部外面1/3回転へら削り。内面中央ナデ。 他はヨコナデ。胎土砂粒を多量に含む。 焼成良好。色調内淡茶褐色、外灰色。	完形品
11	〃	①3.5 ②11.1 ③13.3		底部外面1/3回転へら削り。内面中央不定方向のナ デ。他はヨコナデ。胎土砂粒を少し含む。 焼成不良。色調内外とも淡黄灰色。	完形品
12	〃	①(4.1) ②10.4		残存部外面下端回転へら削り。他は回転ナデ。 胎土砂粒をやや含む。焼成不良。 色調内外とも淡茶褐色。	残存2/3
13	高 杯	①(4.9) ⑤9.5		残存部内外面ともヨコナデ。胎土砂粒をわずかに 含む。焼成良好。 色調内外とも暗灰色。	杯部欠損
14	杯 蓋	①3.3 ②14		天井部外面1/3回転へら削り。他はヨコナデ。 胎土砂粒を多量に含む。焼成良好。 色調内外とも暗灰色。	残存1/3
15	〃	①3.4 ②13.8		天井部外面1/2回転へら削り。内面中央不定方向の ナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒をわずかに含む。 焼成良好。色調内外とも淡茶褐色。	残存2/3
16	〃	①3.7 ②13		天井部外面1/3回転へら削り。内面中央不定方向の ナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒をやや含む。 焼成良好。色調内淡黄灰色、外淡茶褐色。	残存4/5
17	〃	①3.6 ②13	○	天井部外面1/3回転へら削り。内面中央不定方向の ナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒をやや含む。 焼成不良。色調内黄灰色、外淡茶褐色。	完形品
18	〃	①3.6 ②12.4	○	天井部外面1/2回転へら削り。内面中央不定方向の ナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒をやや含む。 焼成良好。色調内外とも暗灰色。	残存2/3
19	〃	①3.8 ②12.4		天井部外面1/3回転へら削り。内面中央ナデ。 他はヨコナデ。胎土砂粒をやや含む。 焼成良好。色調内外とも灰色。	残存1/3
20	〃	①4 ②12.4		天井部外面1/3へら切り後ナデ。内面中央不定方向 ナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒を多量に含む。 焼成不良。色調内淡黄灰色、外淡褐色。	残存2/3

遺物 番号	器 種	法 量 ①器高 ②口径 ③受部径 ④底径 ⑤脚部径	ヘラ 記号	調 整 及 び 特 徴	備 考
21	杯 蓋	①3.2 ②12		天井部外面1/3回転ヘラ削り。内面中央ナデ。 他はヨコナデ。胎土砂粒をやや含む。 焼成良好。色調内外とも灰色。	残存2/3
22	〃	①3.6 ②12.6	○	天井部外面1/3回転ヘラ削り。内面不定方向のナデ。 他はヨコナデ。胎土砂粒をわずかに含む。 焼成不良。色調内外とも淡黄灰色。	残存3/4
23	〃	①3.7 ②12.4	○	天井部外面1/3回転ヘラ削り。内面中央ナデ。 他はヨコナデ。胎土砂粒をわずかに含む。 焼成良好。色調内淡茶灰色、外暗灰色。	完形品
24	〃	①3.4 ②12.4		天井部外面1/2回転ヘラ削り。内面中央不定方向の ナデ。他はヨコナデ。胎土、砂粒をやや含む。 焼成良好。色調内淡黄灰色、外灰色。	残存3/4
25	〃	①3.5 ②11.4	○	天井部外面1/3ヘラ切り後ナデ。内面中央不定方 向のナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒をやや含む。 焼成良好。色調内外とも淡灰色。	残存2/3
26	〃	①3.95 ②11.8		天井部外面1/4ヘラ切り後ナデ。内面中央ナデ。 他はヨコナデ。胎土砂粒をやや含む。 焼成良好。色調内外とも暗灰色。	残存1/2
27	〃	①3.75 ②11.8	○	天井部外面1/2回転ヘラ削り。内面中央不定方向の ナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒をわずかに含む。 焼成良好。色調内淡灰色、外灰色。	残存2/3
28	〃	①3.35 ②10.5 ③12.3		天井部外面1/3回転ヘラ削り。内面中央ナデ。 他はヨコナデ。胎土砂粒を多量に含む。 焼成良好。色調内外とも淡青灰色。	残存3/4
29	〃	①3.55 ②9 ③11.2		天井部外面1/3回転ヘラ削り。他はヨコナデ。 胎土砂粒をやや含む。焼成良好。 色調内外とも淡青灰色。	残存2/3
30	杯 身	①3.6 ②11.8 ③14.2	○	底部外面1/2回転ヘラ削り。内面中央不定方向のナ デ。他はヨコナデ。胎土砂粒をやや含む。 焼成不良。色調内外とも淡黄灰色。	残存3/4
31	〃	①3.7 ②11.2 ③13.4	○	底部外面1/3回転ヘラ削り。内面中央不定方向のナ デ。他はヨコナデ。胎土砂粒をやや含む。 焼成良好。色調内茶褐色、外灰色。	完形品
32	〃	①3.5 ②11.4 ③13.3		底部外面1/2回転ヘラ削り。内面中央不定方向のナ デ。他はヨコナデ。胎土砂粒をやや含む。 焼成良好。色調内灰色、外暗茶褐色。	残存1/2
33	〃	①2.8 ②11.1 ③13.4		底部外面1/3回転ヘラ削り。内面中央不定方向のナ デ。他はヨコナデ。胎土砂粒をやや含む。 焼成良好。色調内外とも灰色。	残存1/2
34	〃	①(3.4) ②10.4 ③12.95	○	底部外面1/2回転ヘラ削り。内面中央ナデ。 他はヨコナデ。胎土砂粒をやや含む。 焼成やや良好。色調内外とも灰色。	残存2/3
35	〃	①(3.05) ②10.7 ③12.8		底部外面1/2回転ヘラ削り。内面中央ナデ。 他はヨコナデ。胎土砂粒をやや含む。 焼成良好。色調内外とも淡茶灰色。	残存2/3

遺物 番号	器 種	法 量 ①器高 ②口径 ③受部径④底径⑤脚部径	ヘラ 記号	調 整 及 び 特 徴	備 考
36	杯 身	①(3.2) ②10.4 ③13		底部外面1/3回転ヘラ削り。内面中央不定方向のナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒を少し含む。焼成不良。色調内外とも淡黄灰色。	完形品
37	〃	①(3.05)②10.6 ③12.8		底部外面1/2回転ヘラ削り。内面中央不定方向のナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒をやや含む。焼成良好。色調内灰色、外淡青灰色。	残存1/2
38	〃	①3.9 ②10.2 ③12.4	○	底部外面1/3回転ヘラ削り。内面中央不定方向のナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒を多く含む。焼成良好。色調内淡灰色、外青灰色。	残存1/2
39	〃	①(3.3) ②9.6 ③11.7		残存部内外面ヨコナデ。胎土砂粒をやや含む。焼成良好。色調内外とも暗青灰色。	残存1/3
40	椀	①(6.4) ②12	○	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面中央ナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒をやや含む。焼成良好。色調内淡灰色、外暗灰色。	残存1/2
41	〃	①(4.6) ②11.2		残存部内外面ともヨコナデ。胎土砂粒をやや含む。焼成良好。色調内淡青灰色、外青灰色。	残存1/4
42	〃	①(4.3) ②10.6		残存部外面下端回転ヘラ削り。他はヨコナデ。胎土砂粒をやや含む。焼成良好。色調内外とも暗灰色。	残存2/3
43	〃	①(4.1) ②10.2		残存部内外面ともヨコナデ。胎土砂粒をわずかに含む。焼成不良。色調内外とも淡茶褐色。	残存2/3
44	杯 身	①4.65 ②10.2		底部外面1/4回転ヘラ削り。内面中央ナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒をわずかに含む。焼成良好。色調内灰色、外淡茶褐色。	完形品
45	〃	①(4.3) ②10.7		残存部内外面ともヨコナデ。胎土砂粒を多く含む。焼成不良。色調内淡黄灰色、外淡茶褐色。	残存2/3
46	〃	①(3.9) ②10.6		残存部外面下端回転ヘラ削り。他はヨコナデ。胎土砂粒をわずかに含む。焼成良好。色調内外とも灰色。	残存1/3
47	〃	①4.6 ②10.2	○	底部外面1/3回転ヘラ削り。他はヨコナデ。胎土砂粒をわずかに含む。焼成やや良好。色調内外とも淡茶褐色。	残存1/2
48	〃	①(3.9) ②9		底部内面中央ナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒をやや含む。焼成良好。色調内暗灰色、外黒灰色。	残存1/3 高杯の可能性あり
49	高 杯	①(5.2) ②9		杯底部内面ナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒を多量に含む。焼成やや良好。色調内淡青灰色、外青灰色。	残存2/3
50	〃	①(4.5) ⑤6.8		脚内面上半ナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒をやや含む。焼成良好。色調内外とも淡茶褐色。	杯部欠損 脚残存1/2

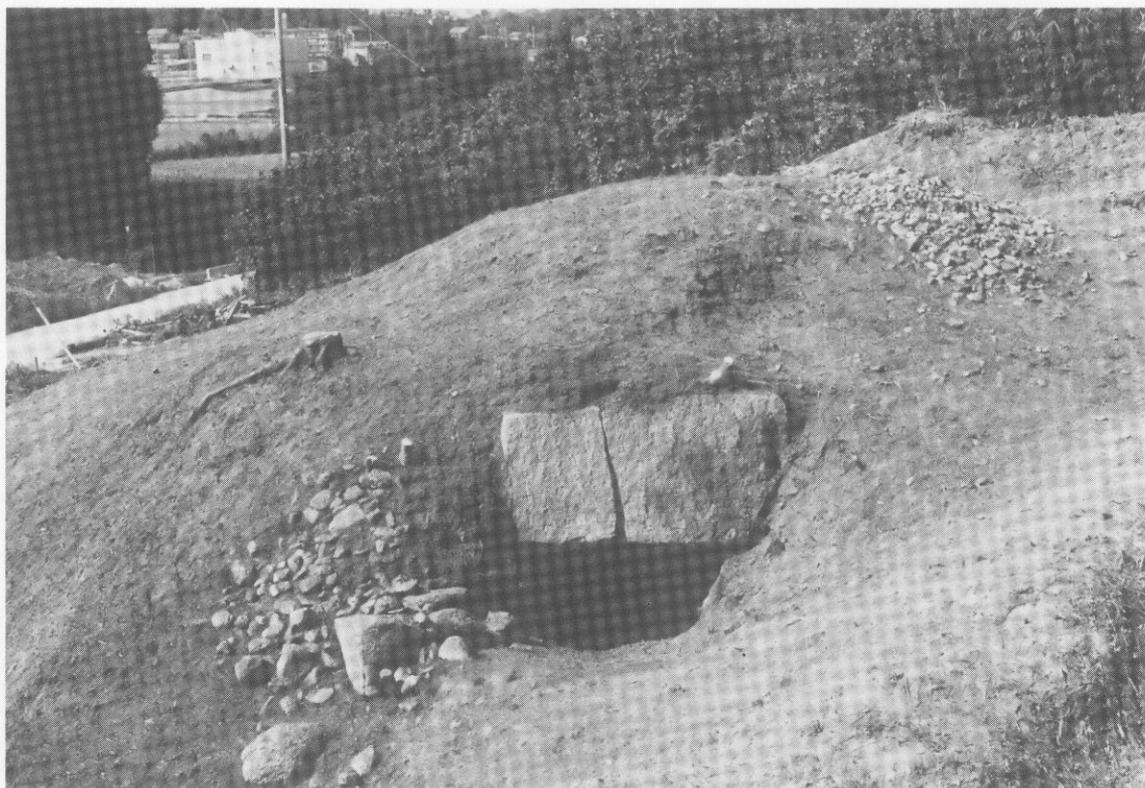
遺物 番号	器 種	法 量 ①器高 ②口径 ③受部径④底径⑤脚部径	ヘラ 記号	調 整 及 び 特 徴	備 考
51	高 杯	①(3.8) ⑤7		脚部内面上半ナデ、他はヨコナデ 胎土砂粒をやや含む。焼成良好。 色調内外とも灰色。	杯部欠損 脚残存1/3
52	杯 蓋	①3.35 ②12.4		天井部外面1/3回転ヘラ削り。内面中央ナデ。 他はヨコナデ。胎土砂粒を多く含む。 焼成良好。色調内外とも暗青灰色。	残存2/3
53	〃	①(3.5) ②10.5		天井部外面1/3回転ヘラ削り。内面中央ナデ。 他はヨコナデ。胎土砂粒をやや含む。 焼成良好。色調内淡青灰色、外暗灰色。	残存1/2
54	〃	①3.3 ②11.4		天井部外面1/3ヘラ切り後ナデ。内面中央ナデ。 他はヨコナデ。胎土砂粒を多く含む。 焼成良好。色調内外とも暗青灰色。	残存2/3
55	〃	①3.6 ②10.4	○	天井部外面1/3一定方向のヘラ削り。内面中央ナ デ。他はヨコナデ。胎土砂粒をわずかに含む。 焼成良好。色調内外とも灰色。	残存1/2
56	〃	①(3.8) ②10.8	○	天井部外面1/3回転ヘラ削り。他はヨコナデ。 胎土砂粒をわずかに含む。焼成良好。 色調内灰色、外黒灰色。	残存1/2
57	〃	①3.4 ②11.6	○	天井部外面1/3回転ヘラ削り。内面中央不定方向の ナデ。他はヨコナデ。胎土砂粒を多く含む。 色調内外とも黒灰色。	残存3/4
58	〃	①3.25 ②9.6 ③11.6		天井部外面2/3回転ヘラ削り。内面中央ナデ。 他はヨコナデ。胎土砂粒をわずかに含む。 焼成良好。色調内淡灰色、外灰色。	残存1/2
59	杯 身	①3.25 ②11.3 ③13.5	○	底部外面1/3ヘラ切り後ナデ。内面中央ナデ。 他はヨコナデ。胎土砂粒を多く含む。 色調内暗灰色、外淡灰色。	残存2/3
60	〃	①3.4 ②9.8 ③13		底部外面1/3ヘラ切り後ナデ。内面中央ナデ。 他はヨコナデ。胎土砂粒をわずかに含む。 焼成良好。色調内淡青灰色、外淡灰色。	残存2/3
61	〃	①4.3 ②9.8 ③12.3	○	底部外面1/4回転ヘラ削り。他はヨコナデ。 胎土砂粒をわずかに含む。焼成良好。 色調内外とも青灰色。	残存2/3
62	椀	①9.4 ②11	○	底部外面ナデ、内面中央ナデ。他はヨコナデ。 胎土砂粒を少し含む。焼成良好。 色調内淡青灰色、外暗灰色。	残存1/2
63	甕	①(7.8)		口縁部外面上位波状文。他はヨコナデ。 胎土砂粒を多く含む。焼成良好。 色調内外とも淡紫褐色。	残存1/6
64	〃	①(10) ②(52)		口縁部外面上位波状文。他はヨコナデ。 胎土砂粒をやや含む。焼成良好。 色調内外とも暗灰色。	残存1/3
65	〃	①(12.9)		口縁部外面上位ヘラ描の連続斜行線を施す。 他はヨコナデ。胎土砂粒をやや含む。 焼成良好。色調内外とも淡青灰色。	残存1/4

遺物 番号	器 種	法 量 ①器高 ②口径 ③受部径④底径⑤脚部径	ヘラ 記号	調 整 及 び 特 徴	備 考
66	甕	①(5)		口縁部外面上位ヘラ描の連続斜行線を施す。 他はヨコナデ。胎土砂粒を多く含む。 焼成良好。色調内外とも灰色。	残存1/6
67	〃	①(10) ②32		口縁部内外面ともヨコナデ。 胎土砂粒をわずかに含む。焼成良好。 色調内外とも赤味がかった灰色。	残存1/2
68	〃	①(10.7) ②33.2 頸部径21.1		口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面平行叩き。 内面同心円文。胎土砂粒をやや含む。 焼成良好。色調内外とも暗灰色。	残存1/4

圖 版



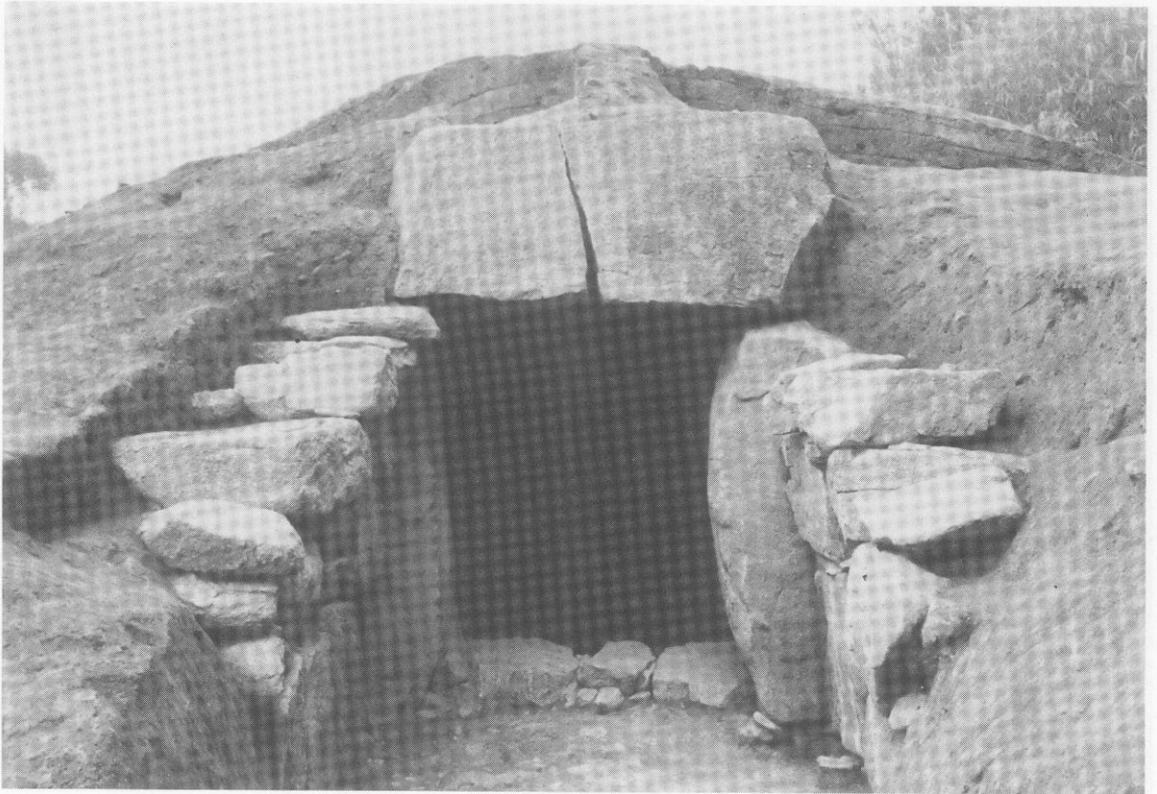
(1) 中通古墳調査前



(2) 中通古墳調査前



(1) 中通古墳調査後



(2) 中通古墳調査後



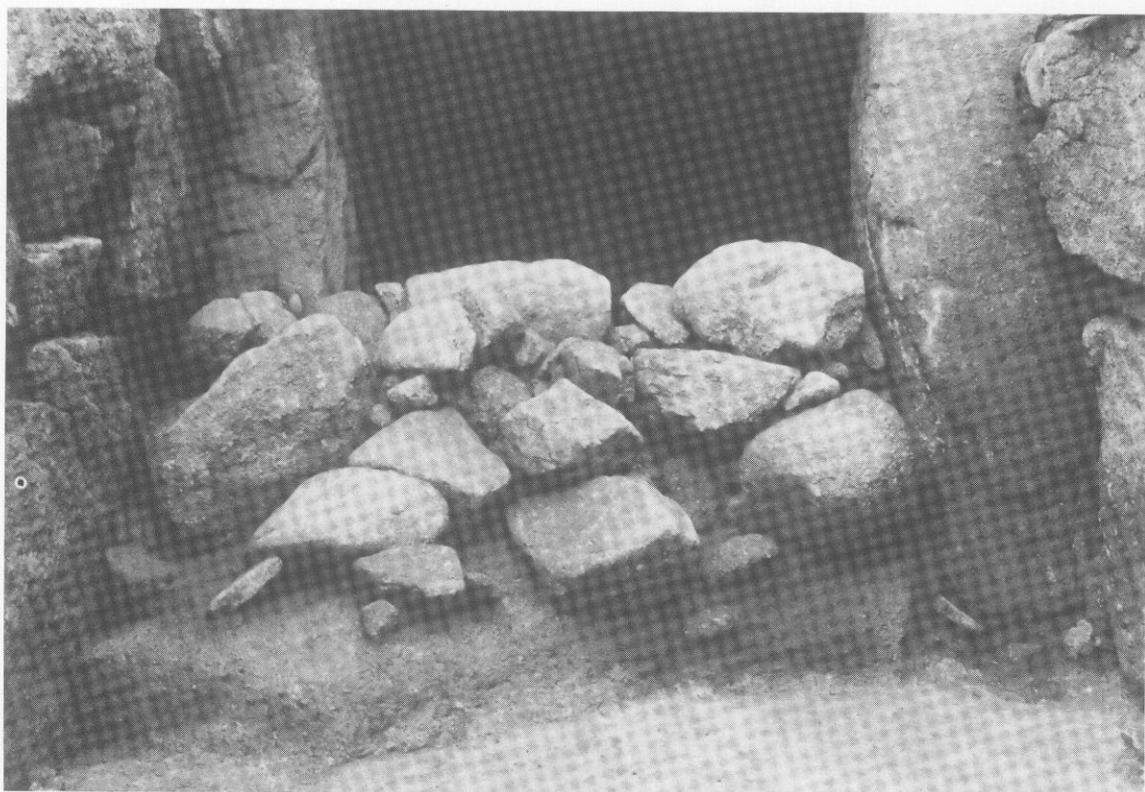
(1) 中通古墳羨道右壁



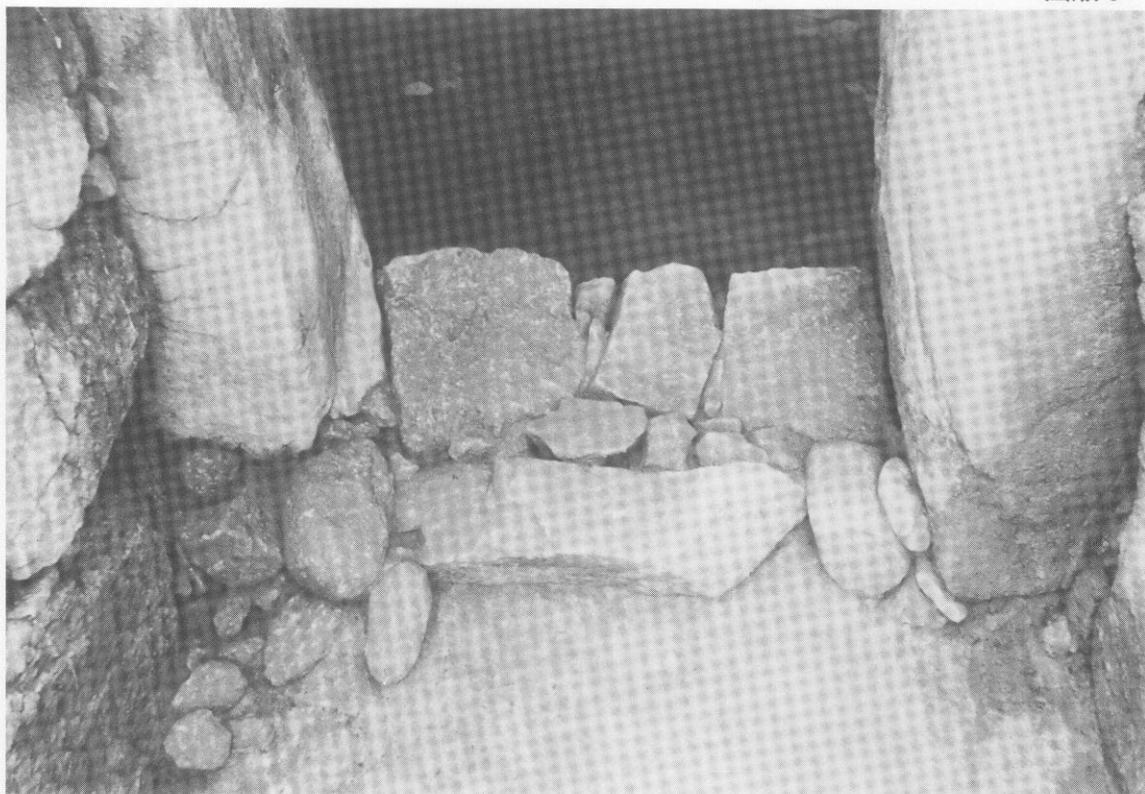
(2) 中通古墳羨道左壁



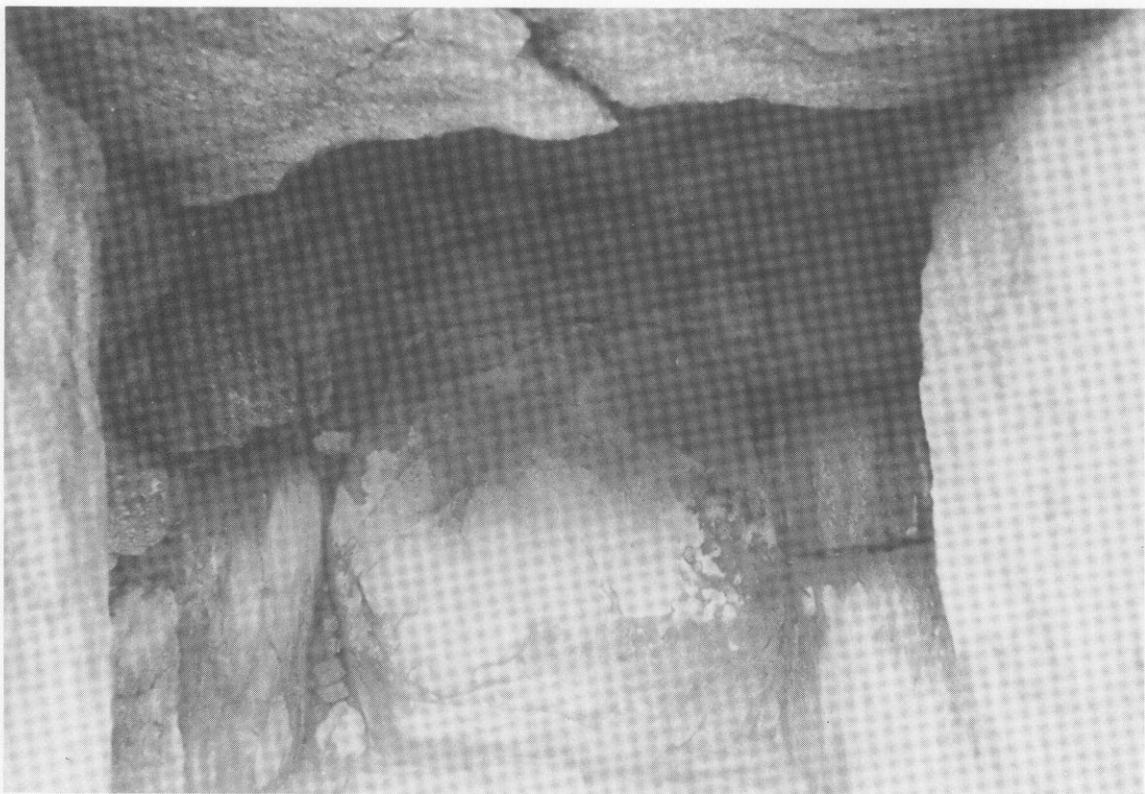
(1) 中通古墳閉塞状況



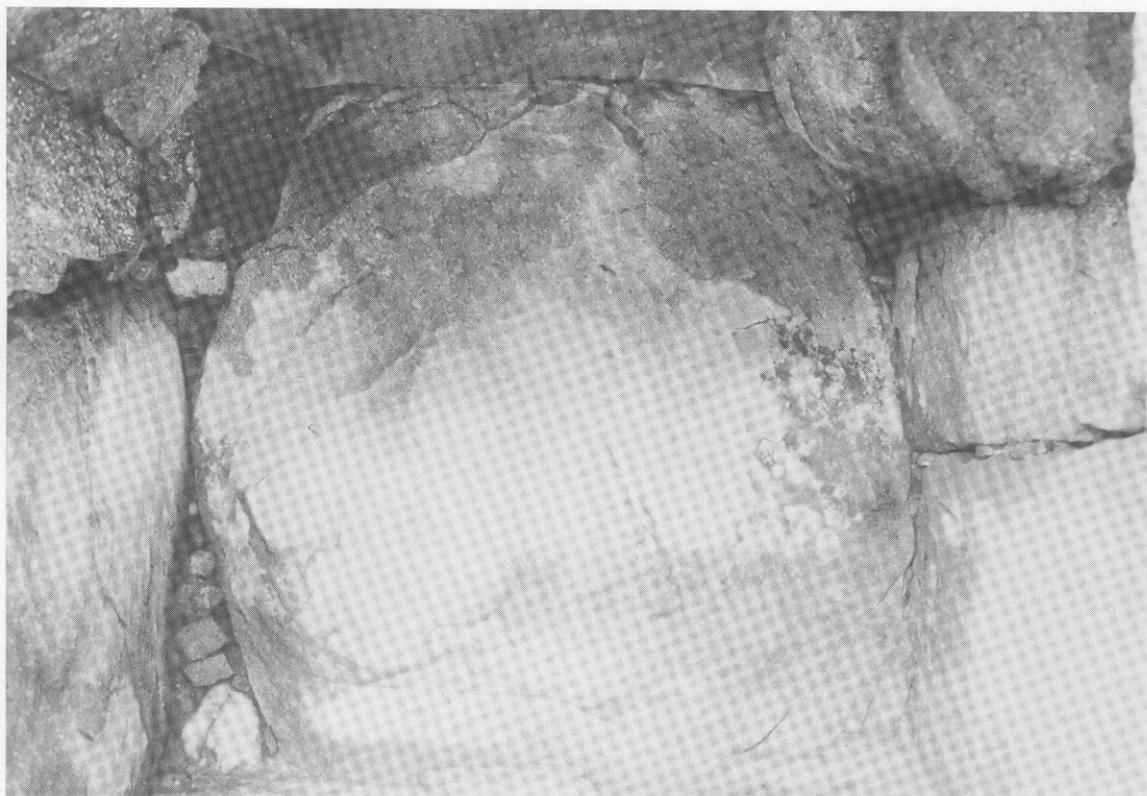
(2) 中通古墳閉塞状況



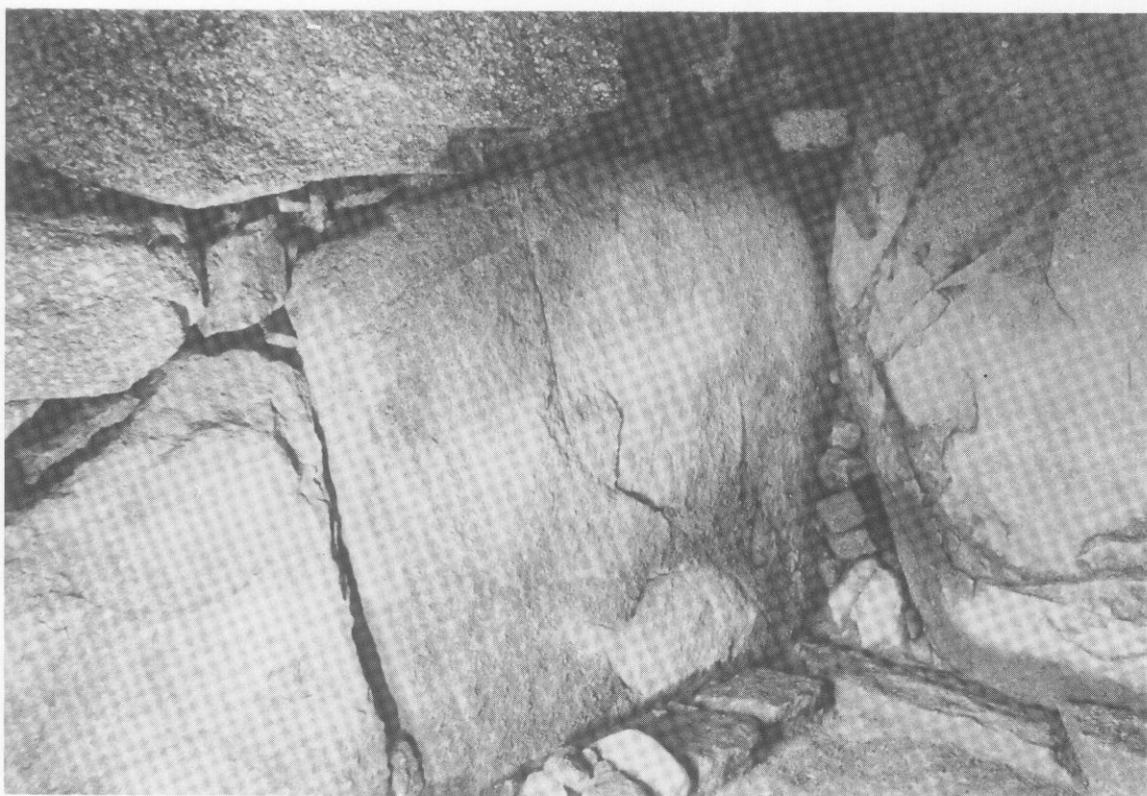
(1) 中通古墳框石



(2) 中通古墳石室



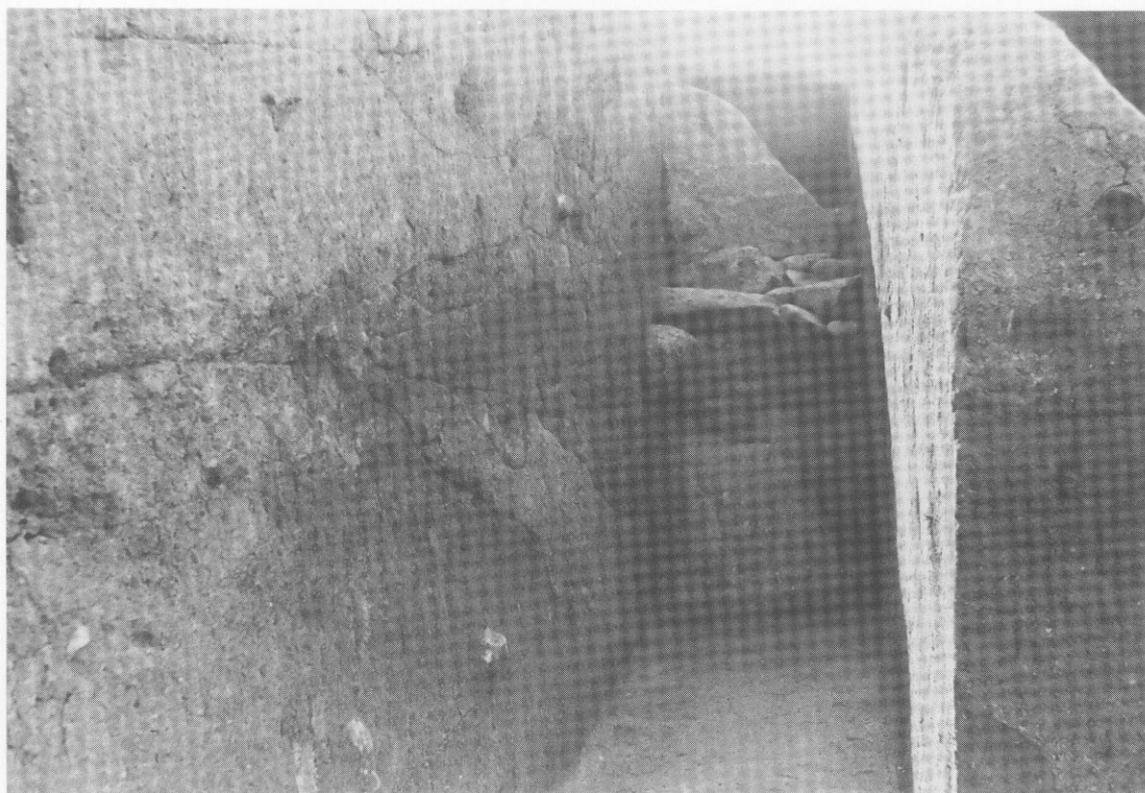
(1) 中通古墳奥壁



(1) 中通古墳左側壁



(1) 中通古墳墳丘トレンチ(東)



(2) 中通古墳墳丘トレンチ(北)



(1) 中通古墳周溝埋土堆積状況(東)



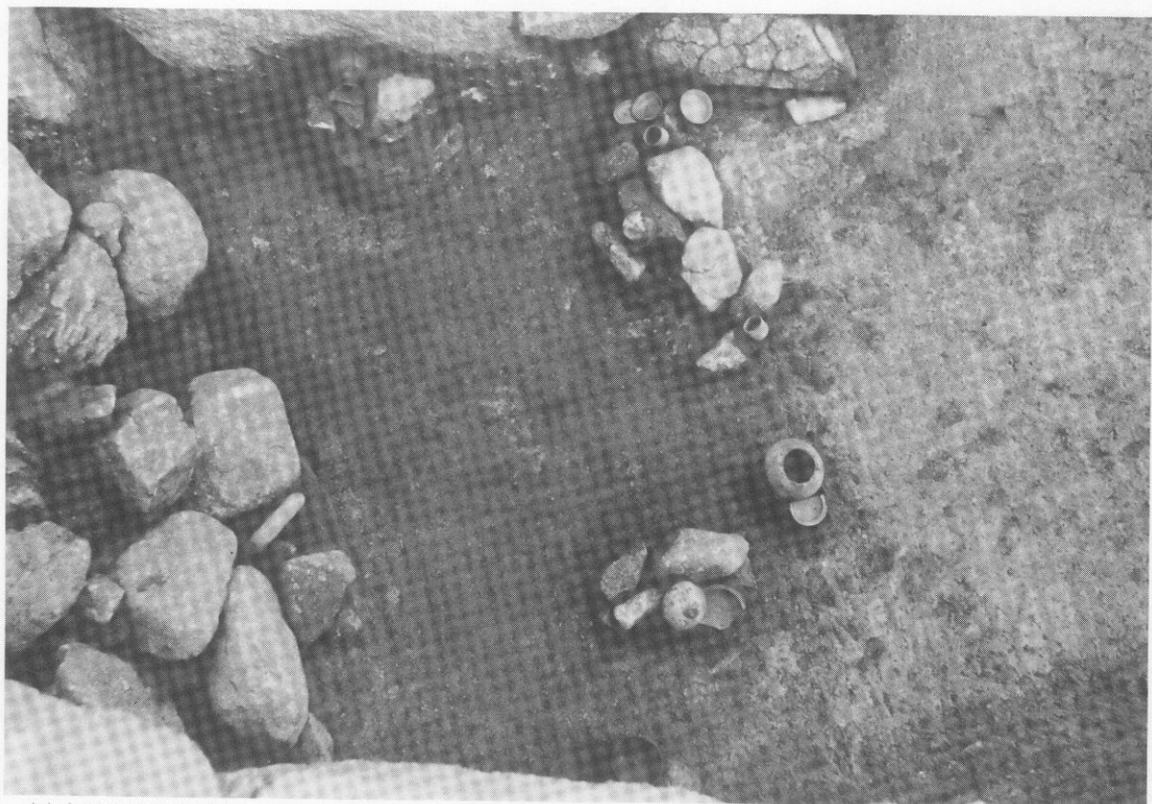
(2) 中通古墳墳丘(東から)



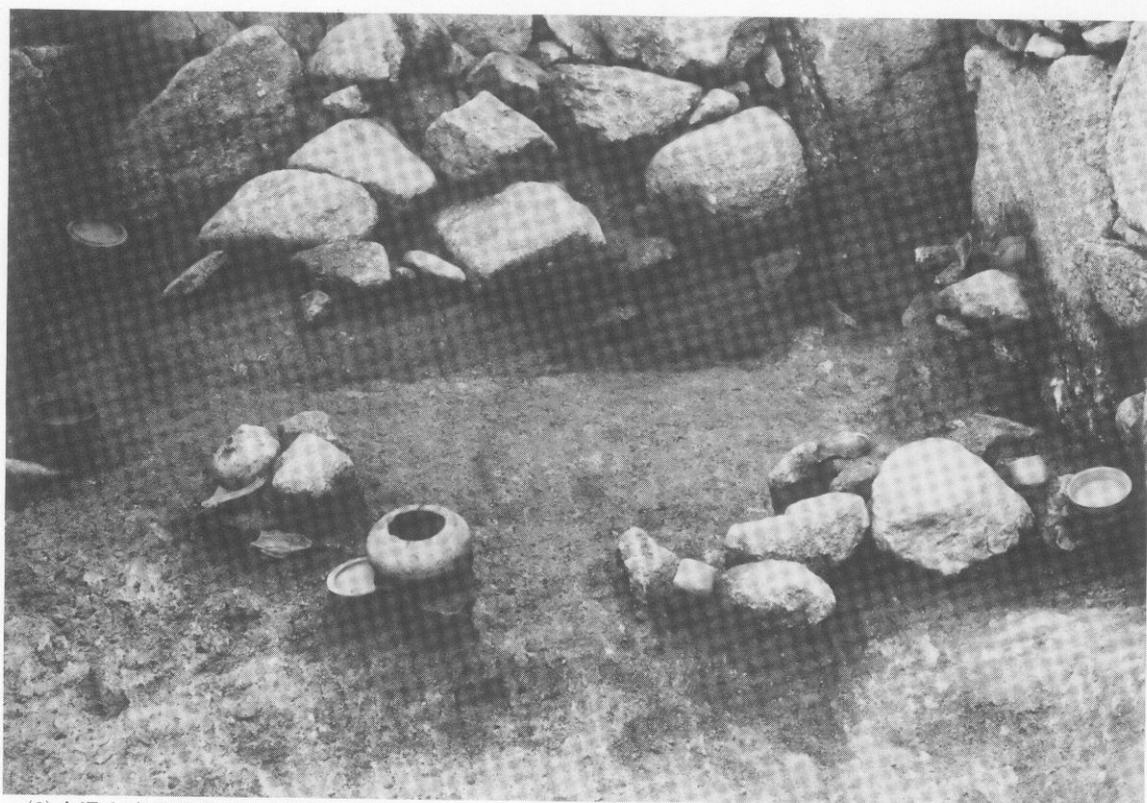
(1) 中通古墳玄室内遺物出土状態



(2) 中通古墳玄室内遺物出土状態



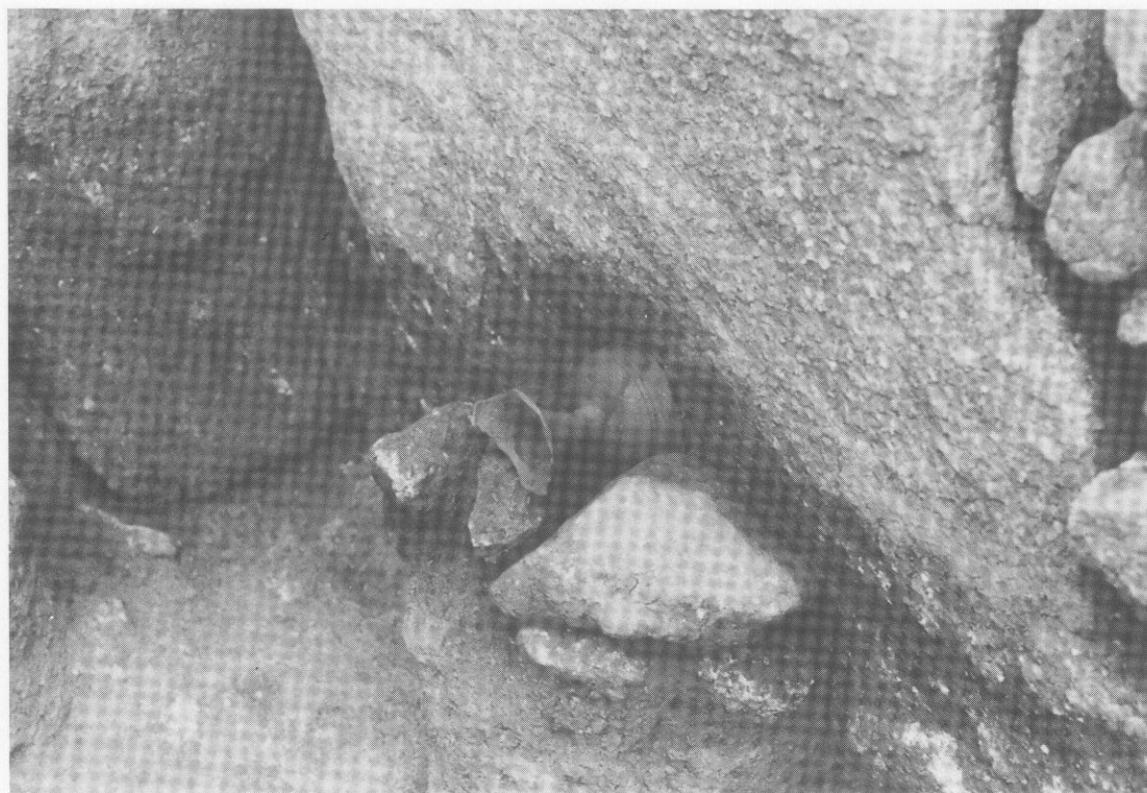
(1) 中通古墳羨道遺物出土狀土狀態



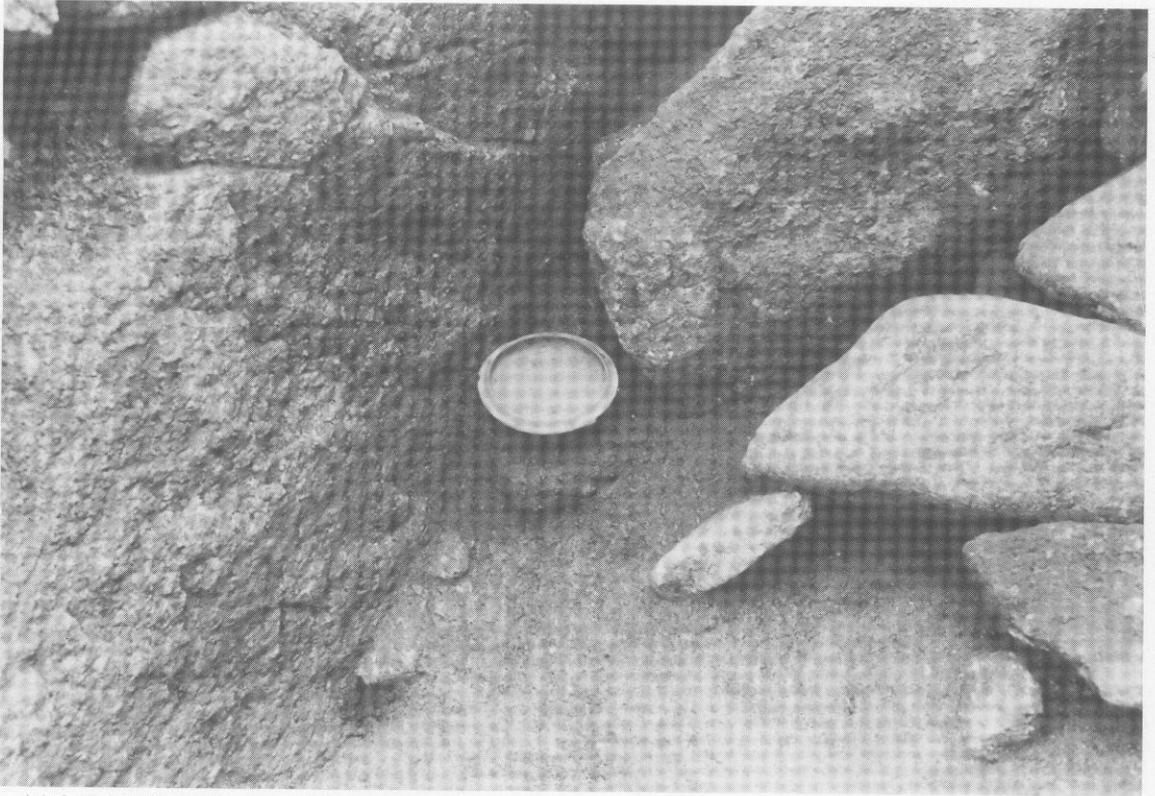
(2) 中通古墳羨道遺物出土狀態



(1) 中通古墳羨道遺物出土狀態



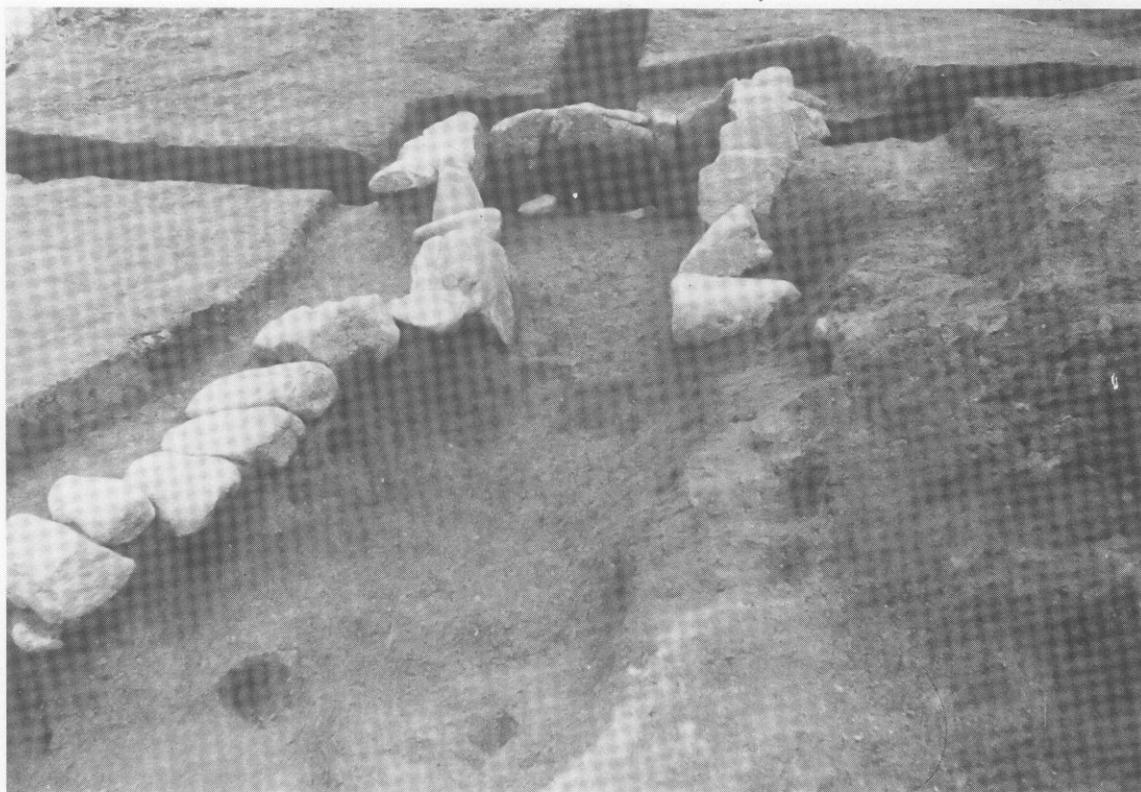
(2) 中通古墳羨道遺物出土狀態



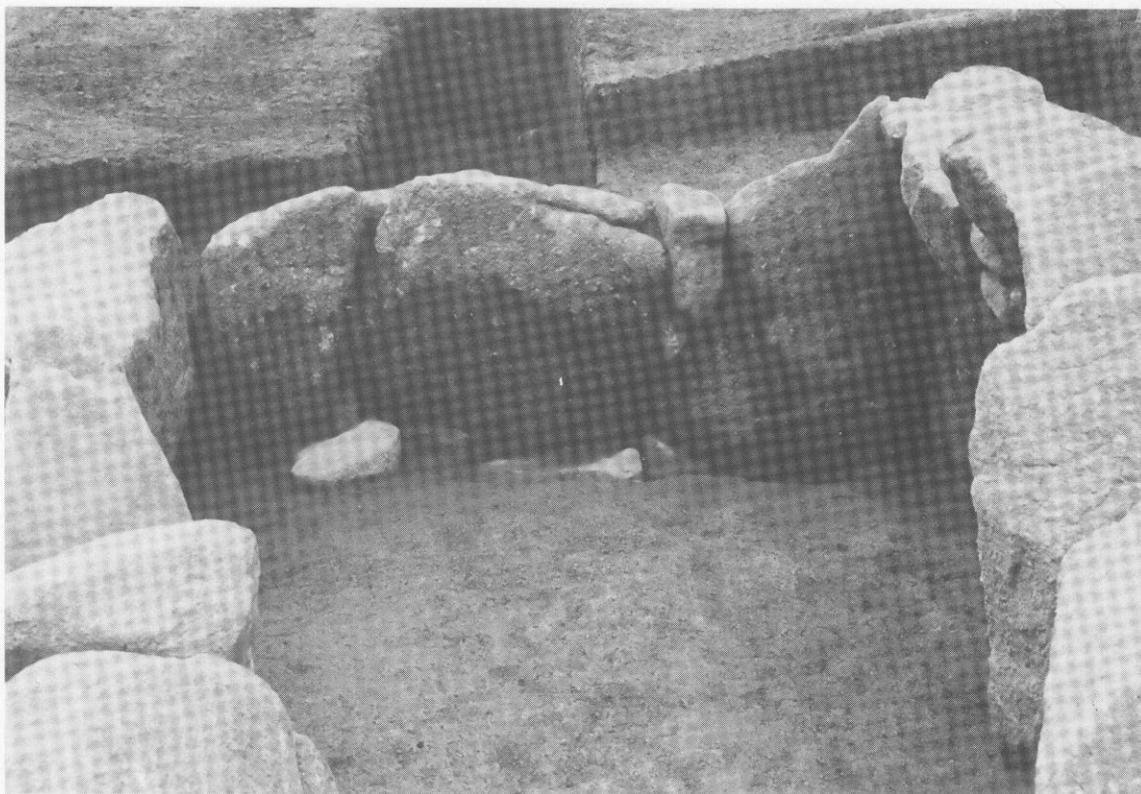
(1) 中通古墳羨道遺物出土状態



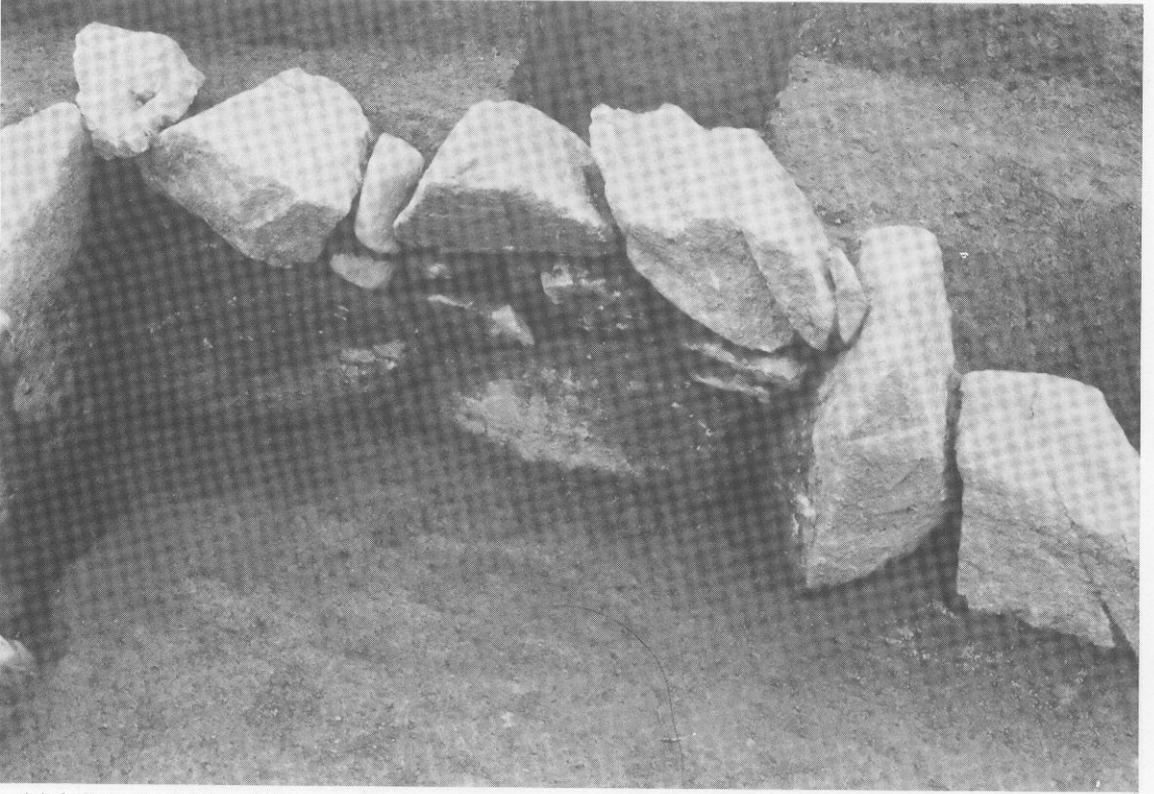
(2) 中通古墳調査風景



(1) 中通S4号填石室全景



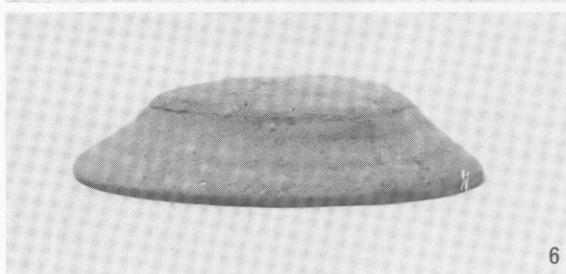
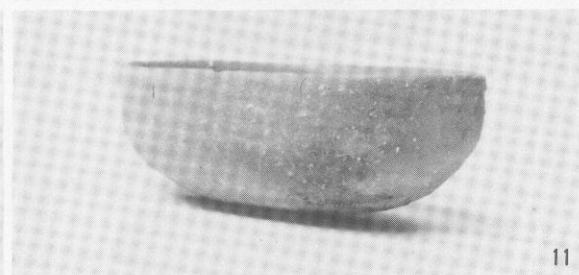
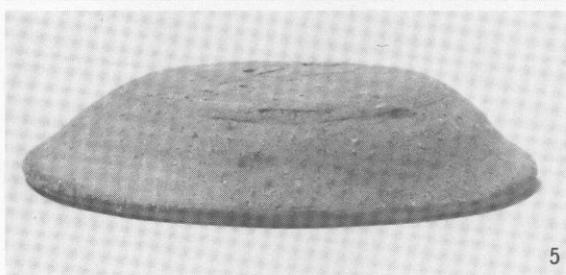
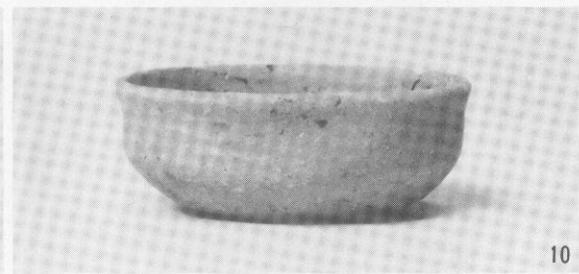
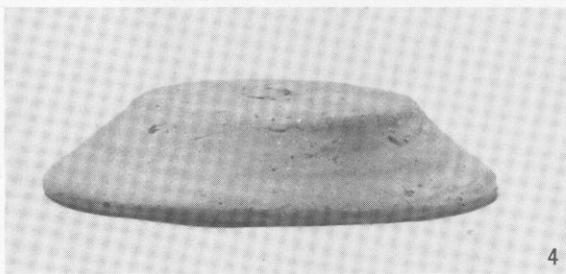
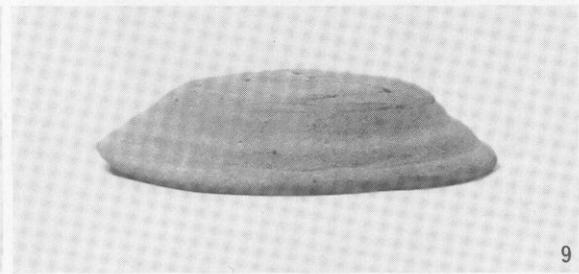
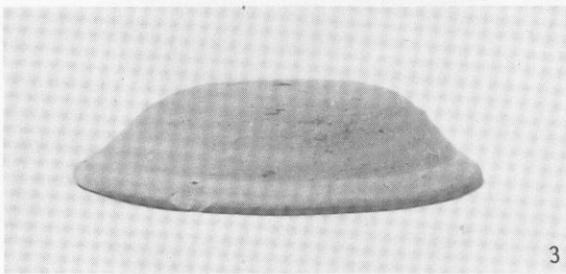
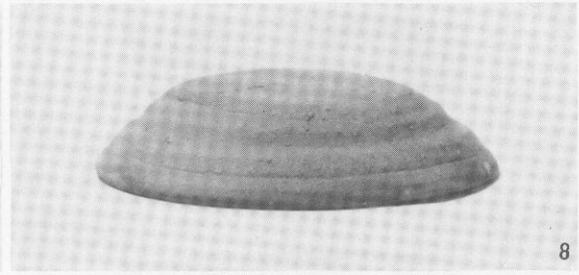
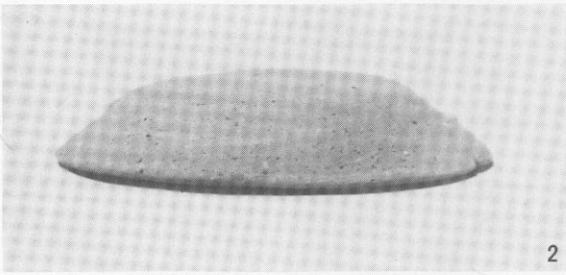
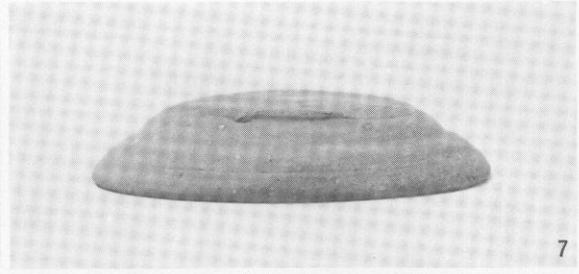
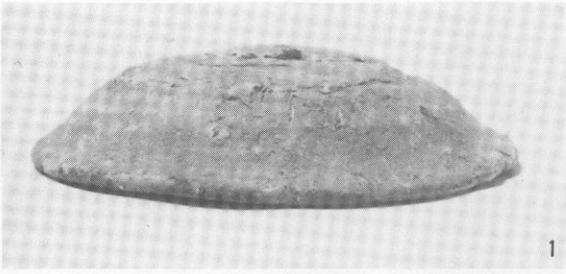
(2) 中通S4号填奥壁



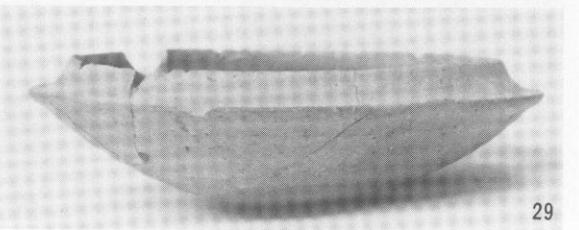
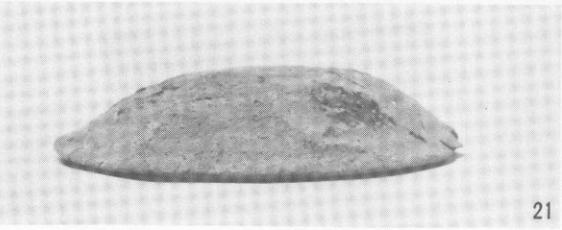
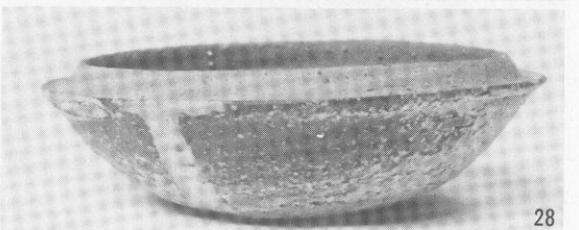
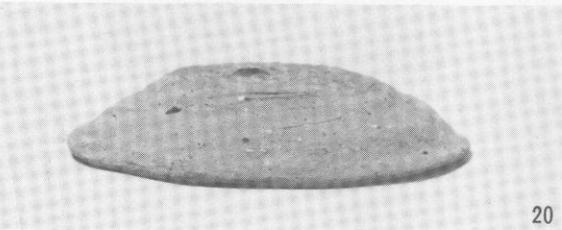
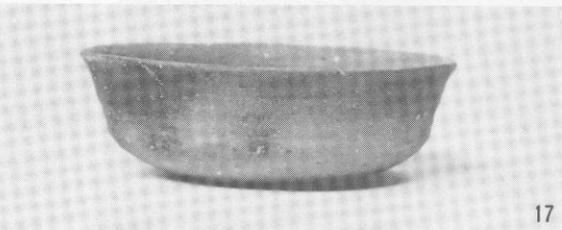
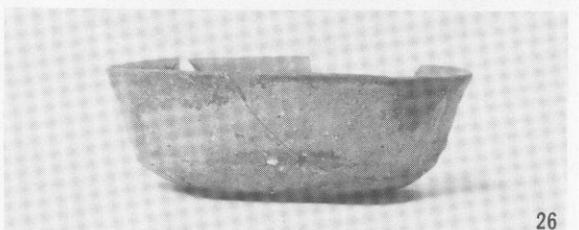
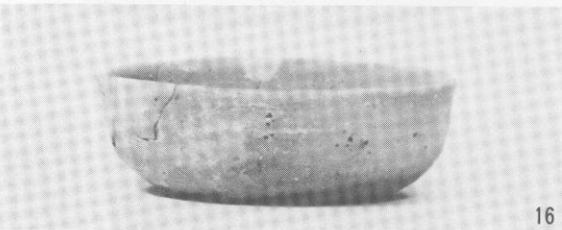
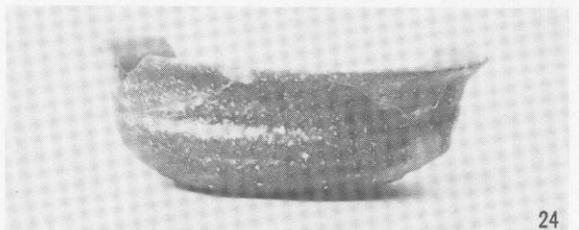
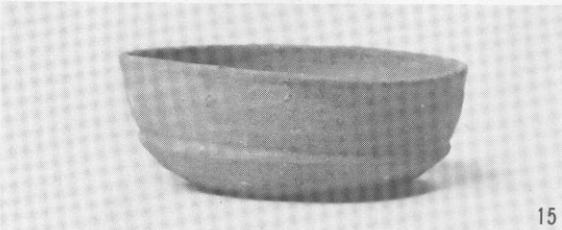
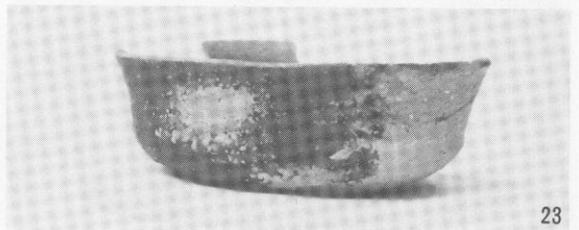
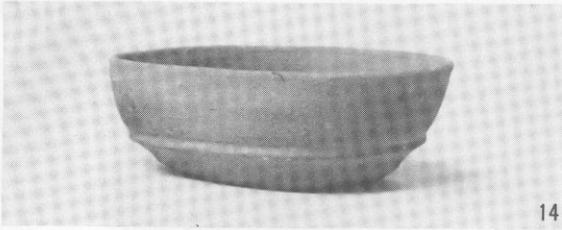
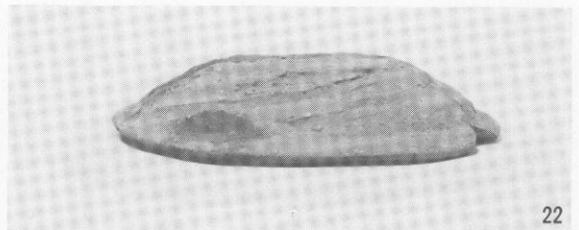
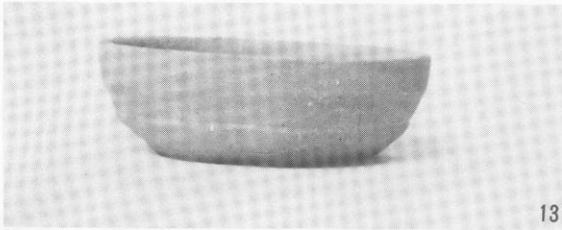
(1) 中通S4号墳石室右侧壁

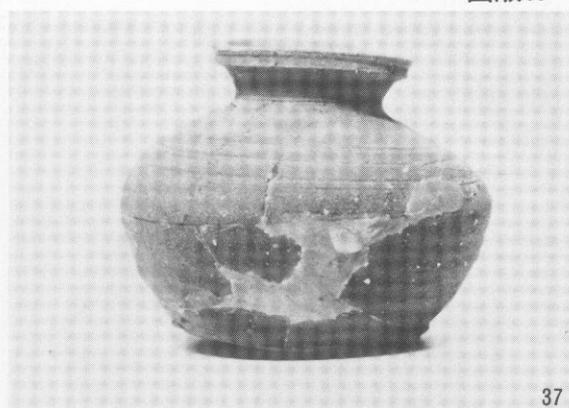
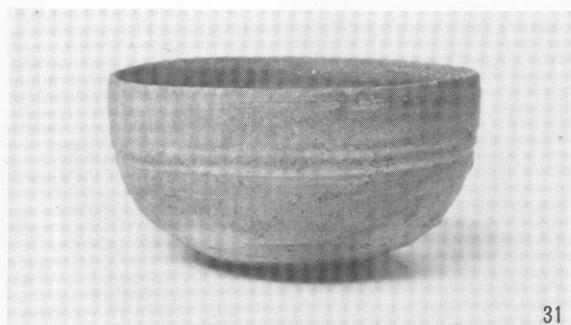


(2) 中通S4号墳掘先出土状態

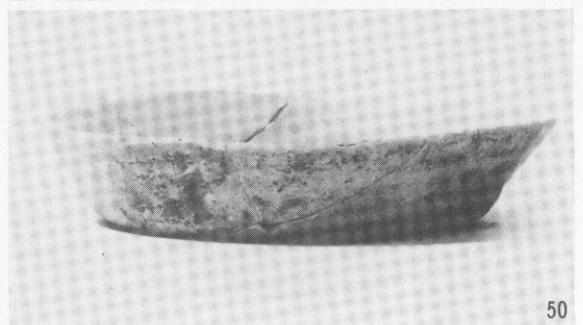
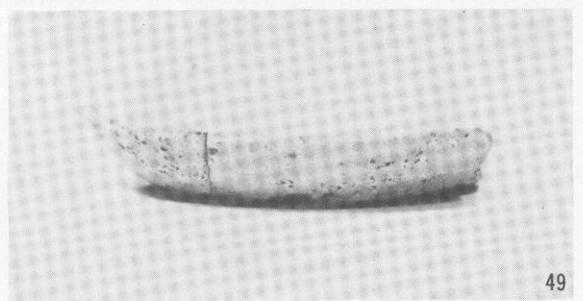
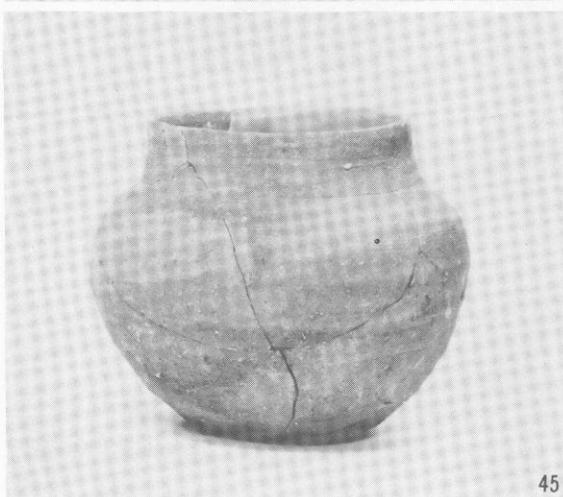
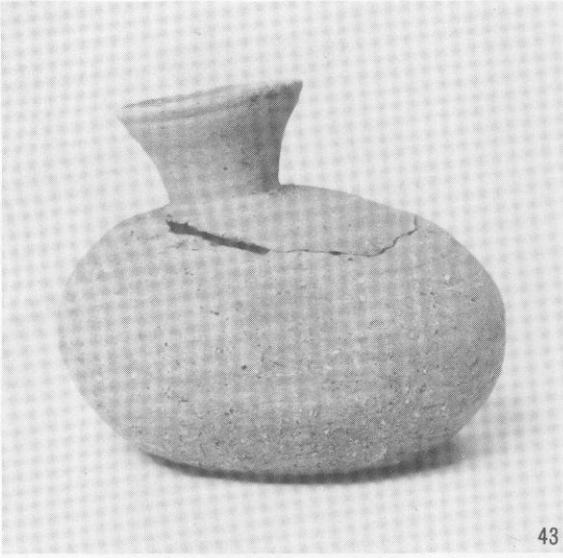


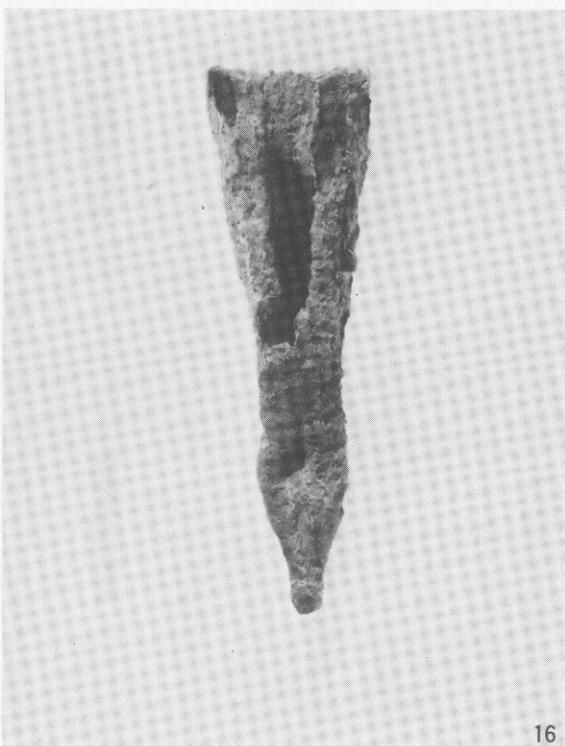
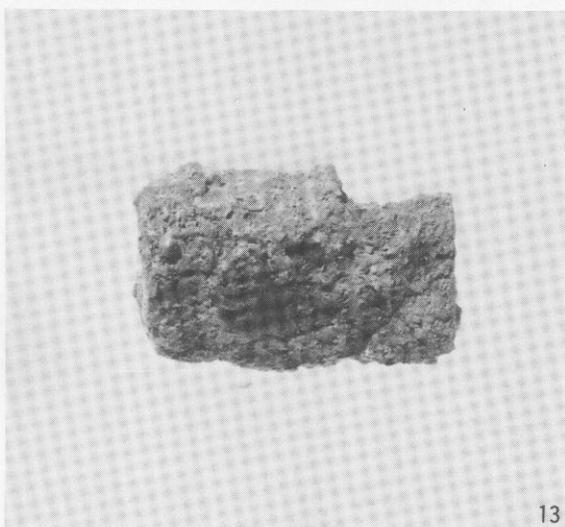
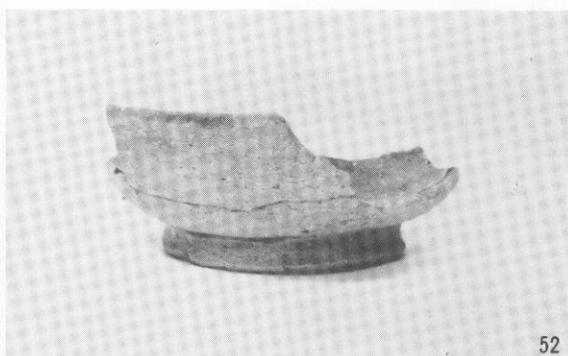
中通古墳出土遺物(1)(玄室)

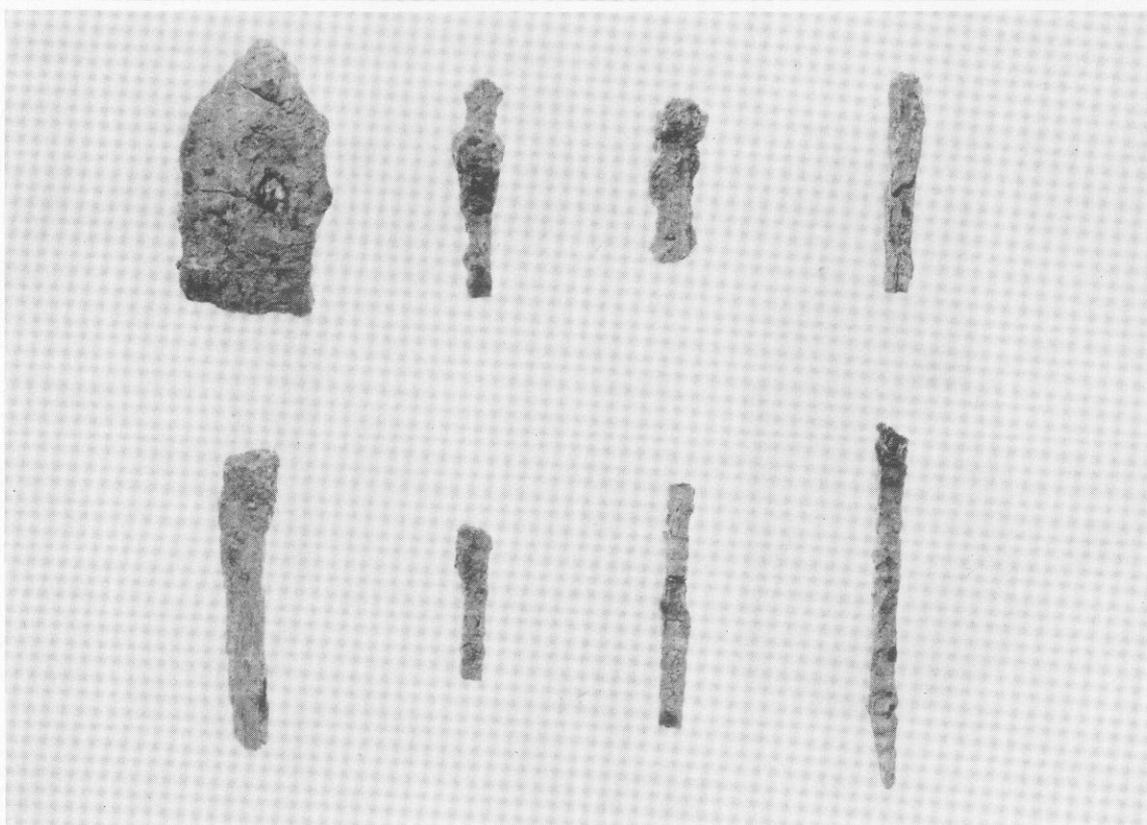
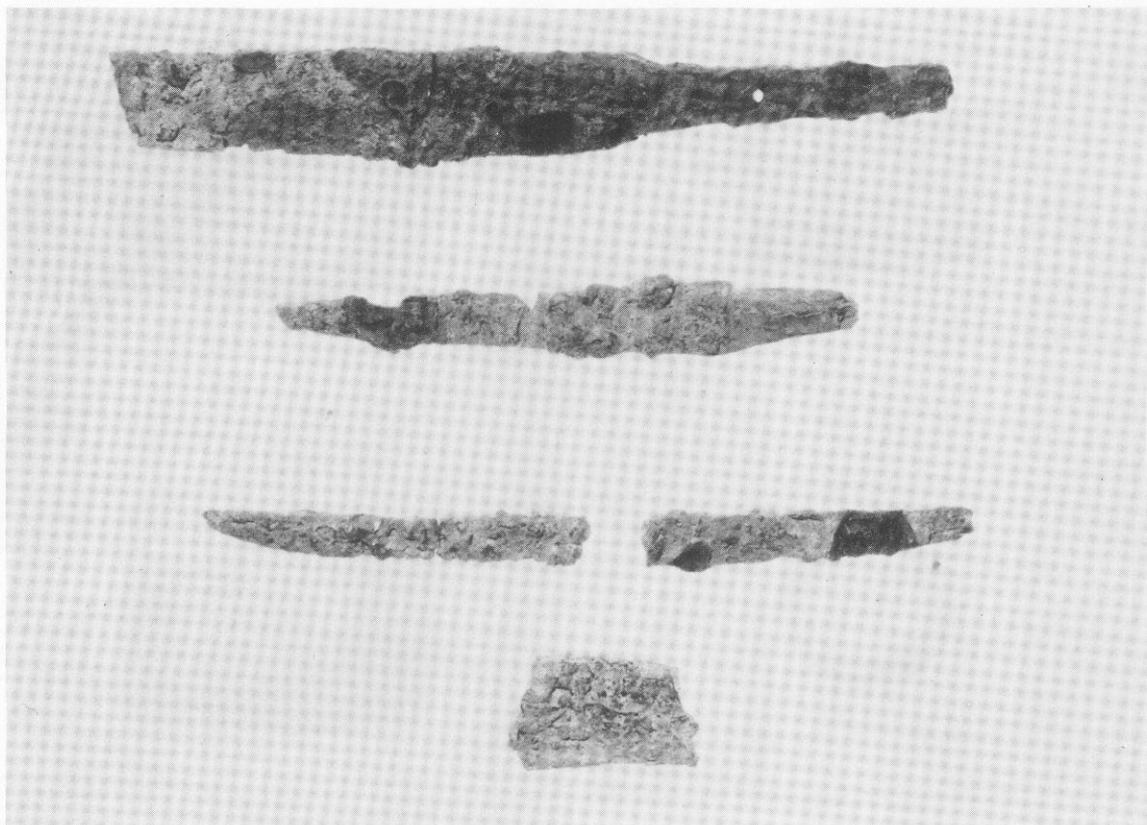


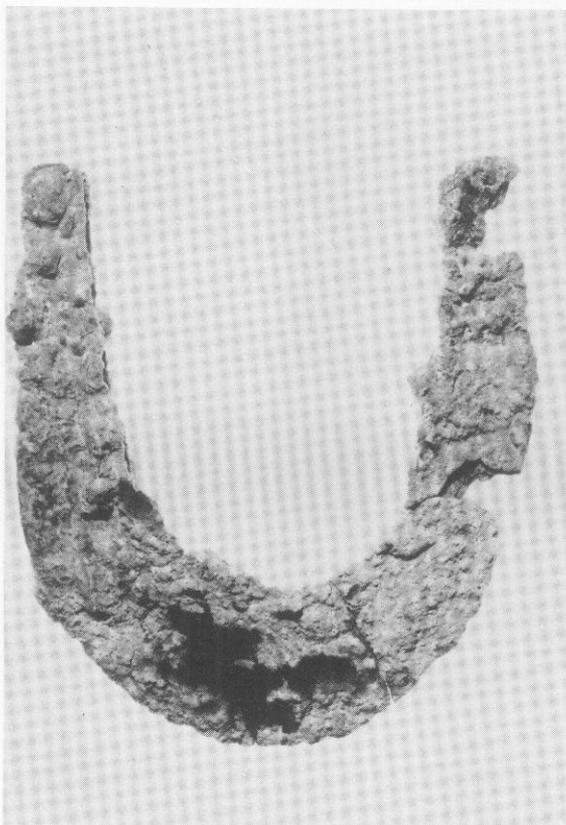
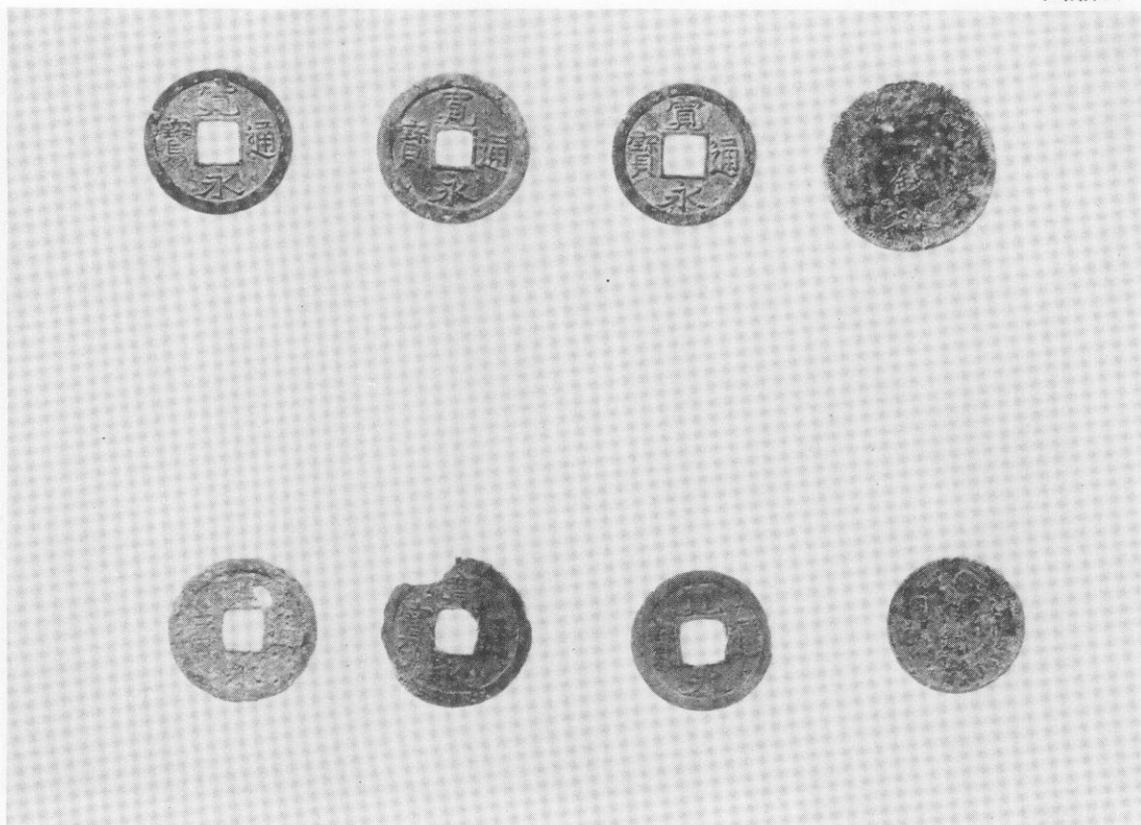


中通古墳出土遺物(3)(玄室~羨道・墓道)





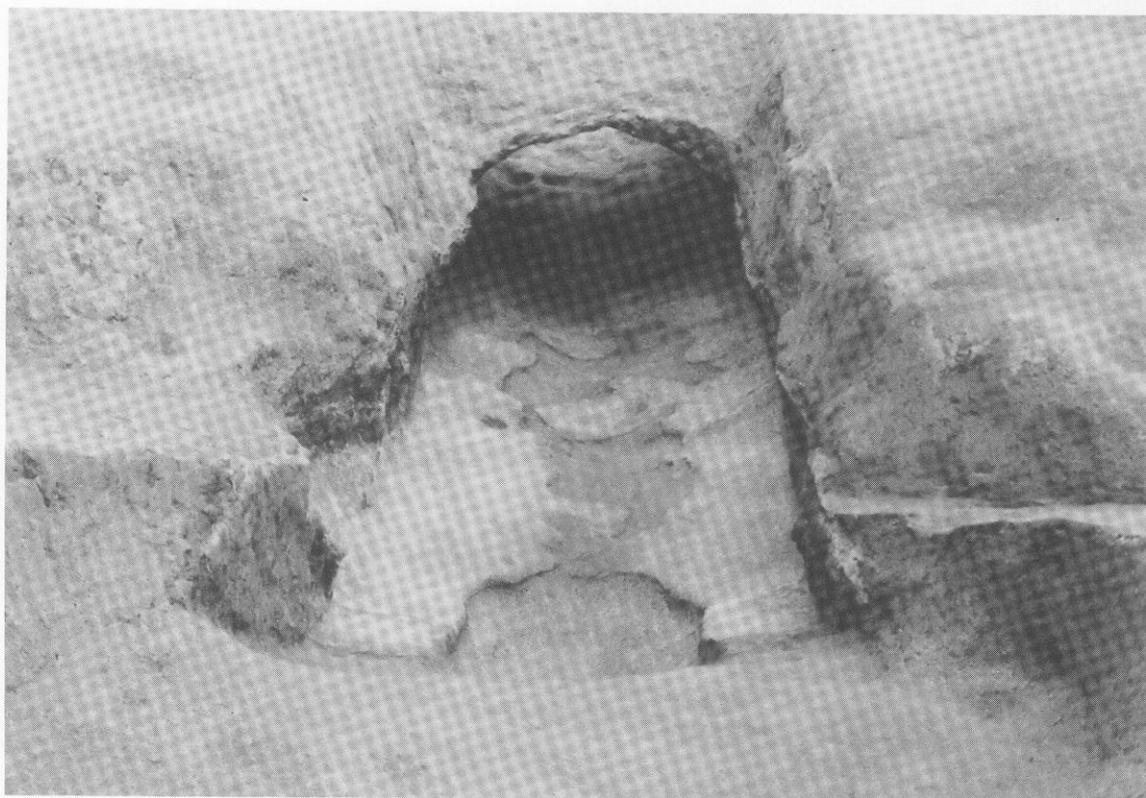




上段：中通古墳出土遺物(7)，下段：中通S 4号墳出土遺物



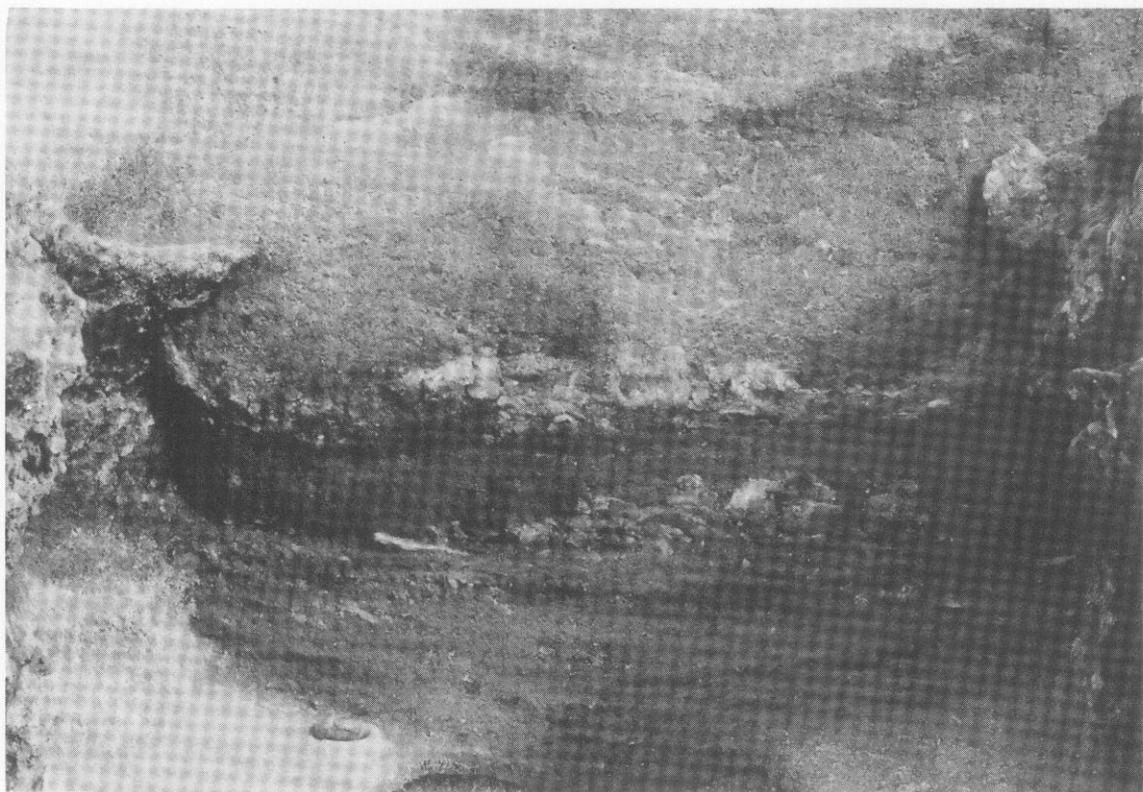
(1) 中通D-1, D-2窠迹气球写真



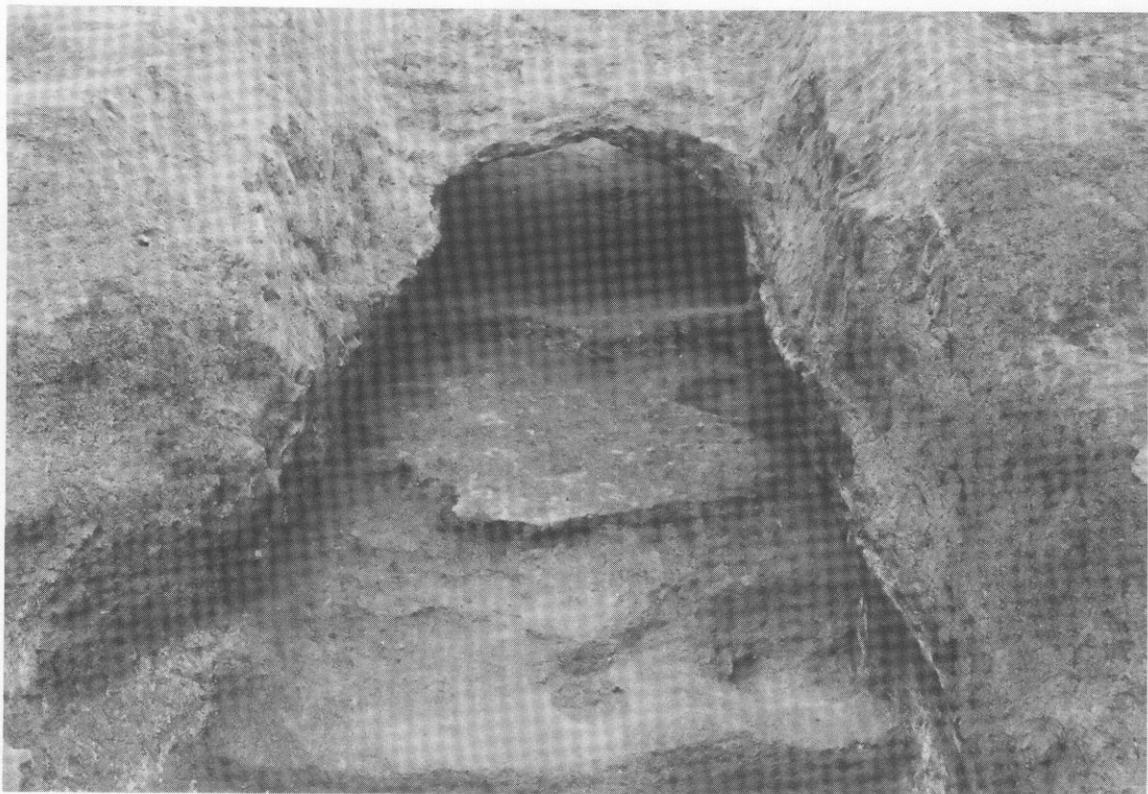
(2) 中通D-1窠迹全景



(1) 中通D-1窯跡燃烧部



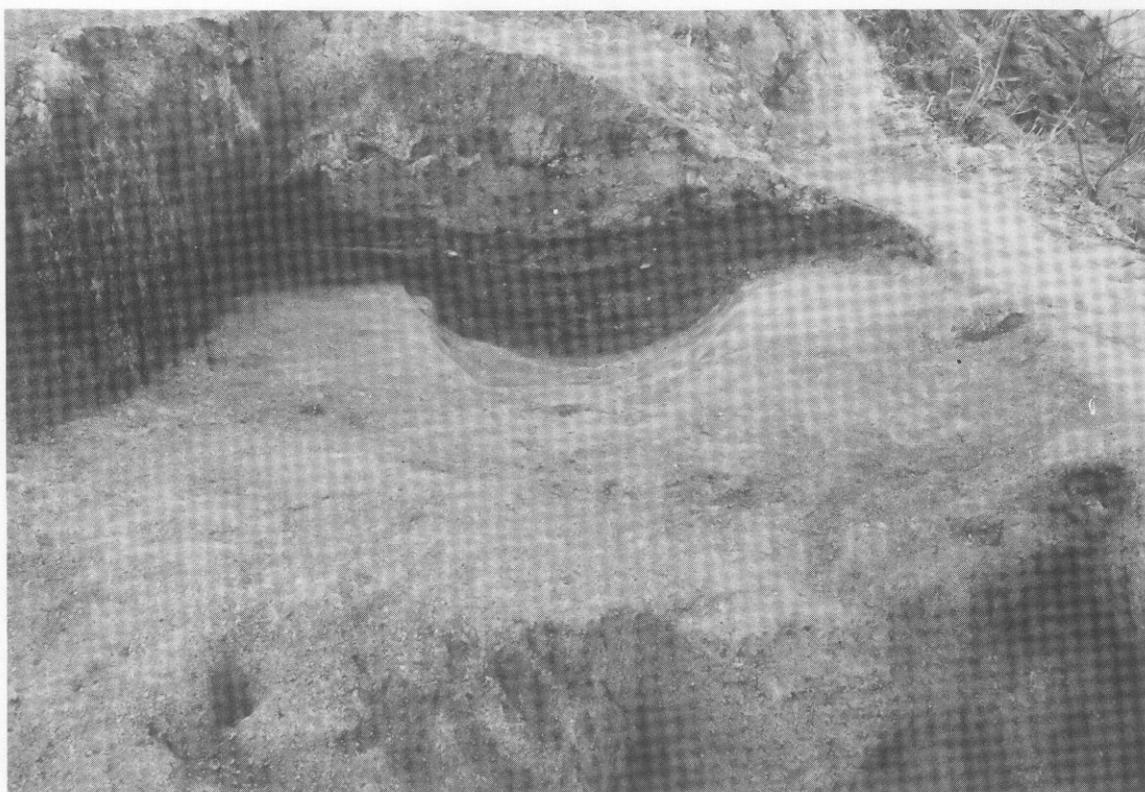
(2) 中通D-1窯跡断面



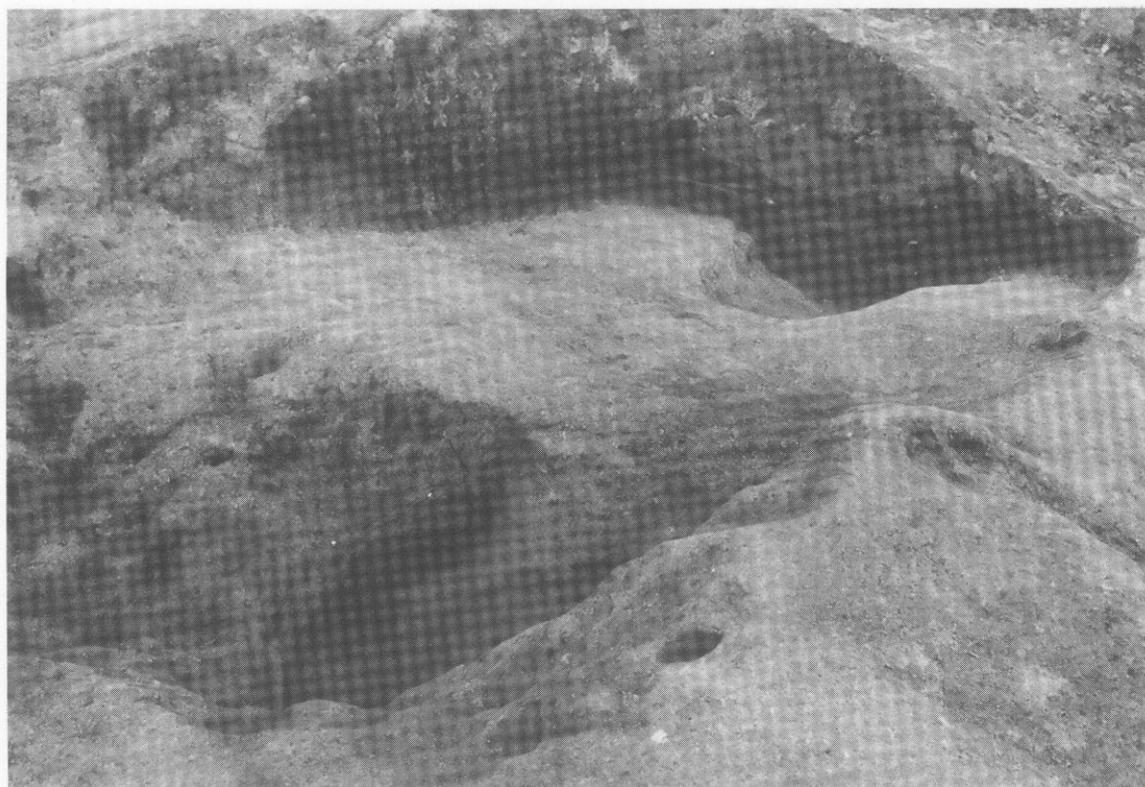
(1) 中通D-1窯跡最終床面



(2) 中通D-1窯跡床断面



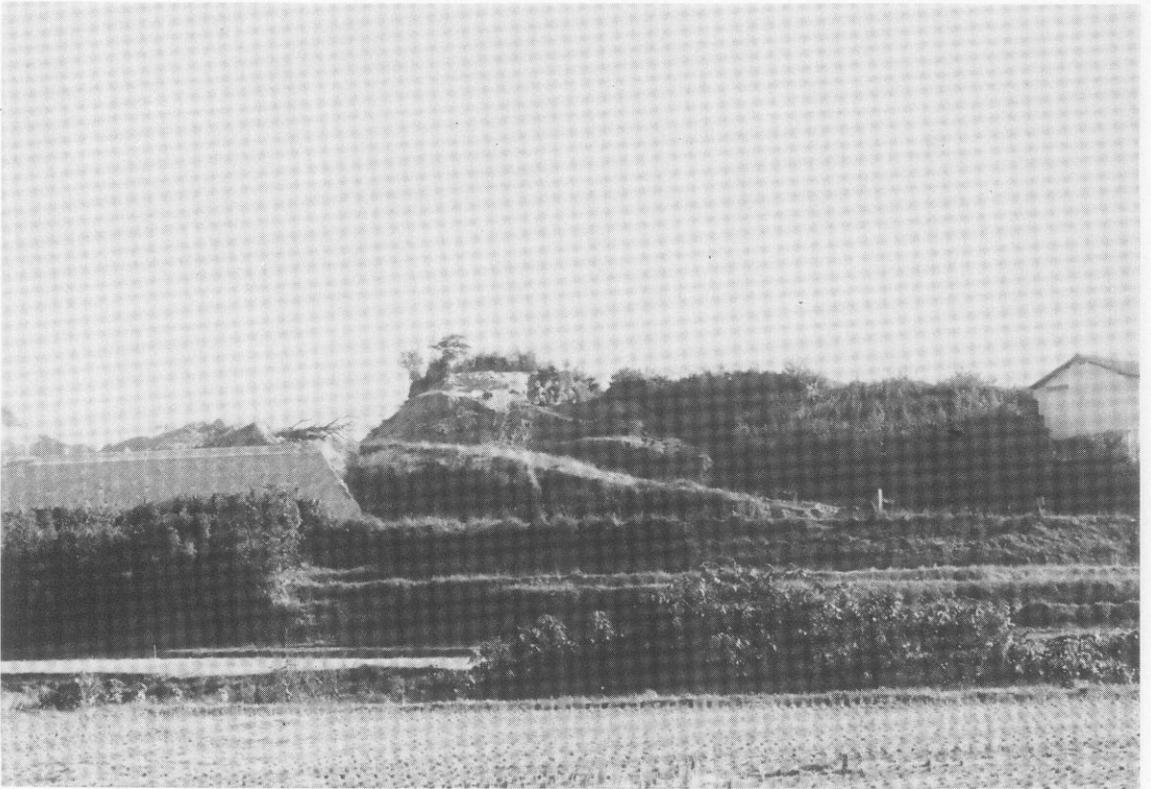
(1) 中通D-2窯跡焚口部



(2) 中通D-2窯跡焚口部



(1) 中通D-1窯跡煙出し部排水溝(D-2窯跡焚口下)



(2) 中通D-2窯跡遠景 (西から)



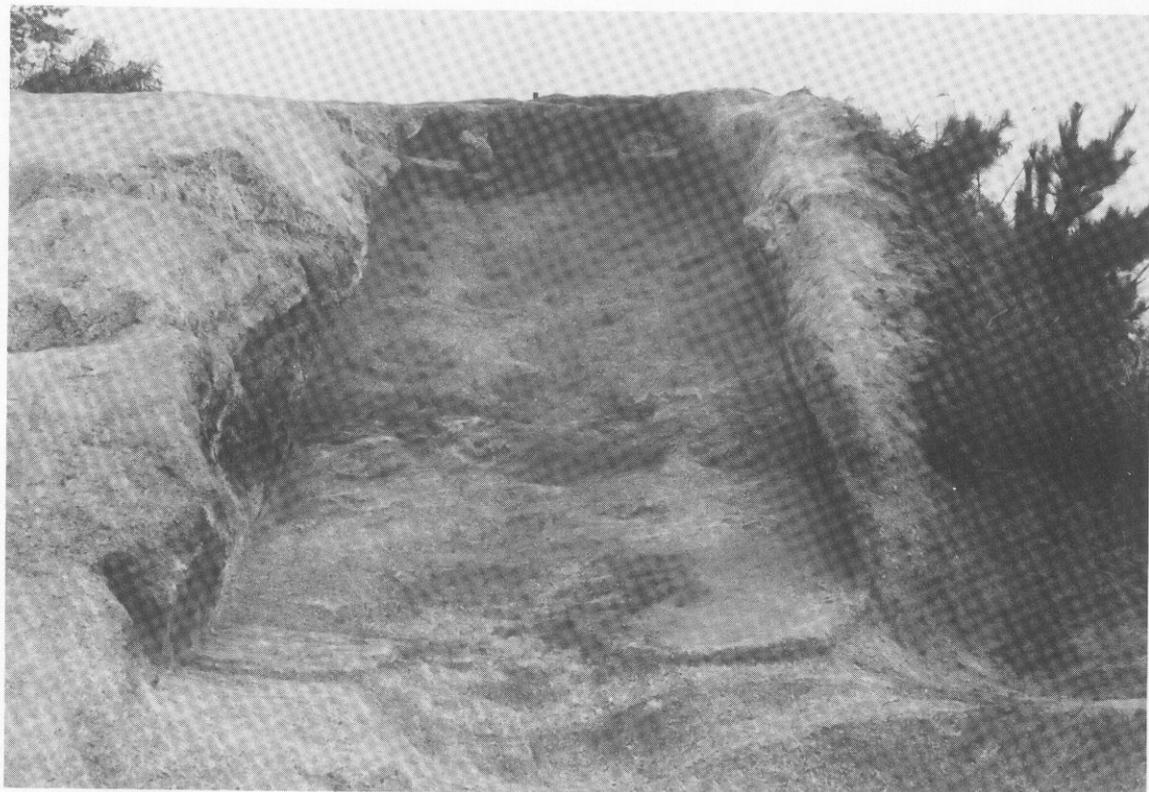
(1) 中通D-2窯跡最終床面



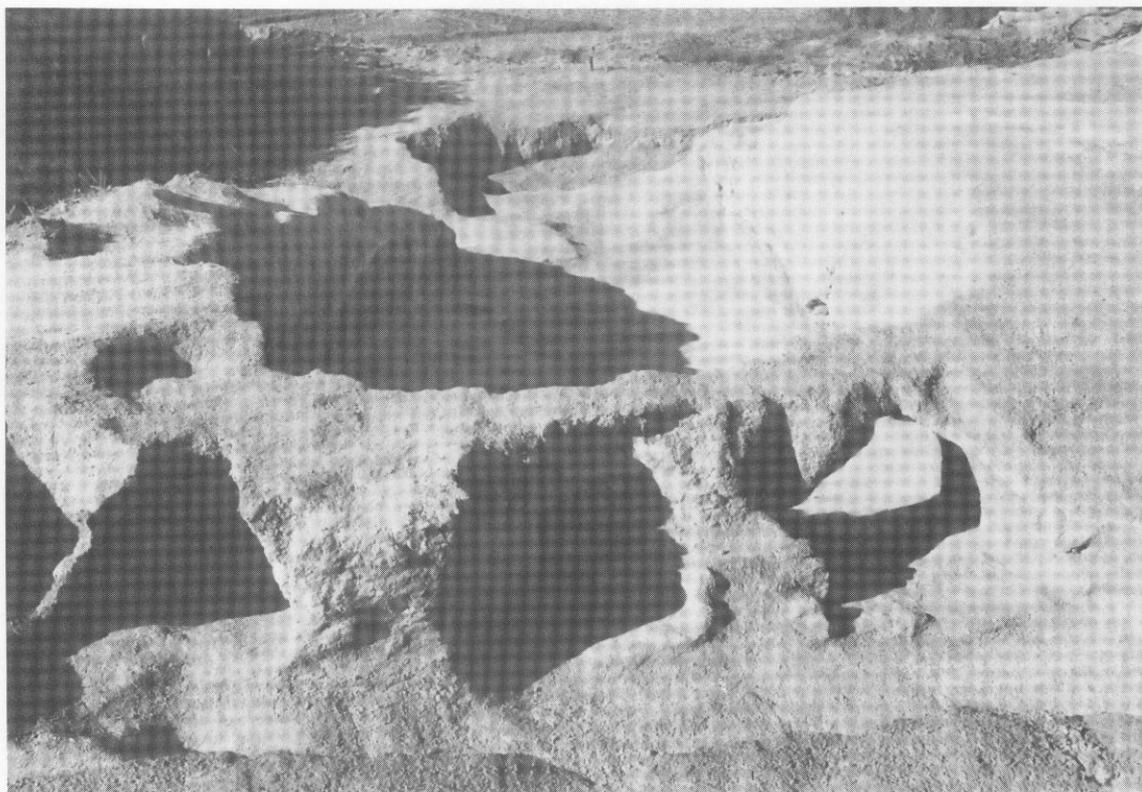
(2) 中通D-2窯跡床断面



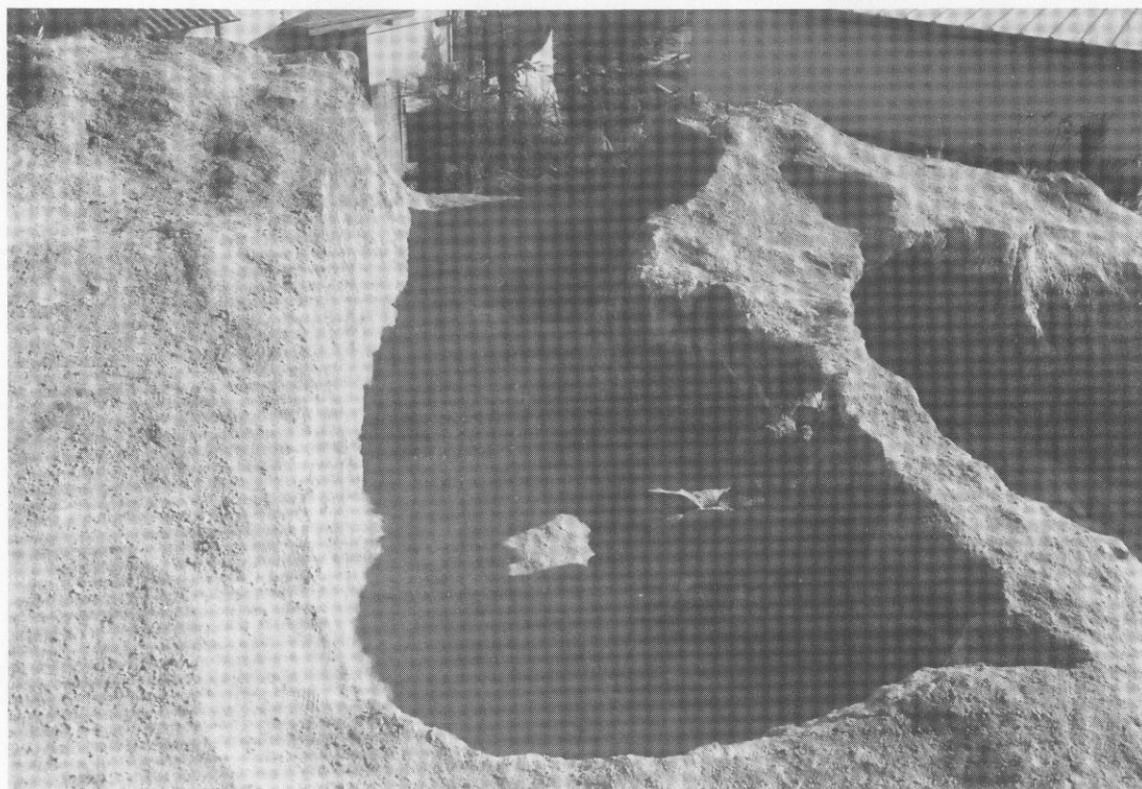
(1) 中通D-2窠跡全景



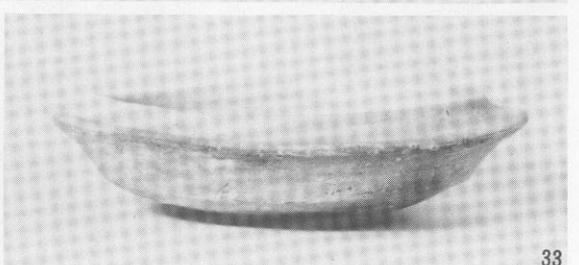
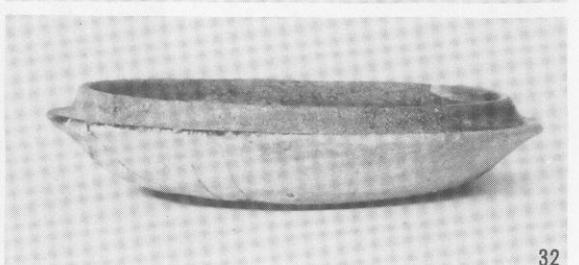
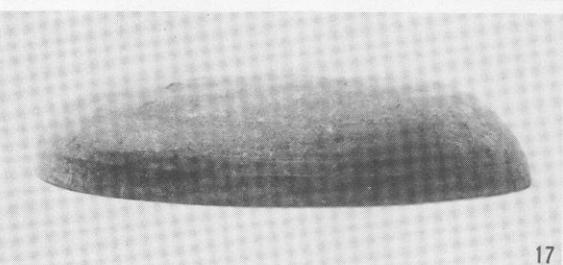
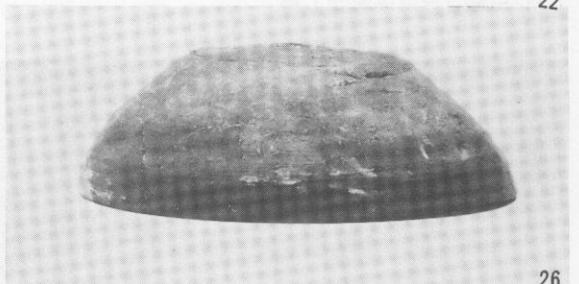
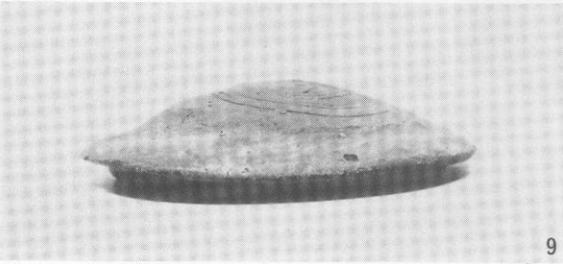
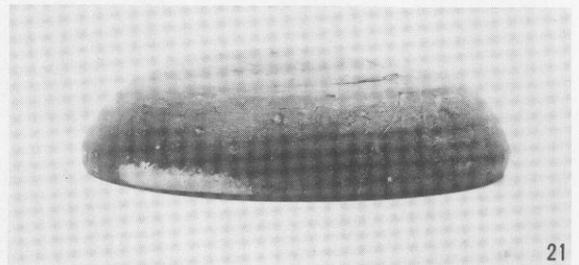
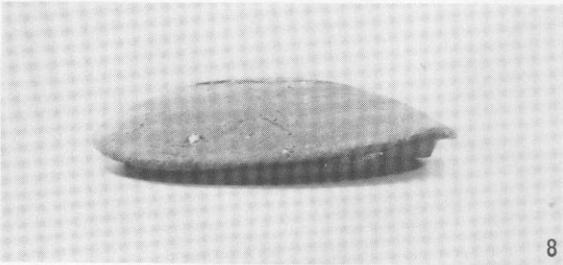
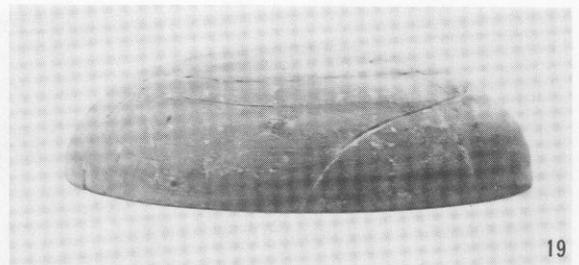
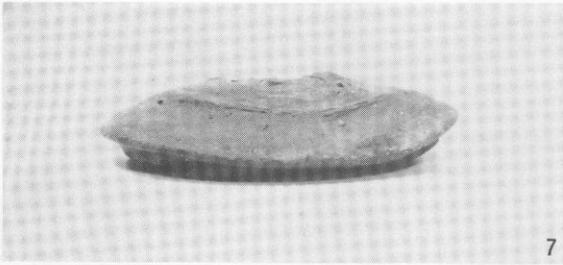
(2) 中通D-2窠跡全景



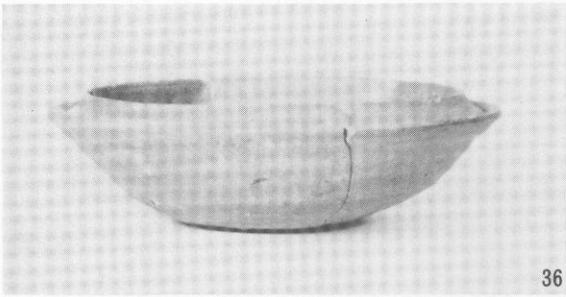
(1) 中通D-2窯跡煙出し部



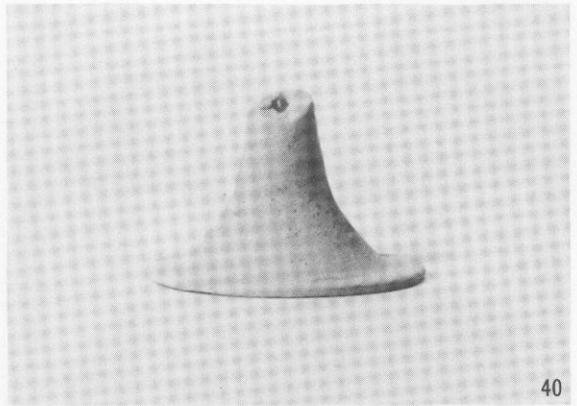
(2) 中通D-2窯跡排水溝



中通D-1窯跡出土須惠器(1)



36



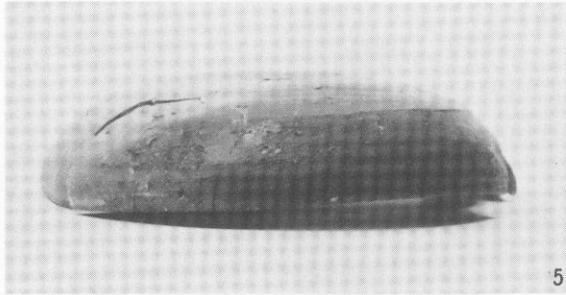
40



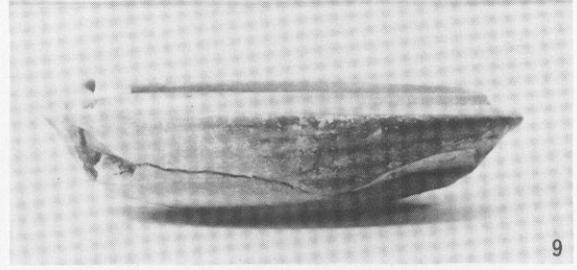
39



41



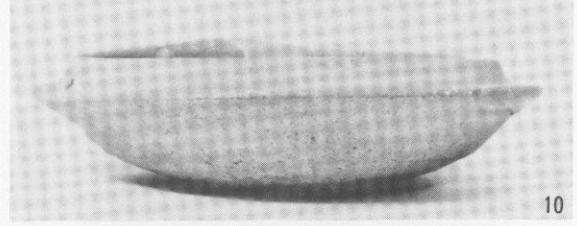
5



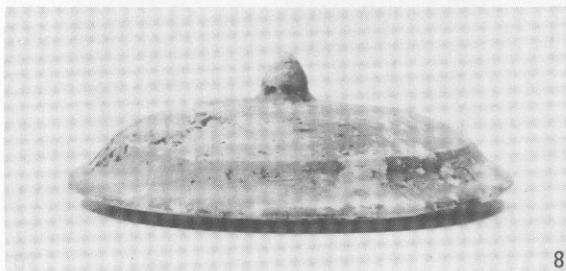
9



7



10

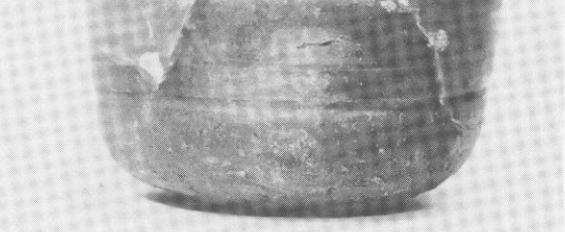
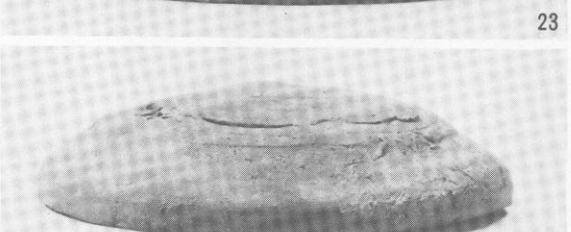
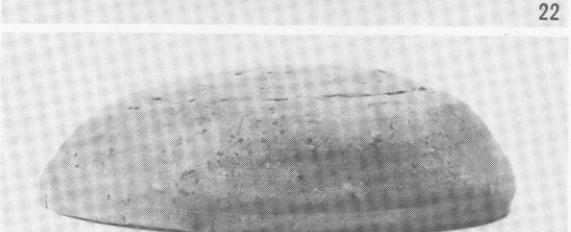
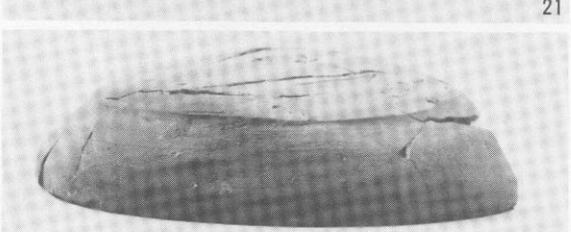
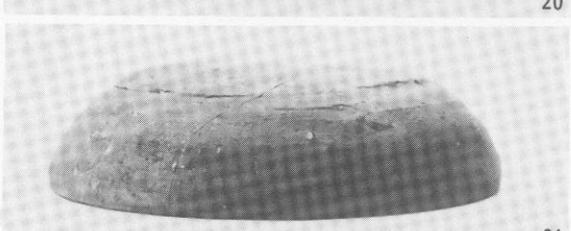


8



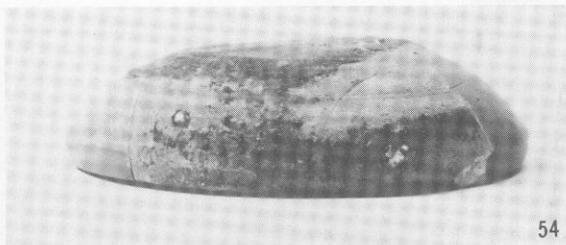
13

中通D-1窠跡出土須恵器(2) (36~41) / 中通D-2窠跡出土須恵器(1) (5~13)

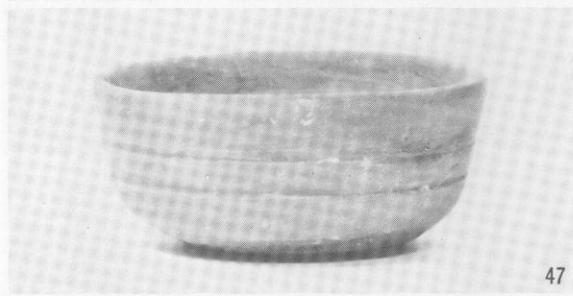




44



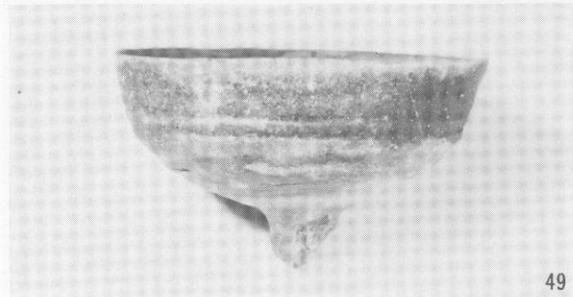
54



47



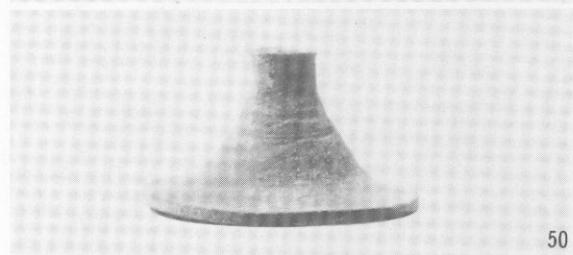
55



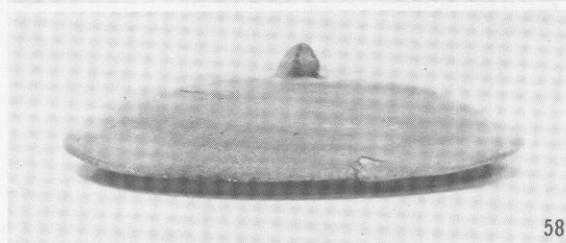
49



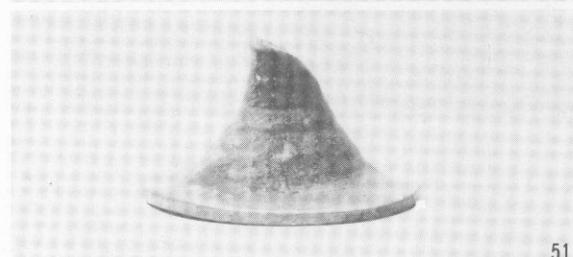
57



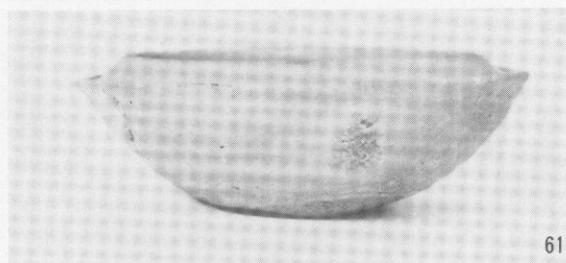
50



58



51



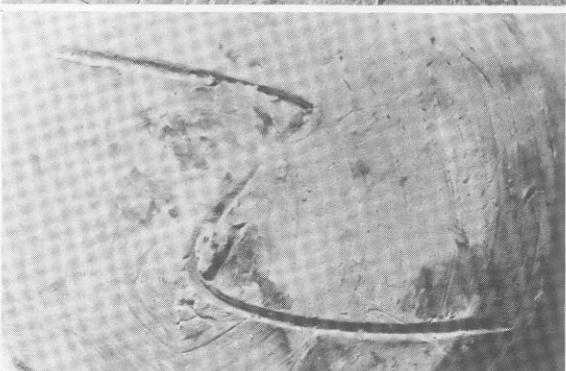
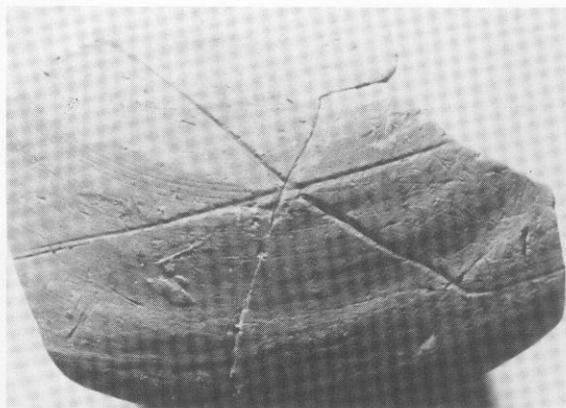
61



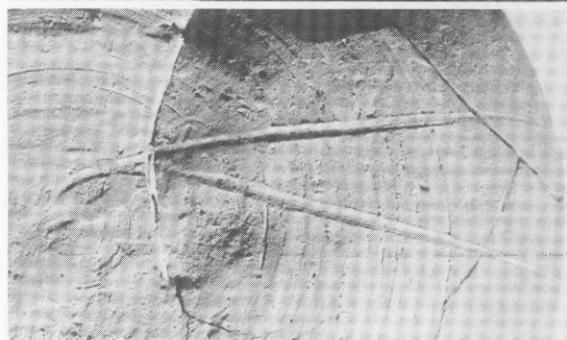
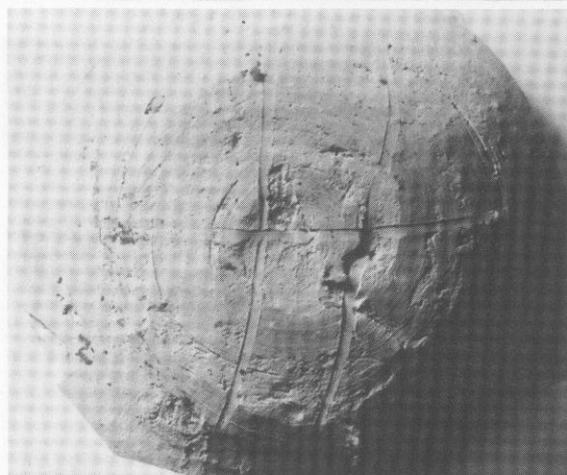
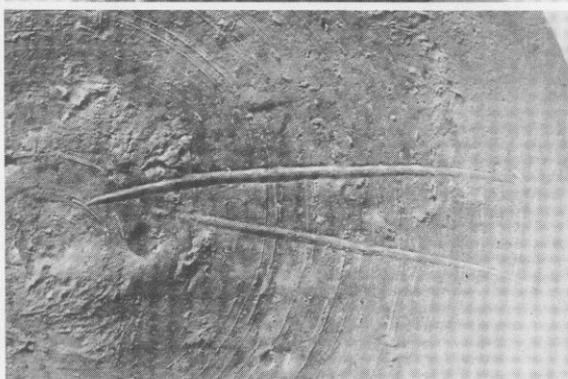
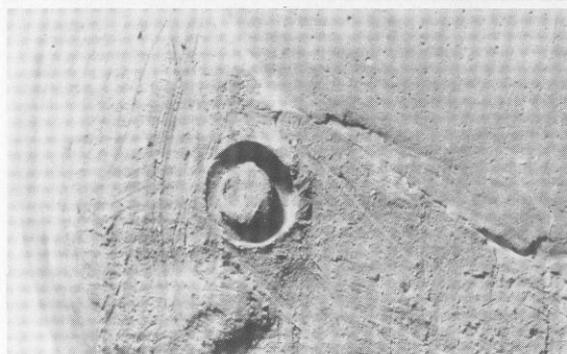
53



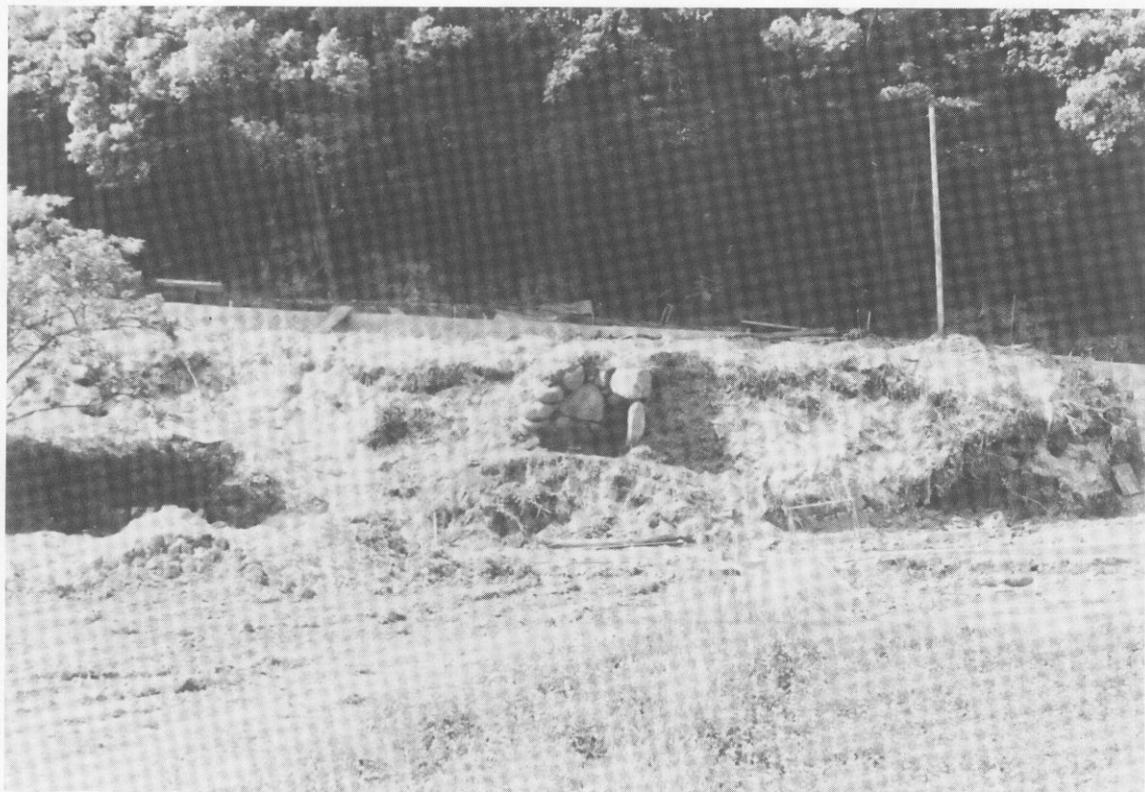
62



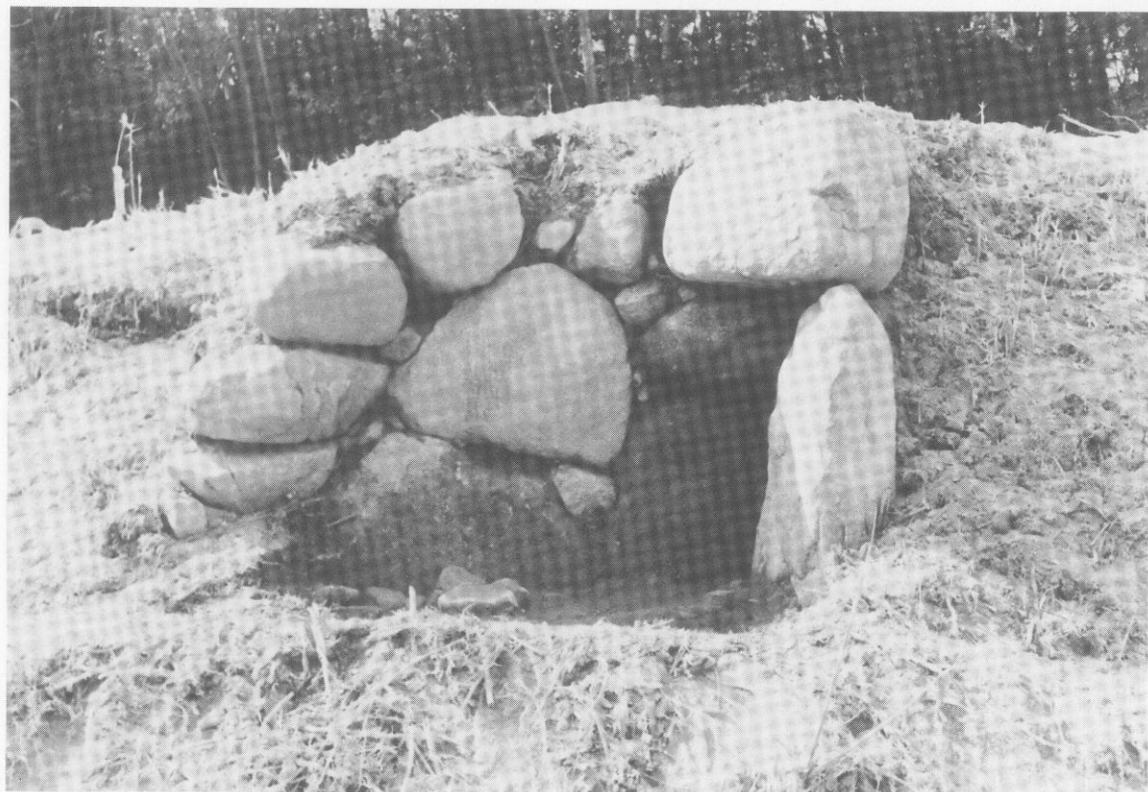
中通D-1窯跡出土蓋杯ヘラ記号



中通D-2窯跡出土蓋杯ヘラ記号



(1) 月ノ浦古墳遠景



(2) 月ノ浦古墳石室

大野城市文化財調査報告書

第 9 集

昭和57年 3 月31日

発 行 大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町 2 丁目17番地

印 刷 凸版印刷株式会社
福岡市中央区薬院 1 丁目17-28

1号墳	2号墳	3号墳	4号墳	5号墳
6号墳	7号墳	8号墳	9号墳	10号墳
11号墳	12号墳	13号墳	14号墳	
S1号墳	S2号墳	S3号墳	S4号墳	
中通古墳				

付表 中通古墳群石室プラン一覧表